

悠

遊

第十四号



企業OBペンクラブ

表紙の絵 「さらば 愛しき東京駅」

山縣 正靖

東京駅が建て直されることになった。昭和の後半、戦後の復興と成長期の日本の表玄関として親しんだ名建築で、今回、悠遊の表紙にその英姿を描かせていただけたことは絵描きとして身に余る光栄である。

この建物は二代目である。先代は日露戦争の勝利を記念して大正三年竣工、時の日本建築界の第一人者辰野金吾博士の設計による三階建て、ビザンチン風の大ドームを戴く豪華な建物で全長三五メートル、関東大震災にはびくとしなかったが、硫黄島玉砕の後に昭和二十年五月のB29の爆撃でドームと三階を吹き飛ばされた。

旧国鉄は戦後の復興のスタートにあの苦しい中で今の東京駅を再建した。鋭く天に向かう大屋根は復興への心意気をあらわす質実剛健な美しさを持つ。われわれが目にする構内の巨大な円天井は旧海軍技術者が残った航空機用ジュラルミンを使い格納庫大屋根の設計技術を生かして作ったものである。よくぞ作り、そして、よくぞ保った。

かつて東京駅のホームでは地方に栄転する企業戦士を歓呼の声で送り出したものである。

「ホームの蔭で泣いていた可愛いあの子を忘らりよか」 今や昭和の企業戦士とともに栄光の退役を迎える愛しき東京駅を歓呼の声で送りたい。

三代目の新東京駅は初代と同じ三階建て、挿絵の大ドームを戴き平成二十三年に完工の予定とのことである。また 現二代目と同じ美しさをもつ赤煉瓦の旧三菱一号館が近く復旧されるそうである。乞うご期待。機能一点張りガラス箱のビルしか建てられなかった戦後世代としてはこれは嬉しい話ではないか。

企業OBペンクラブ同人誌

《第十四号》

目次

◇巻頭言……………西川 武彦 4

Ⅱ自由テーマⅡ

◇おいしさを笑顔に……………阿部 洋己 6
 ◇アメリカ偏重……………藤岡 豊 8
 ◇秋彼岸に……………濱田 優^{ゆたか} 10
 ◇ローマでの見聞……………今川 確郎 12
 ◇二人の女王……………金京 法一 14
 ◇或馬のはなし……………木下 洋介 17
 ◇今年は好い年……………北田 純一 19
 ◇ヘブライ語研修旅行に参加して……………松浦 武弘 21
 ◇ラゴスの追憶……………中村 爽 24
 ◇コウノトリは優雅な鳥だった……………中洲 靖雄 26
 ◇叩きつけてよを松下幸之助の対○○のカウサンゲ……………大西 宏 28
 ◇東京を捨てる……………大塚 滋 30
 ◇クジララトルノハヤメナサイ……………莊司 忠志 33
 ◇情報通信と放送の行方……………杉浦 右蔵 35
 ◇孫と障害 弱者との共存社会へ……………高橋 孝蔵 38

◇人間―この複雑怪奇なものの人間はうそをつく…都甲 昌利 40
 ◇オウム真理教の麻原彰晃は本当に有罪なのか？
 マスコミ報道はどこまで信用できるのか？……………豊前 華^{はな} 42
 ◇上高地の「鵜飼正直・山岳蔵書」……………鵜飼 直哉 44
 ◇インターネットと世界の窓……………渡里 清 46
 ◇親の介護は子の責務……………吉寄 清巳 48
 ◇フルベッキのこと……………吉田 邦彦 50

Ⅱ特集・仕事の風景Ⅱ

◇バイヤー三題……………安藤 晃二 54
 ◇Entertainer(お座敷接待)……………榎本喜三郎 56
 ◇私への勲章……………松谷 隆 59
 ◇タッチパネルを支えた人々……………中川路 明 61
 ◇先輩の功罪……………大平 忠 63
 ◇多くの人に支えられ、大過なく……………佐久間直正 65
 ◇始末書……………上原 利夫 67

Ⅱ特集・昭和を生きてⅡ

◇川の流れのように……………野瀬 隆平 70

◇昭和二十年前後……………山下 春夫 72

◇昭和史の通奏低音……………西川 武彦 74

◇塗りつぶされた教科書「国民学校から「新制」中学へ……………大月 和彦 76

◇昭和を生きて……………中村 将陸^{まさむね} 78

◇私の昭和史「今は天国」……………大泉 潤 80

◇昭和に生きて「半世紀生きた男の反省記」……………関谷 裕彦 82

◇昭和に生きる「実人生の時代」……………森田 茂 84

◇昭和を生きて……………岩崎洋一郎 86

◇八十年の人生を振り返って……………三宅 劭 89

◇昭和を生きて……………大庭 定男 91

◇愛国心にご用心……………石川 正達 93

◇太平洋戦争に軍国日本は勝てた……………玉山 和夫 95

Ⅱ 創作短編Ⅱ

◇片想い六十年……………古川さちお 98

◇一件落着……………平尾 富男 101

◇“殺人にも一分の理”天界でも!?……………新山章一郎 103

◇某 日……………清水 勝 106

Ⅱ 短信・悠遊の記Ⅱ

◇悠遊の記……………橋本 政彦 109

◇セカンド・オピニオンの効用……………遠藤 俊也 110

◇西多摩郡喜多見領ミニ遍路について……………黒崎 昭二 111

◇ペン俳句のこの二年これよりの二年について……………平間真木子 112

◇今年一年の川柳勉強会の成果……………平尾 富男 117

◇追悼 多田修さん……………三宅 劭 120

素晴らしい若い友の死をいたむ

◇追悼 小林正憲さん……………平尾 富男 124

閨さん逝く

◇企業OBベんクラブのあゆみ(年表・年史)……………平尾 富男 127

◇執筆者名簿……………134

◇編集後記……………136

表紙制作

山縣正靖・野瀬隆平

カット

吉田邦彦・山縣正靖・野瀬隆平

巻頭言

会長 西川 武彦

当クラブの顔である「悠遊」第十四号は、新任の大平・安藤両プロマネの奮闘で、装いを新たに制作されました。伝統を守りつつも、表紙装丁を含めてフレッシュな香りが漂う同人誌に仕上がった感じですよ。ご指導頂いた石川、小島両先輩には長い間本当にご苦勞様でした。今後何かとアドバイス頂きたく存じます。

さて、二〇〇六年の活動を振り返るに、出版では、「卒業川柳・不良老人の溜息」が数多くの書評で取り上げられました。川柳の世界に新風を吹き込んだといっても過言ではないでしょう。

新たに具現化されたプロジェクトとしては、大盛況の「何でも書こう会」をベースにホームページに開設された「800字文学館」、初めての電子出版、ナムコトラベルへの旅行記掲載開始、といったところが特記されます。

ホームページを外向けの発言・発表および内部での

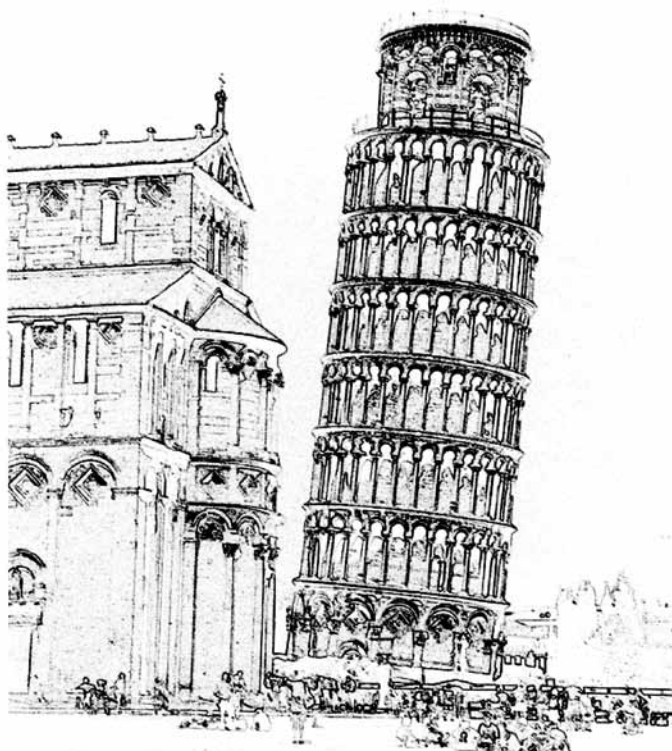
意見・情報交換の場として充実させる難しい仕事は、松谷運営委員長、平尾事務局長を中心として七転び八起きで進んでおります。HPを見て入会を希望する方も現れつつあるのもその効果の一つといえましょう。

二〇〇七年には、ウェブサイトを引き続き充実させ、現役時代にIT化の洗礼を受けた団塊の世代から幅広く会員を募って、PEN活動の更なる活性化を計りたいと思います。

北を初め四方からの風を受ける日本丸が進路を間違えないよう、我ら仲間同士で検証し、切磋琢磨しつつ、紙の上で、そしてウェブを有効に使いながら、企業OBペンクラブとして少しでも発言しようではありませんせんか。

総論的になりました。最後に、会員の若返りがおもむろに進む中で、特に新しく入会された方々が、新しい感覚で新しい企画を創りだすことが、クラブ活動のマンネリ化を防ぎ、それを充実する鍵になります。「待ち」の姿勢でなく、ご自分がやりたいことを積極的に提案してくださることを切に期待しております！

自由テーマ



野瀬 隆平

おいしさを笑顔に

阿部 洋己

最近、世の中暗いニュースばかりだ。物で栄えて心で滅びる時代そのものである。なぜこのような社会になってしまったのか過半の人は我々大人の責任であることを認識しこの風潮を憂えている。教育論議は喧々諤諤の様相ではあるが何から手をつけて良いのかなか解決の即効薬は見当たらない。そこでだが前から気になっていたことの一つが我が同胞の「笑顔」が少ないことと「挨拶」をあまりしないことだ。せめてこれだけでも世に広まれば少しは世の中明るくなるのではないかと思う。

居酒屋で店に入るや「いらっしやいませ」のただの大声の合唱よりもっこり笑顔の「いらっしやいませ」の方がどれだけ嬉しいことか。注文を取りに来てくれたウエイトレスのちょっとした笑顔に接するとこれから来る料理も美味しく感じられる。反対にメニューの説明もきちんとして言葉づかいも良いのに何か満たされない。フ

レンドリーでないのだ。つまるところ笑顔がないからではなからうか。スーパーのレジでも同様だ。少しにこっとしてくれただけで待たされたことを忘れてしまう。笑顔はまさに万能薬だ。「笑い」の効用は医学的にも立証されていると聞く。となると本人はもとより他人にも好影響を及ぼすことでこれほど良いことはない。

挨拶も然りである。もう少し挨拶が自然に出来たら今の殺伐とした風情も少しは変わるのではと思う。散歩道、狭い車内や通路のすれ違いなどその時々に応じたちょっとした挨拶と心遣いでお互い心が落ち着く。機内や新幹線でも隣に先客がいれば声をかけて席に着くようにしている。こちらが先に座っていて声をかけられることは減多にない。

先日も温泉宿の湯舟でのこと。先客に「こんばんは」と声をかけたのがきっかけで温泉談義に花が咲き、ゆったりと湯煙に至福の時を過ごした。最近試しに直ぐ当方から声をかけないでいると時々先方から声がかかる。間違はなく同年代かもう少し先輩だ。

海外へ行って感じるものの一つに我々は知らない人へ

の接し方がつくづく下手な国だと思う。見ず知らずの人に笑顔で接したり話をすることは社会的なマナーに反することになっているとしか思えないお国柄だ。もう少し自然体で挨拶が交わせたら良いと思うのだが。

何年も前のことだがミシシッピ川の遊覧船でのこと、祖母は乗船してすぐデッキのベンチに隣り合わせた中年女性に何やら話し掛けているのだ。彼女は祖母が話し掛ける日本語を一生懸命聞いてくれている。それをきっかけに実に楽しい船旅となった。通訳した子息と我々は祖母の何物にも臆さない社交性と国際性に感心したものである。祖母はそんな調子だから新幹線で京都からの道中もすぐ隣の人と仲良くなつてあつという間に東京に着いてしまうとのこと。隣の人が迷惑なのではと心配だ。

永年勤めた元の会社が今度ロゴマークを刷新した。そのロゴの上に新スローガンとして「おいしさを笑顔に」という文言を入れた。聞けば「お客様から笑顔をいただく」ことだという。お客様の口に入るものを作っている会社としてお客様に「おいしい」と言われる商品を開発し提供することは当然であるがそれだけではお客様から

本当の意味での笑顔はいただけない。お客様の本当の笑顔はブランドに対する信頼を得ることであり、その信頼感は日ごろの企業活動そのものによって形づくられて行くものである。企業の活動にお客様が満足していただけた時に初めてお客様の表情は笑顔になる。言い換えれば会社や社員の活動がお客様の思いに届いたということであり、自分たちの行動を映し出す鏡として一人でも多くの笑顔をいただくの思いを込めたこのスローガンを会社の行動指針にしようとする後輩たちにエールを送りたい。

今まで自分ではあまり意識したことはなかったが自分の笑顔のことを言われる。行政からの依頼で若手経営者対象の「阿部経営塾」を開講して半年、塾生の何人からも言われた。若い彼らが言うには少々説教じみた講義の内容が巧まずして笑顔と交じり合つて素直に聴けて説得されると言うのである。そのような見方をしていることに驚かされたと同時に非常に嬉しかった。今後もシルバーエージのさほどでもない笑顔をおおいに振りまこうと思つている。

アメリカ偏重

藤 岡 豊

戦後六十年が経過した。ところが今なお日本はアメリカの植民地だとの見方がある。つまり戦争に敗れた日本が立ち直り、ここまで成長を遂げたのは、すべてアメリカの指導とコントロールのお陰だ、というのである。勿論日本人の能力と活力の賜物であるのは事実だが、それを見抜いて指導してきたアメリカが優れている、この見方が有力である。

一九四五年の四月に中学に入った私は、戦争に苛まれ続けた。自宅は空襲で焼かれ、知り合いの家に間借りして学校に通う。その八月に戦争は終わったが、戦争に負けたことが、ピンとこなかった。ただアメリカの駐留軍が我々の学校を支配するようになってから、漸く日本は手を上げたのだという実感が湧いてきた。

今から思えば日本が降伏したきっかけは、何といつて

も広島と長崎に落とされた原子爆弾である。これで日本は大変な被害を蒙ったのだが、もしこの原子爆弾が使われず、そのまま戦争が続いていたならば、日本の受けた被害はもっと酷いものだったに違いない。

間もなくマッカーサーがやってきて指揮を取り、我々日本国民は訳も分らないまま、アメリカの言いなりになってしまった。

学生時代に限っては、私はアメリカの影響を受けることが少なかった。ところが就職した途端に、アメリカとの接触が始まった。というのは、入社してまだ二、三ヶ月にしかない私が、日本に入港してくるアメリカの船に、何度も何度も独りで足を踏み入れなければならなかったのである。唯一嬉しかったのは、船長以下、船員たちが親切に、おだやかに迎えてくれたことである。

その後アメリカの取引先から、出張者が頻繁にこちらを訪れる。戦勝国と敗戦国の観念は当然あったに違いないが、それを決して表に出さなかった。日本に勝つために無残な原子爆弾を使ったことへの、わだかまりがあったようである。

そして一九六九年の春、アメリカ駐在を命じられ、ニューヨークに赴任した。たまたま日本の鉄鋼産業が急激に伸びたため、製鉄原料の需要が大幅に増え、その仕入れに携わる我々に大量の仕事が回ってきた。毎日のように夜九時、十時までの残業、そして日本からやってくる取引先をつれての出張に悩まされ続けた。

ニューヨークに五年滞在したのち、やっと帰国を許された。ところが二年もたたないうちに、再びアメリカへ、今度は西岸のサンフランシスコに駐在を命ぜられた。支店次長という肩書を与えられ、支店長の代役として、あらゆる方面の仕事に手を出す大変な役目であった。

顧みれば真珠湾攻撃。当時ヨーロッパでは世界大戦が始まっていたが、これに参加するための手段として、アメリカは日本を経済封鎖し、その結果、真珠湾を攻撃させたのは事実のようである。また特筆すべきは、アメリカがユダヤを援護し続けていることだ。ユダヤは陰になり日向になってアメリカを動かしている。

今一つ指摘されているのは、陰でアメリカ政府を動かしていると言われる軍需産業である。朝鮮戦争を始めとして、ベトナム戦争、イラン・イラク戦争、そして今のイラク抑圧も、アメリカ国家として参加が絶対必要だったとは思えない。

通算八年半に及ぶアメリカ生活をはじめ、長年に亘る接触を通じて感じたこと、それは日本が未だにこの国の言いなりになっている、ということである。一日も早くアメリカの植民地から脱却し、完全な独立国としての道を歩むべきである。



秋彼岸に

濱田

優ゆたか

夫を亡くし独り身になった姉の彼岸参りのお供をした。
三日ほど雨が続いた後の秋日和。日差しはまだ力を残しているものの、九品仏の駅を出て直ぐの、参道の木陰に入ると涼風が渡ってきて一氣に汗が引く。盆供養の日の狂うような暑さが嘘に思われる。

総門を潜り、仁王門を抜けて古刹の境内に入れば、明視感の中で緑濃い樹林の陰影が際立って映え、斜光を受けた一群の九品仏所縁のお堂が浮き出して見えた。

蟬の鳴き声は既に絶えている。天然記念物の萱と銀杏の巨木を見上げると、樹冠の密やかなざわめきが秋の氣配を告げていた。終い彼岸しまの今日は人影も疎ら、人里離れた山門の佇まいで寂然としている。

花屋に寄ってから、本堂の裏手の、墓地に続く小路を姉の足取りでゆるゆると歩いた。

「どうして、あの人は先に逝っちゃったんだろうね」

七十代の半ば過ぎて老耄もが訪れた姉は、とぼとぼと歩きながら、感情の所在が分からない顔で独りごちている。

義兄は人柄の好い実直な人だった。無類の子ども好きなのに子宝に恵まれず、その分甥や姪を可愛がり、うちの子どもたちにも楽しい想い出をたくさん残してくれた。姉にとって、子どもの出来なかったことがどんなに心残りなことか。彼が優しい人で良かった、と勝手に安堵していた私はよほど迂闊だった。姉の嫁ぎ先は旧家の本家筋で、彼はその一人息子である。これまで姉は黙して語らなかつたけれど、「家」の概念が色濃く残っている、旧家の跡取りの嫁としてずいぶん肩身の狭い思いをしていたに違いない。

惚けがはじまってからの、赤ちゃんに対する姉の反応は、世間体の縛りが解けて自在になったという域を越えて危うく哀しい。

通りすがりに乳母車を見つけて、「わあ、かわいい赤ちゃん！」と駆け寄るのは微笑ましいけれど、やり過ぎしてから「連れて行っちゃおうかな」などと本気の素振りという。

この間もうちの孫の話をしていたところ、急に自分の胸中を吐露しはじめた。

「あたしも赤ちゃんが欲しかったなあ」

「こればかりは仕方ないよね」

「やっぱり、あの人に子種がなかったのかな」

ドキッとすることを真顔でいいたすので答えに窮する。

墓前に花を手向け、墓石に水を掛けている姉の姿を横目で見ながら、私は周りの落葉を拾い、線香に火を点けた。と、

「この後は高尾に行かないとね」

姉はこともなげにいう。先週、そこで親の墓参りを済ませたばかりなのに、もう忘れているのだ。

時の流れが止まったように、いつまでも墓前で手を合わせている後ろ姿を見守りながら、私は、数年前までの、確りしていて頼り甲斐のあった姉を想いかべていた。

うちにはこの姉と私の間にもう一人姉がいる。姉たちは、二つ違いで年が近く、時々姉妹喧嘩をしたようだ。が、下の姉から更に八つ下の私は、家族みんなに「坊や」と呼ばれ溺愛されて育った。省みるに、私は長男といって

も年のはなれた末っ子、甘えん坊のまま大きくなったことは否めない。

二十数年前に父を亡くした後は、この長姉が老母の面倒を見るとともに、病気がちの夫を抱えながら、何くれとなく私たちの世話までしてくれた。私が働き盛りで忙しい時にうちの子どもが大病をした折は、親身の看病で助けてもらった。

墓参の後、姉が終の棲家としている介護付き老人ホームのある鷺沼に戻り、駅前のお茶店で一休みした。姉はこのホットケーキが好きで、いつも一皿取り、炭焼きコーヒーを飲みながら二人で分けあって食べる。

墓参のお供は、それなりに気遣いをしたこともあり疲れたけれど、今日はいささか姉の役に立てたことが心うれしい。普段は姉の世話をしようにも、男では役に立たないことが多く、おおかた下の姉に頼っている。私には、ただ姉のそばに座って、昔のことを思い返しながら穏やかな時を共に過ごすくらいのことしかできない。

彼岸が過ぎると、足早に秋は深まり、冬枯れの時季の訪れが近づく。

ローマでの見聞

今川 確郎

ローマ市内には、世界のカトリック教徒十億人の総本山であるヴァチカン市国がある。総面積は日比谷公園の約三倍で、世界最小の独立国である。ローマには、中心街より少し西側に沿って南下し、ティレニア海に注ぐテベレ川が流れている。

特に五、六月は、両岸に何キロにも亘って繁る街路樹の緑が、目にしみるくらい美しい。これらの木々は、通常のビル、マンションの三階くらいの高さまで伸びている。川幅は百メートル足らずだが、汚れは殆んど見当たらない。

街路樹の葉が「こんもり」と表現して良いほどに繁茂しているせいか、高さが五、六階に統一されている住宅、オフィスの建物は殆んど目に入らない。

ローマは中心街全体が歴史的文化遺産そのもののなので、高層ビルの建設は許可されない。すべてのビルの高

さは六階に制限されており、この面からも街全体が落ち着いていて、「ゆとり」と「心の安らぎ」を感じる。

昨年春、五年ぶりにローマを訪れた際、従来とは非常に異なった光景に目を見張った。

新しい世紀となった二〇〇〇年のミレナリオを機に、裕福な法王庁がローマ市を清潔な都市に変えた。大幅な赤字でまったく余裕のない、イタリア政府に代わっての、一大改革である。

従前のバス、市電は旧式で、車体には落書きが多く、車内も腰掛けのカバーがはがされていた。街頭の建物はいたずら書きで見苦しく、ジブシーなどのスリ、カップライが多かった。

現在では、すべてのバス、市電が大型化して、日本でも多く見受ける、車体に描かれたコマースャルはまったくない。清潔な色彩で、車内も落ちていてゆったりしている。通りににはジブシー、物乞いは、まったく見当たらない。

巨大なコロッセオは、古代ローマ最大の遺跡だけに、各国からの観光客が二〇〇〇年前の優れた石材建築技術に感嘆している。同胞のベネディクト枢機卿が新法王に選出された影響か、ローマでの団体旅行客はドイツ人が多い。

「ブルータスお前もか」で有名な、シーザーが殺されたフォロ・ロマーノの元老院入り口では、修学旅行のフランス人生徒たちが、先生の説明に耳を傾けていた。

ユーロ通貨国のフランス、スペインの人たちも、パスポート、両替えは不要で、身分証明書、ユーロ通貨のみでイタリア旅行が出来る。パリ・ローマ間は、東京と北九州、又は札幌との距離と同じくらいで、飛行時間は約一時間半。

歴史が古く文化遺産の多いローマや、ルネッサンス都市のフィレンツェへの修学旅行は、国内旅行とあまり変わらないのだろう。

新法王の選出と、EU、ユーロの具体的効果を見聞した有益なイタリア訪問だった。



二人の女王

金 京 法 一

スコットランドのエジンバラ城には「世継ぎ誕生の間」という、小さな窓が一つだけの殺風景な小部屋がある。一五六六年メアリー女王は謀反貴族たちの襲撃を避けて避難しているさなかに、世継ぎジェームス（後のイングリッド王ジェームス一世）をここで出産したのである。

メアリーはイングリッド王族とフランス貴族出の母との間に一五四二年生まれ、生後六日でスコットランド王位を継承した。同時にイングリッド王位継承権を持っており、かねがねスコットランド併合を目論むヘンリー八世の養女要求に危険を感じた王妃は、メアリーを修道院に匿い、その後フランス王家に預けた。フランス王家に預けた。メアリーはフランス的な教養と持ち前の美貌でたちまちヨーロッパ貴族の寵児になり、アンリ二世の皇太子フランソワと結婚し、やがてフランス王妃となる。

しかしフランソワ二世は早世し、スコットランド女王としてメアリーは一五六一年帰国する。しかし国内はヘンリー八世に買収されたプロテスタント貴族が跋扈し、決して安定した状態ではなかった。それでも彼女は二度再婚し、その間世継ぎのジェームスを生む。イングリッド女王エリザベス一世にたいして、自分のイングリッド王位継承権を主張したり、次の王位継承者はジェームスであることを認めるよう要求したりしてエリザベスを悩ました。しかしスコットランドでのメアリーの立場は極めて危うく、一五六八年貴族の反乱でロッホリーヴン城に幽閉され、息子に王位の譲渡を強要される。メアリーはわずかな手勢を連れて城を脱出、元フランス王妃として当然フランスに逃れるものと思われていたところ、「エリザベスのところに参りましょう」とイングリッドに向かった。彼女の人生はここで終わったと言える。

ロンドンのトラファルガー広場に面する国立美術館にエリザベス一世の肖像画がある。豪華な衣装をまとい、威厳に満ちた容貌であるが、実際は不美人であつたらし

い。そのため彼女は豪華な衣装や宝石を身に着け、死んだ時には二千着以上の衣装が残されたという。ヘンリー八世と第二王妃アン・ブーリンの子とされるが、真相は不明である。ヘンリー八世は梅毒に犯されて子供は生まれず、アンは後に姦通罪で処刑されており、エリザベスの本当の父は不明なのが真実ではないか。しかしヘン

リー八世は彼女の聡明さを見抜き、幼少の頃より徹底した帝王教育を授けたという。紆余曲折を経て一五五八年イングランド女王になったが、その正当性については国内のみならず海外からも疑問が呈せられ、カソリックの王家からはメアリーへの王権譲渡要求が後を絶たぬ有様であった。しかし女王として彼女は拔群の才能を発揮する。ウィリアム・セシル、F・ベーコン、グレシャムといった有能な家臣が、貧しいイングランドの財政上信じがたいような僅かな報酬で身を挺して女王に仕え、軍事・経済での劣勢挽回に献身の努力をした。ただ最後まで結婚はしなかった。数多くの縁談が持ち込まれたが、女王は何時も結論を長く引き伸ばし、結局応じない。縁談が継続する間はその国からの攻撃が避けられたからで

あろう。一説によれば彼女は性器障害者で結婚生活がもとと不可能であったともいわれる。真相は分からない。もつとも公然と愛人を持ち、R・ダッドレーや、その死後は彼の養子を愛人としていた。この愛人は後に反逆罪でエリザベスの手で処刑されている。

そんなエリザベスの所へ難問が持ち込まれた。謀反貴族に追われたメアリーが亡命を求めてきたのである。エリザベスは王位継承権の正当性を疑われながら、国教会の長としてプロテスタントの頭目的存在である。メアリーは誰もが認めるイングランド王位継承権者で、熱烈なカソリック信奉者であり、カソリック教徒が反エリザベス運動の象徴的存在として担ぐ危険性がある。ダッドレーはじめ有力貴族から色々な陰謀説を理由に処刑される。しかし神から王権を授かったものを処刑できないと王権神授説を楯に、エリザベスは要求を退け続け、メアリーを十八年間に亘り事実上自由の身にしておいた。しかしかねがねメアリーの王位継承を主張していたスペイン王フェリッペ二世の陰謀に加担したとの証拠

(捏造されたものといわれる)を提示され、一五八七年ついにエリザベスは処刑執行命令に署名してしまう。処刑は凄惨なものであったという。メアリーはカソリックの殉教者を表す深紅の衣装をまとうて現れたが、長年の幽閉生活のせいか中年太りして嘗ての美貌は失われ、見物人を落胆させた。しかも最後の祈りをささげる手からロザリオは刑吏に取り上げられ、死刑執行人の不手際から最初の一撃で斬首できず、血しぶきが飛び散り、断末魔の叫びが刑場にこだました。証拠の生首はその後エリザベスの元に届けられたが、これが両女王の最初で最後の対面であった。メアリー処刑に怒ったフェリッペ二世は無敵艦隊をイングランド征伐に差し向ける。ついに恐れた事態が起こったのである。しかしエリザベスは甲冑を着け、陣頭に立って兵士を鼓舞し、嵐にも助けられてアルマダ海戦はイングランド海軍の大勝利に終わる。スペインの没落とイングランドの台頭が始まったのである。

時代は大きく転換しつつあった。王権の正当性も、所

詮は大衆の自由と欲望を満足させずには維持できない。産業を興し、軍事力の助けを借りて市場を拡大し、人民の懐を潤すと共に、国富を増大することこそ、立憲君主国であれ絶対君主国であれ、指導者の勤めとなったのである。血統の良さと美貌の持ち主メアリーは所詮普通の女性であり、王としての正当性を持つ世継ぎを生んだのが最大の貢献であったかもしれない。エリザベスは生まれや容貌には恵まれなかったが、大政治家として成長し、後の大英帝国の基礎を築いたのである。

一六〇三年波乱万丈の生涯を終える時、エリザベスはメアリーの子でスコットランド王ジェームスを後継者に指名し、ジェームス一世として今日のスチュワート家の開祖となった。かくして長年の懸案であったスコットランド併合が平和裏に実現し、イングランド王の血筋の正当性が改めて確保されたのである。ジェームス一世は母親の問題については何故か終始傍観者的態度を取り続けたが、後にメアリーの遺骸をウエストミンスター寺院に移し、スコットランド女王として埋葬している。

或馬のはなし

木下 洋介

古い手紙の束を整理していたときに出てきた一通の手紙である。

クラブで検討の結果、あなた様にご応募された中から下記の馬名を採用させていただくことになりました。馬名、ダイナミリオン。

二十数年前、ある会員誌が競走馬の馬名を募集したことがある。競馬には関心がない私だったがこの馬名募集にはひかれた。馬主になるなど天地がひっくりかえってもあり得ないことだが名づけ親ならなれるかも知れない。私のつけた名前の馬が競馬場を走る――。なんと素晴らしいことかと、ひとり胸を高鳴らせながら五つ六つの名前を書いて送った。結果は冒頭の手紙の通りである。

当然のことながら、私にとつてのダイナミリオンはただ見ないうちから、どの馬よりも晴れがましく、走れば

常に先頭で、颯爽たる勇姿は筆舌に尽くし難かった。だが、熱するのも早い、なぜか冷めるのも早かった。この興奮も薄らぎ、やがて話題にもなくなり名づけ親からも忘れられていった。

その何年かの間にも、テレビの競馬中継があり、私も馬券拔きの単純に馬のかけっこというレベルで週末の中継をよく見たものだが、なぜかダイナミリオンは見たことがない。さらに競馬熱は年毎に広まっていくようで、日常会話でも競馬のことが話題になり、三冠馬がどうの、シンザンが、ハイセーコーが、ディープリンパクトが――と馬券を買わなくても競馬を楽しむ人が私のまわりにも増えてきたが、ダイナミリオンの噂はついぞ聞いたことがなかった。私はダイナミリオンを草競馬程度にしか見ていなかったのだろうか。

何回も手紙を読んだ、この馬はその後どうしているだろうか。あれから二十数年、馬の世界にもあの世があるなら、とつくにあの世に行ったであろう、いや、引退後は種馬として余生を送る馬もいると聞いたことがあるが、などいろいろ想像していたが、そんなとき私はこの

馬に会いたくなかった。どこかでひっそりと余生を送っているかも知れない。そんなダイナミリオンに会いたくて競馬会へ出かけた。

来意を告げると、数点の資料を並べて調べてくれた。私もその中の一冊を覗いたが、父、母のほかは殆ど数字と片仮名で埋まっただけで門外漢には暗号簿のように見えた。

「ダイナミリオンは昭和五十九年の第五十一回日本ダービーで六位にハイっていますよ」と係りの人が資料を読みながら教えてくれた。「え」と驚き、日本ダービーがどんなレースか知りもしないで、声を上擦らせながら次の質問の返事の催促をした。

「ダイナミリオンはどうしました」

「死にました」

「え、」

「ダービーの翌年昭和六十年の八月新潟のレース中に――」さらに説明は続いた。

「ダイナミリオンが走ったのは八月十日、死んだのも八月十日です」といい、こっちの資料には、「新潟の月

岡特別で骨折、安楽死の処分を受けた。総てこれからだという馬だった」と追悼文のような文章を聞かせてくれた。つまりダイナミリオンは骨折して、誰がという権限で決めたのかしらないが、その日のうちに安楽死の処分を受けたということだ。

あとでわかったことだが、ダイナミリオンが走った日本ダービーの優勝馬はシンボリドルフであった。シンボリドルフといえは話題の馬で今でも私の耳に残っているが、そのときダービーのテレビ中継を見ていれば、あるいは一緒に走ったダイナミリオンにテレビの画面を通じて対面できたかも知れないのになんと冷たい名付け親かと悔やまれる。哀れダイナミリオンは、長い短い知らないが安楽死で四年半の生涯を終えた。

また別の資料には引退後の馬の措置記録があったが、ダイナミリオンの前後の欄には地方競馬、乗馬、繁殖、研究用などの字で埋まっているのに、ダイナミリオンには斃死とあった。

漢和辞典をひくと、「斃死」へいし、力尽きて死ぬの意とあった。なんとも薄幸な馬と思えて仕方がない。

今年は好い年

北田 純一

老け込むには早すぎる、しゃしゃり出るには遅すぎる、七十八歳とはまことに厄介な年回りです。人は八十歳になるとなかなか死なくなると聞きます。さらに七十九歳ではただの老いぼれですが、八十歳になった途端、世間が尊敬の眼差しを向けてくれるそうです。

京大名誉教授、森毅^{つとむ}先生によると、八十歳からは人間性を磨き人格を完成する時期、そして百歳を超えると生きているだけで値打ちがあるとのこと。私も健康と人格を磨き生き仏の境地を確かめてみたいと思います。

まずはとつ掛かりの平成十八年を振り返りますと、私にはまことに好い年でした。嬉しいことが二つありました。肺がんが節目の二年目を過ぎても転移しなかったこと、三高のクラスメイトから身に余る賛辞を頂いたこと、おかげで多少の自信が湧いてきました。

誰だって歳をとると病氣の一つや二つは抱えています。私も心筋梗塞、腹部大動脈瘤、ヘルペス性平衡神経失調、さらに三年前からは肺がんが加わりました。しかし、いずれの場合も幸運がつきまといました。たとえば心筋梗塞をおこしたのは会社の事務室でした。分別ある人士が一番たくさん居るところです。直ちに病院に運び込まれ手厚い看護を受けることができました。

肺がんの場合も偶然としか考えられない幸運に助けられました。ご近所のゴルフ仲間が相次いでがんの手遅れで他界されました。驚いた妻にせっつかれ、千葉市的一般健康診断を受けました。左肺上葉部原発性腺がん一期Bと診断されました。県の癌センターの外科医は一刻も早く切れと急ぎ立てます。しかし、私は心臓が悪いのに肺の四分の一を切り取るのは考えものだとタダを捏ねました。そんな矢先、妻が「近所に放医研という政府機関があり、重粒子という特殊な放射線でがんを治している」と聞いてきました。さっそく無手勝流で飛び込みました。初対面のドクターは親切で、なぜかたいへん気が合いました。そして通常三百十四万円かかる重粒子治療を治験

材料扱いにして無料で施療して頂きました。

準備のため二週間ほど入院しましたが、本番はあっという間でした。切らないのですから麻酔の必要も、術後の養生入院も要りません。痛くも痒くもなく、たった一回の照射で終了即退院でした。

結構すぐめでしたが、がんには転移がつきものです。まず二年間は要監視です。さらに三年経って転移がなければ完全治癒のお墨付きを頂くことになるそうです。そこでこの五年間は二ヶ月毎の定期診察、半年毎の精密検査が義務付けられました。二年目の節目にあたる本年五月の精密検査は無事クリアできました。ところが、七月初ごろから急に左乳房が腫れはじめました。さらに八月の定期診察時に肋骨に不審な影が見つかりました。

だから本年十一月の精密検査は戦々恐々でしたが、結果は上々でした。乳房の腫れは胃腸薬の副作用による「女性化乳房」、肋骨の影は転んだときの打撲のあとでした。CT写真の病巣は鉛筆の芯ほどに縮小していました。検査基準が一ランク下がり、二ヶ月毎の診察は取り止めになり、半年毎の精密検査だけになりました。なんだか凱

旋將軍のような気分になり、健康への自信が湧いてきました。

さらに嬉しいことがありました。旧制第三高等学校のクラス会で重粒子治療の経緯を説明し、すべてが偶然にもラッキーだったと解説しましたところクラスメイト全員が口をそろえて

「いや違う。キミの手柄や卓見が幸運を招き寄せたのだ。長年の善行の賜物だよ。だって、初対面のドクターと意気投合するなんて、人柄を抜きにして考えられないよ」と褒めてくれました。最も信頼できる三高のクラスメイトたちです。お世辞にしても嬉しくない筈がありません。素直に評価を鵜呑みすることに決めました。すると急に自分が一回り大きくなったような気がしてきました。

そこで更なる研鑽に備え県営プールに日参して水中ウォークをはじめすることに決めました。心なしか足取りがしっかりしてきました。そして人格練磨の方は、ますます頑固に頑固さを貫こうか、それとも好々爺に変身しようか、なかなか決められないで迷っているところです。ともあれ今年は好い一年でした。

ヘブライ語研修旅行に参加して

松浦 武弘

日本ヘブライ文化協会主催の「ヘブライ語研修旅行」に参加し、三月十八日に出発し二十九日に帰国した。団長は協会副会長の阿部先生で、先生の「サムエル記」購読を二年間受講した私にとって、きりの良いタイミン
グであった。

今回の旅行では、テルアビブからガザ地区を右に見て南下しベルシェバ、エンボケク（死海）でそれぞれ一泊した。死海の西側、ヨルダン川のイスラエル側を北上してガリラヤ湖の西岸のティベリアスに二泊した。

三月二十二日の午前中は、山上の垂訓で有名な「祝福の丘」タブハ召命教会、カペナウムの会堂跡を見学し、船で対岸エンゲブに渡った。

三月二十二日の午後はゴラン高原を訪れ、シリア国境

のクネトラの城塞から国連のPKO部隊のキャンプ（日本の自衛隊も参加）を眼下に眺めた。小規模な国連軍の中間緩衝地帯が強大な要塞となっており、クネトラ城塞は兵士一人常駐しない観光スポットであった。

七月に入りヒズボラ退治のため、イスラエル軍はレバノン侵攻を始めており、国連の決議で軍事行動は中止したが、この城塞近辺の情勢は三月とは激変していると思う。

ネゲブ砂漠の北に位置するベソールで、広大な貯水プールや果樹園を見学した後「テル・ベルシェバ」で紀元前十世紀の古代の城塞、壁、水路を見学した。

ユダヤ人は既に三千年前に、現在と変わらない方法で水を確保していたのである。

マサダの砦では、西暦七十年、二年以上ローマ軍と戦って九六七人が（女子供七人を残して）全員自決した。

豊富な食料と貴重な水は残っており（四千万トンの貯水槽がある）あと数年は持ち堪えられるが、生き恥をさらすより自決の道を選んだ。

イスラエル軍の入隊宣誓式はマサダの砦で執り行われ、式の最後は「マサダは二度と陥落させない」と締めくくられる。

ベツレヘムでは、高いコンクリートの壁による、イスラエル政府のPLO囲い込みの現場を実際に見たが、まさに一方的な囲い込みであり排除であった。

ベツレヘム最大の土産物屋に入ったところ、キリスト生誕の地である聖地ベツレヘムも最近を訪れる人も少なく、お客は我々一行だけであり、広くて大きな店はガランとしていた。失われた契約の聖櫃（アーク）は、日本に伝わり、神輿（しんよ）となったと言われているが、偶然店で見た「アーク」のレプリカは、まさに御神輿（おみこし）であった。

祈りのシヨールである「タリット」を着た敬虔なユダヤ教徒が、私を撮ろうと構えた妻のカメラのファインダーに入り、この写真は私にとり最も記念すべきものとなった。ユダヤ教徒のタリットの四隅には「チズイット」という房が付いており、彼の顔には「ティフリン」と呼

ばれる箱がのせられており、それがきちんと写真に撮れていた。日本の神官の浄衣の裾には四個の房が付いており、山伏は額に兜巾といわれる箱を付けている。

日本の神官の浄衣の四個の房と山伏の兜巾は日本古来の日本独特の風俗ではなかったのである。古代のユダヤの風俗が日本に伝播し定着した証を目の当たりにした。旅行中「嘆きの壁」でもエルサレムのシナゴークでも、一度もタリットをつけたユダヤ教徒には出会わなかった。

宗教心のない私にも、預言者サムエルの導きであると思われた。

日本イスラエル協会の初代会長の糸川英夫氏は「日本は戦後道徳を失ったが、イスラエルには律法（規範）がある。日本はイスラエルに学ばねばならない」と言った。戦後GHQは民主主義の名のもとに日本国民総白痴化政策をとり、家庭の崩壊と教育の荒廃をはかった。

「国防」と「食料の自給」なくして、国家の大計は論ぜられぬが、日本国民はGHQの言いなりになり、国家の

大計を忘れて経済発展にのみに走った。

教育制度では、素晴らしい旧制高等学校制度を廃止し、六三三制度に改悪し、日教組と一部ジャーナリスト達といわゆる進歩的文化人が悪乗りした。

特に昨今、前述の亡国の輩達は「ユトリの教育」の名のもとに「サボリの教育」を取り入れた結果、小、中学生の学力は三等国並みとなった。

「水」と「平和」はタダと信じ、平和ボケした日本人に祖国愛はみじんも感じられない。

我々は規範の重要性をイスラエルから学ばねばならないと、今回の旅行で痛感した。

遠藤周作は「日本人が最初に訪れるべき国はイスラエルである」と言ったが、その言葉を深くかみしめた十日間のイスラエル旅行であった。



サムエルに導かれて



聖櫃(アーク)のレプリカ

ラゴスの追憶

中 村 爽

一九七六年九月、初めてナイジェリアに足を踏み入れた。前日夕刻に到着予定だった航空便が遅れ、ラゴス空港に着いたのは翌日の明け方になっていた。一人旅には慣れていたが、空港のタクシーは要注意と聞いていたの、ホテルまでの道のりが不安だった。

早朝のターミナル構内は閑散としていた。無法な没収で悪名高い税関も難なく通過。そばにいたポーターらしい男が私のスーツケースを持ち、行く先を告げると「ノープロブレム」と言って出口に向かう。外でたむろしていた数人の男たちが「タクシー、タクシー」と叫びながら、スーツケースに群がってくる。それを振り払い、男は私を一台の車に導いて「乗れ」と言う。なんと彼もタクシー運転手だった。なぜ彼が一般者入場禁止の構内に当然のようにいたのか分からないままに、目的地までの料金を決め、何度も念を押してから車に乗り込んだ。ところが

「ノープロブレム」のはずが、途中で道に迷ったと言い出し、料金の値上げをしつこく要求する。それを切り抜けてホテルに着くまでは気が気でなかった。これが私の受けたナイジェリアの洗礼だった。

「ラゴスでは生きる意思と気力を強く持たないと生活できない。見栄は捨てて、生存競争に勝ち抜くべし」というのがナイジェリアに長い同僚K君の唱える説だった。当時、産油国ナイジェリアはオイルブームの頂点にあり、首都ラゴスは正に沸きあがっていた。どこへ行っても人の群れ、慢性的交通渋滞で動けない車の山と排気ガスの臭気、凶悪犯罪の多発する治安の悪さ、高い物価など、環境は劣悪だった。行き倒れの死体が長い間道端に放置され、その側を通行人が無関心で通り過ぎて行くという衝撃的な話もあった。ここで生きるのは確かに大仕事だと思った。

ある日、K君と北部の町エヌゲに行くことになった。国内航空便のチェックインカウンターには長蛇の列。予約済みなもののんびり構えていると、K君が素早く行動を起す。航空券を右手に掲げ、人ごみを強引にかき分け

カウンターに達すると、座っている職員の頭の上から手を差し伸べ、「ボーディングカード」と怒鳴る。国内便は常にオーバーブックイングで、予約があっても乗れない場合があるので搭乗券の確保が必要だ。さらに搭乗開始のアナウンスがあると、飛行機に向かって乗客が一斉に走り出す。搭乗券の数が定員を上回ったり、政府のお偉方が優先的に席を占めることがあり、徒競走で負けると乗りはぐれるのだという。生き残り理論の実践だった。

ラゴス空港の税関検査。台上に並べられた乗客の荷物を見下ろす位置に制服姿の屈強な大男が鞭を持って突っ立っている。男は台上の荷物に目を走らせ、これと思うものを選び鞭で叩き、声高に「オーブン」と命令する。そして開いた荷物の中を鞭でかき回し、「ゴー」と一語のみ。無礼の極みだった。出入国時の通貨の持ち込み、持ち出しの検査でもトラブルが絶えず、ある日本企業の駐在員が係官と口論のあげくに殴打され、数日勾留されたという噂もあった。私も思いがけないことで被害を受けてしまった。

出国時のこと。手続をすべて無事に終え、待合室に進

む。入口のデスクに座っていた男が、セキュリティチェックだからとアタッシェケースを開かせ、ドル紙幣を入れた封筒を見てこれはなんだと聞く。当然申告済みなので、自信を持って「マネー」と答えると、男は辺りにちらつと目をやり、素早く何枚か抜き取った。「何をする」と抗議したが、彼は「お前はこの飛行機に乗りなくてもいいのか」と脅し、「ゴー」と手を振る。腹が立つと同時に不注意を悔いた。後ろにいて一部始終を見ていた航空会社のドイツ人職員が「ジス・イズ・ナイジェリア」と気の毒そうにささやいた。

その後、ラゴスを離れた地方に行く機会があり、その平穏な光景と、そこに住む陽気な人々の暖かさを知ることができ、ラゴスの悪印象は次第に薄れていった。今では当時のラゴスの思い出も懐かしい。

現在、ナイジェリアでは国内の地域、民族、宗教的抗争が続き、決して平穏ではないようだ。最近外務省は安全情報で、治安悪化による同国全域への「渡航の延期」、または「渡航の是非の検討」を勧告している。当時知り合った人たちの消息が気にかかってならない。

コウノトリは優雅な鳥だった

中 洲 靖 雄

この秋口、知人からの誘いを受けて兵庫県豊岡市を訪れ、国の特別天然記念物「コウノトリ」を見に行く機会があったのだが、目の当たりにしたコウノトリは鶴にも似てその優雅な姿は美しく、強く印象付けられるものがあった。

コウノトリはご承知の方も多いだろうが、日本最後の生息地ともなった豊岡市を含む但馬地方で、自然環境の破壊や田畑に散布される農薬等の影響から餌となるドジョウやカエルなどの減少を招き、一九七六年には野生のコウノトリは絶滅、その姿を消してしまったのである。

この為、野生のコウノトリの減少傾向が顕著になってきた一九五五年頃、豊岡市では保護協会を発足させ、人工飼育を試験的に試みるなど官民が一体となって保護運動を展開してきたほか、兵庫県としても現「県立コウノトリの郷公園」の前身たる「コウノトリ飼育場」を設立

するなど懸命の努力を重ねてきたのだった。が、そんな努力も空しく日本コウノトリは絶滅してしまい、現在では人の手を使って保護を続けなければ繁殖が望めないというほどその生息環境が悪化してきているのだ。

そんな中、一九八五年に旧ソ連・ハバロフスク地方から六羽のコウノトリの寄贈を受け、様々な科学的研究や飼育法を試み、コウノトリの種の保存と遺伝的管理などの努力を重ね、今年九月末現在放鳥中と飼育中のものを加えて百二十四羽にまで増やすことに成功したのである。

こうした努力の上に、更にコウノトリを自然に帰すという最終目的を達成するための野生馴化訓練などを織り込み、昨年来段階的に試験放鳥を行うことができるまでに漕ぎ付けたのだ。斯くして一度絶滅に瀕した野生動物を再び野生に返すという世界的にも珍しい成果を得つつあるのが現状なのである。

さて、コウノトリは分類上コウノトリ科に属し、体重四〜五キログラムの鳥で白色の羽毛におおわれ、風切羽と嘴は黒、脚、目の周囲は赤色の鶴によく似た鳥である。羽の長さは二メートル余、全長一メートル余にも及び、

素人目には鶴とそっくりなのだが、鶴との違いはその巣作りであり、コウノトリは木の上、鶴は地上に作る習性があるという。又、鶴は鶴の一声の警え通り鳴くことが可能だが、コウノトリは鳴かず、嘴を叩き合いカタカタと鳴らして鳥同士間のコミュニケーションをとっている。

何れにしてもこの鳥はシベリア東部のアムール川流域の湿地帯を主な繁殖地としており、現在世界の生息数は僅かに二千羽ともいわれているが、我が日本では兵庫県がコウノトリを「県鳥」に指定している。そんな世界的にも数の少ないコウノトリだけに科学的な研究や飼育法を試みて増やし、これを野生に帰そうとする試みは、餌となるドジョウやカエルが生息できる田んぼや河川が必要であり、巣となる高い木が生い茂る山林などの自然環境も必要なのだ。考えてみればそれは又、私たち人間にとっても望ましい自然環境であるといえよう。

ところで、豊岡の「コウノトリの郷公園」は公園とはいっても公開ゾーンと非公開ゾーンとに分けている。公開ゾーンに飼育されている鳥の大部分は羽を切られて飛べない状態にされているようだが、これは飛べない状態

にしたペアを放鳥拠点で飼育・繁殖させ、巣立ちした幼鳥を自由にさせるなどの目的があるという。

そんな公園の公開ゾーンには大勢のカメラマン達が詰め掛けていたが、彼等は餌を与える時間帯を狙って飛来してくる放鳥のコウノトリの飛ぶ姿がお目当てであり、この飛来時間帯には一斉にシャッターを切るカメラマン達の執念を垣間見ることが出来た。そしてお互いに撮影した作品を見せ合い品評会をやっているのにも出くわしたが、コウノトリには夫々名前までが付けられているなど驚くことも多かった。

それほどにコウノトリの飛ぶ姿は優雅であり魅力があるからなのだろうが、一見に値する鳥であるのは間違いないといえよう。同時にこの地域の農家は「コウノトリを育む農法」を目指しており、互いに命を分け合いながら多様な命を育むことを目指すのだとしている由。つまり、単に農薬や化学肥料の削減というだけではなく、水田で安全・安心な美味しいお米と生きものを同時に育むということを求めているという。有意義な一日だったことに感謝しつつ帰路についたのだった。

聞くだけでよいか？

松下幸之助の二対二〇〇のカウンセリング

大西 宏

私は、松下幸之助のもので、ものの見方考え方では、実のおやじ以上の影響を受けたのかもしれない。

貧困・不運・無学歴・病弱・神経質という点で、重いハンデを背負った人間があれほどの成功を収めたのはなぜだろう。

彼には、並ではないでつかい夢と重い重圧があった。それによって、経営学はもちろん、心理学や哲学の理論を学習しなくても、実践によって驚くほどそれらと同じ仮設に気付いていた。仮説は自らの手で検証された。

以下は、ある会議での彼の言動をロジャーズの「カウンセリングのプロセス」傾聴―理解・共感―受容―自己一致・直言」という原理的プロセスでたどってみたい。

矢おもてに立って「傾聴」

ひどい不況だった昭和三十九年のある日、全国のデ

イラー社長会議で松下（当時六十九歳・会長）は、こう切り出した。

「なにか松下電器に対するご不満があるにちがいない。今日は皆さんから自由にご意見を言っていたき、三日かかるか五日かかるか―何日かかってでも、皆さんと十二分に話しあつて、この危機を乗り切りたいと思います」と促して壇上の矢おもてに立ったのである。

そうすると、まさに堰を切るように「松下だけが儲けて我々は赤字に喘いでいる」という、怨嗟といってよい意見が続出して、とどまることがなかった。

幸之助は、何時間も身じろぎもせず立ったままであった。時には切り返したり、問いたたりすることもあったが、自由にものを言ってもらつて、ほとんどそれに耳を傾けることに終始し、会議は異例中の異例といつてよい一日延長の三日間となった。

相手の立場になりきつて「理解と共感、そして受容」「そのことの伝達」

三日目におもむろに口を開いた幸之助は、

「皆さんが、そこまで苦しんでおられるとは知らずまこ

とに申しわけなかった。事実をしつかりうけとめたい。そして、よくよく反省してみると、いっさいの原因が松下にあることが分かりました。皆さんの長年のご恩顧を忘れかけていました。

私を含め、松下電器の慢心が、今回の真の原因です。創業時代の気持ちに立ちかえらなければなりません。まことに申し訳ありません」

と得意先の不満をまるまる受け容れたのである。

ここで、言葉が突然とぎれ幸之助はあふれ出る涙をぬぐうために、メガネをはずしてハンカチを目にあてた。

真実・自己一致の直言をして信頼関係高まる

しかし、幸之助は話を聞き、理解し、受け容れただけではなかった。相手の立場に立った上で、相手について自分が本当にそう思っている真実を、てきびしい言葉で直言したのだった。お詫びしながら叱ったのである。

「皆さんもご自分の経営ではありませんか。この状況の中をちゃんと利益を出しているお会社もありますよ。まともに代金を払えない会社には商品をお出ししないのがふつうです。」

ご自分がなすべきことをなさずに松下に支援を要求してはなりません」

時と場合によつては猛反発を買いそうなこの言葉に会場は肅然となり、心が通じて一つになった。そして次に大きな拍手が湧き起ったのである。

「これまで、松下さんが悪いと責めてばかりいたが、今会長の話をきいて、われわれも間違っていたということに気がつきました。みなさん、われわれも心を入れ替えてがんばろうじゃないか」

社長の一人がこのように叫ぶように話すと、再び起こった拍手が鳴りやまなかった。

ディーラーたちは思うだけのことをいつくしたあと「全て松下電器の責任」という幸之助の言葉によって、初めて、やっぱり「自分の経営の責任」であることに気づいたのであった。

幸之助は一对一でも難しい「傾聴―理解・共感―受容―自己一致・直言」のプロセスによって、互いに心を通じ相手に気づきを起こさせる「カウンセリング」を一对二〇〇で遂行したことになる。

東京を捨てる

大塚 滋

昭和五十五年から二年間、ワシントンのアメリカ運輸省、連邦鉄道管理局に勤務していたが、その間多くのアメリカ人から彼らの別荘に招待された。ポトマック川辺の瀟洒な建物と艇庫には目を見張った。シェナンドウの山中では広大な芝生でリスが遊んでいた。どこへ行っても食事は楽しく豪華で、先ずは食前酒、カクテル、ウィスキー、たまにビールから始まる。食事中はワイン、食後は甘いお酒コーディアル、日本の「みどり」が出ることもある。世が更けるのも忘れて話が弾む。言葉が多少不自由なのも酔っ払い運転も気にならない。

日本に帰ったら、真似事でもいいからやりたいという夢はどんどん大きくなっていった。幸い別荘住まいの絶対必要条件である車の運転については昭和三十七年の免許取得以来国内で約二十五万キロ、アメリカで約三万キロの実績があり、霧の箱根、雪と氷のワシントン、渋滞

とルール無視のソウルを経験しているので、まず問題はない。

昭和五十七年春に帰国して、秋にタイに赴任するまでの約半年、週末は必ず別荘の候補地探しに出かけ、関東一円隈なく回った。そうする内にだんだん知恵もついてきた。同じ場所でも傾斜地は避けたほうがいい。平らなところより値段は安いし見晴らしもいいが、崩壊の危険があるし建設費も高くつく。下水、汚水が集中処理かどうかを確認する必要がある。別荘が汲み取り式では様にならないが、古い有名な所ではまだ多い。ごみ処理もよく調べることだ。東京のようにうるさいのかどうか、なんでも持っていくてくれるのが一番だ。雪、風、雷、湿気之多寡など気候条件もよく調べる。他にも方角、日当たり、道路、バスなど公共交通機関がきているか、スーパ―は、これだけの条件を満たす場所は容易にみつかるものではない。しかし別荘などというものは一生に一度の買い物、駄目だったから次というわけにはいかない。文字どうり東奔西走南船北馬で探した。

そうしてとうとう昭和五十七年八月、八ヶ岳西麓、蓼

科高原の別荘地にほぼ満足のいく土地を見つけた。標高千五百メートル、面積約三百二十坪、一面の白樺林、南側は二車線の舗装道路、三区画上で行き止まりだから車の往来は極めて少ない。家を北よせて建てれば南側にたっぷり庭がとれる。勿論平らな土地。

これだけ探したのだから、これ以上の場所は無いと自信をもって契約し、九月JICA長期専門家、タイ国鉄総裁顧問としてバンコクに出かけた。建てる家の設計はタイでじっくり検討すればいい。

与えられた課題は慢性的な列車遅延の原因とその対策の提言であった。実情を見るため北はチェンマイ、南はマレーシア国境、その他支線へも何度となく出かけた。休日や休暇では陸路、海路、空路を利用し観光地、地方都市を訪ね、多くのホテル、レストランを経験し、建てる家の参考となるデータ、アイディアなどを集めた。チェンマイのホテルでは広いベッドルームに段差のついた次の間があり、そこに机と椅子が二脚、前の棚にはテレビ、ベッドルームとの仕切りは洒落た手すり、テレビ、ウイスキーで眠くなれば一段下りてベッドへ直行、ベッ

ドからもテレビが見られるという仕組みがありこれは是非採り入れようと決めた。

風呂桶の長さはどれくらいが快適なのか、むこうの縁にあしがとどかないと温泉の大浴場で経験するように足が前にずり、お尻が浮いて濡れそうになる。かといって団地サイズの膝をかかえて入るのもつまらない。パタヤのホテルの百十センチが私の身長には最適と分かった。

風呂は見晴らし良く二階に造りたい。庭は一面の芝生にしたい。薪を威勢よく燃やす作り付けの煉瓦の暖炉とカクテルシェイクするウエットバーは必要だ。

昭和五十九年冬帰国、いよいよ建てることとし東京の設計事務所にこちらの要望、条件を伝え、何回も協議を重ね、建設は地元の業者にした。この選択が非常に良かった。冬はマイナス十七度まで下がる土地なので、東京の業者だと基礎が凍上することがあると言う。この寒さでは水道、温水、下水など水回りのトラブルが多い。それも夜間、こんな時電話一本で駆けつけてくれるのは地元の業者だからである。

三月国鉄退職、四月鉄道コンサルタント会社に就職、

官舎を出なければならぬ。蓼科へ通うことを考えて吉祥寺にマンションを借りた。以来今日まで二十年余り、ここで過ごす週末は快適だった。

平成十二年、再就職も退職、全く自由の身となったのにその後も二年間東京と蓼科の二重生活を続けていたがだんだんその無駄に気が付きはじめた。高速道路、ガソリン、疲労、事故の可能性など、勤めていた時は当然のこととして何の疑問も持たなかったが、今となつては何のため東京に帰るのか、東京を捨てるか、蓼科を捨てるか。多少の不安と問題もあったが東京を捨てることとした。

平成十四年夏東京のクーラー、冷蔵庫、テレビ、箆笥など家財道具すべてを捨てて、一部の衣料以外荷物もなく、自分の車三往復で引越しを終えた。完全な二重生活、いかに無駄なことをしていたかが分かる。これまで中央高速調布・諏訪南間往復五百六十回、其れだけでも約四百五十万円、勤務しながら蓼科を満喫したツケは計り知れない。

以上のような経験を経て現在永住四年目、住んでみて

分かったことは沢山あるが、まずは空気の美味しい事である。ここに永住している皆さんが口を揃えて言う「元氣になった」「病氣をしなくなった」と。永住者のパーティも話はずむ。アメリカ並に呼んだり呼ばれたり、カクテル、ワイン、ご馳走、コーヒ、十一月にはボージョレヌーボーを持ち寄って、暖炉で白樺を勢いよく燃やしながらか話はつきない。

ドライブ、ゴルフ、ボーリング、五月から九月は畑、キュウリ、茄子、トマト、ミニ西瓜など近所に配って喜ばれる。春は山菜、秋はきのこが庭で採れる。

勿論、いいことばかりではない。ここでの生活は車がなければ成り立たない。スーパーどころかゴミを捨てるのもゴミステーションまでは車だ。もともとそこまで持つて行けば何を捨ててもいいので有難い。雪道は四駆のスタッドレスで車高の高い車でないと危険だ。要するにここでの心配は車と雪それに寒さであろうか。

それさえ克服すれば文字どうり天国、東京を捨てたのは正解であった。

クジラヲトルノハヤメナサイ

莊 司 忠 志

初夏の暖かい日、のんびりと市内循環の無料観光路面電車で揺られていたら、ヨットハーバーが見え、そこに真っ黒な全長五十メートルほどの船が係留されていた。その船腹に、“Stop Japanese Whaling”と大きな垂れ幕がある。興味津々、電車を降りて船に寄ってみる。

それは、捕鯨反対のグリーンピースの船だった。グリーンピースの活動はおぼろげに知っていたが、船を見るのは始めてである。タラップの下に置いてある小さな机に、十四、五人観客希望者が集まれば船を案内する、と書いてある。しばらく待っていると、人が集まり、三十歳ほどの美人乗組員が船を案内するという。操舵室から始まり、狭い廊下を一步一步足元に気をつけながら通り、船内を見て歩く。

談話室で、十五分ほどのビデオを視る。日本の捕鯨母船、随伴する二隻のキャッチャーボートが操業している。

追いつくようにピースボートが、捕鯨母船に接近、伴走しながら、マイクで“クジラヲトルノハヤメナサイ”とおかしな発音の日本語で叫ぶ。母船の甲板で、クジラの解体作業が行われている。大きなマサカリでクジラの尻尾を切り取り、腹部が切られ内臓がかきだされ、甲板は血の海だ。残酷な場面である。

案内の女性が私を日本人と認めたらしく、クジラを食べたことがあるかと質問してきた。

いささか面倒な場面と思いながら、戦争直後子供のころ食べた思い出がある、当時は何でもおいしかった、と答えると、みんな一瞬イヤな表情をした。本当は二年ほど前、浅草のクジラ専門店で食べたし、珍しいので数種類の肉類や缶詰めを買って食べたことがある。

観客の一人が、自分たちが食べる牛や豚は瞬間的に殺すが、クジラをゆっくりと殺すのは かわいそうだ、とつぶやいていた。クジラを食べるのは、長い歴史を持つ日本の食文化のひとつなのだが。アラスカや北極圏のエスキモーも、古くからクジラを捕獲し食べている。

捕鯨母船も、捕鯨に対する世界の厳しい監視があり、

国際捕鯨条約の範囲で操業しているのだろう。日本の捕獲の年間割り当ては、ミンククジラ九百三十五頭ほか百頭で、合計千三十五頭ある。

一九五七年建造のピースボートも来年にはスクラップされ、中古だが比較的新しい船を入手できる予定だが、この船は十七ノットの速力が出せるらしい。現在の乗組員は三十五人の男女で国籍はさまざまである。汚く狭い台所で、中年の女性が床に座り込み、夕食の用意でトマトを切っていた。

今回は、補給と乗組員の休養のため二週間ほどメルボルンに滞在するが、十二月の中旬には出航し、捕鯨季節の南極の海に向かう。前回アフリカの近くの島に寄航しようとしたが、そこは日本のマグロ漁船の基地で、日本からのODAや経済援助を受けているため、外交的に締め付けがあるらしく、寄航できなかった。

ピースボートは、小型で、狭く、全体が薄汚く、暗い。航海に一番大事な燃料を最大限積むため、真水の積み込みは極端に制限され、航海中乗組員は三日に一度しかシャワーができない。部屋も船長は個室だが、一般乗

組員は二、三人共同部屋である。

十五年前、観光で和歌山県の海岸を回った時、太地町のクジラ博物館を見たことがあった。博物館の前に銅像があり、「莊司五郎」とある。土地の漁業功労者らしい。私の叔父の一人に、「莊司五郎」がいた。私の家も戦前までは網元だった。私の故郷千葉県の町の電話帳には「莊司、庄司」の苗字が三ページを占める。千葉県北部の醤油業者は、紀州出身であることは歴史的事実であるが、おそらく私の家系も古くは紀の国の漁師でクジラも捕っていたのだろう。いずれ機会があったら故郷で、古老か郷土史研究家に尋ねてみよう。ピースボートを見学して、図らずも自分の家系を思い出した。

現在国際捕鯨条約の範囲で捕鯨をしているのは、日本、ノールウェイ、それにアイスランドであるが、ピースボートがいちばん憎んでいるのは日本捕鯨らしい。乗組員は、世界の環境保護とクジラ資源の保全のため、命を賭けているのだろう。それにしてもピースボート内の生活環境は最悪である。乗組員の健康と無事を祈る。

情報通信と放送の行方

杉 浦 右 蔵

「悠遊」には過去二回表題に関し歴史と今後について書きました。今回は間近に迫った五年後、現在のアナログ放送が強制的にデジタル放送に切り替えられること、電話の仕組みがNGN (Next Generation Network) という新しい技術に移行しようとする点について日本国民に重大な影響を及ぼす問題点を考えてみたい。

デジタルテレビが抱える問題

アナログテレビの技術

いま私たちが見ているテレビの技術方式は三つ有ります。日本はNTSC方式です。この技術採用国は、米国・日本・フィリピンだけです。世界の圧倒的多数は、ドイツのPAL方式を採用しています。フランスのSECAM方式は仏圏くらいです。日本の廃品回収者の集めたテレビは改造されてPAL地域で活用されていると思います。

デジタルテレビの技術

世界のデジタルテレビ方式は主に三つの方式があります。①欧州型(DVB) 通常画質の多チャンネル化を目的に開発された技術②アメリカ型(ATSC) アメリカやカナダ、韓国などで採用。③日本型(ISDB) 日本の独自規格。一つの電波を十三のセグメントに分け、多チャンネル放送を行うことが出来る。二〇〇六年六月国際電気通信連合(ITU)は、デジタル放送方式採用をめぐり、旧ソ連・アフリカ・中東の計百二十カ国地域が欧州型で二〇一五年までにデジタル移行すると合意しました。世界の六十%の巨大市場が欧州型の採用を決めたことで日本型は苦しい立場に追い込まれました。

取りこぼしアナログテレビの救済

日本には二億台のアナログテレビ・VTRが稼動しているといえます。JEITAの予測では、地上デジタルテレビの普及は二〇〇六年一四三七万台、デジタル切替の二〇一一年時に五九一八万台と予測しています。約一億四千万万台が落ちこぼれとなります。今チューナー単体の値段はデジタルテレビを売る見地から、べら棒に

高額の六万円もします。救済にはチューナーを千円程度か無料で頒布するしかありません。

アナログテレビ機器の廃品対策

お分かりのように今後五年間で六〇〇〇万台のアナログテレビの廃品が出現します。環境問題になる以前に施策を公表する必要があります。

電話はどうなる

固定電話の行方

固定電話とケータイ加入者数が逆転したのは一九九九年十一月です。私の家でNTT東に毎月の支払いしてるのは基本料を入れて三二〇〇円程度です。これでは通信会社はやっていけません。世界的な潮流として傾向は同じで、ITUは、電話IP化を推奨しています。

インターネット

本格的普及はマイクロソフトがWindows95を発売してから善と悪が競争しながら当初の考えを越えて社会の既成慣行を破壊しながら爆発的に発展しました。

IP電話

インターネットを利用した電話の仕組みが、ベルの電

話発明以来百数十年ぶりに改革進行中です。一番大きな変革は料金体系の破壊です。それ故に固定電話会社が潰れる寸前です。IP電話は、PBX系の代替、固定電話加入者の置換や囲い込み、などの過当競争を強いられています。更にはSKYPEなるソフトも現れ混戦模様の困った状態になって来ました。

NGNへの移行

インターネットをベースとしたIP電話の普及は、固定電話、ケータイ電話、放送、の融合を余儀なくされました。二〇〇四年五月ITUは、FNGN (Focus Group Next Generation Network) を発足させ二〇〇五年から二〇〇八年にかけて世界の標準化を進める決定をしました。ネットワークの基本には、欧州電気通信標準化協会の中のTISPANの成果をITU・Tで採用することを決め、これを元に細部の検討を進めています。韓国も中国も日本以上に研究成果を発言しているといえます。NTTも二〇〇四年にNGNへの移行を発表し、二〇〇六年十二月に実験システムを開始しました。NGNはユビキタス社会を目指して家電まで人間の社会生活

全部の全てを融合しようとしています。

警鐘・日本の危機

日本の情報通信普及は百三十年の歴史の中、先進的で世界でも研究をリードしてきました。しかし国営から民間への潮流は傾けるとしても、競争による料金引き下げの美名の政略により、現在世界の企業が巨大合併の傾向にあるのに日本は細分化競争を政府は進めています。NTTも細分化競争を強いられ、持株会社の総合電気通信研究所の維持が危ない。電電公社が電電会社になったとき、優秀な研究職員が殺到しましたが、その人々は今、大学の先生とか民間企業に分散しています。細分化されたNTTも、それぞれ研究機関を持って小型化し自分の分野の研究にしか手が回らない。日本の各競争会社は欧米が標準化した世界技術を金で買って来る起業しか出来ない。日本は技術世界標準化貢献を放棄するしかない。テレビ技術で孤立化し、情報通信で韓国、中国の国家戦略に後れを取り、技術立国日本は沈没の危機に立たされている。このことは、製造メーカーの世界進出の目を阻み、亡国への道しかない。私の提案は、政府が米国の

第二次大戦後の世界戦略、食料・エネルギー・情報、の制覇に追従せざるを得なくとも、情報通信に限って言えば、情報通信に関わる企業から売り上げのパーセントを徴収して、巨大国家戦略を作り欧米に負けない研究機関を併合創設することを早急に政府に望みたい。



孫と障害

弱者との共存社会へ

高橋 孝蔵

孫は誰にとっても可愛いものだ。私の二番目の孫は永年子供を待ち望んでいた娘夫婦のところで生まれた。二年前の十一月十四日のことである。その一年前の同じ日のことだが、私は大動脈瘤が破裂したが、手術に成功し、辛うじて一命を取り留めた。神は私の命を助けるばかりでなく、次の年になったが、奇しくも同じ日に新しい命を授けた。同じ日という縁もあって、孫の真那は特に愛おしく思われてならない。

真那は人一倍大きく、元気で、よく笑う。新しい遊びを考え出す天才でもある。ヘアバンドを頭に乘せると、走り出す。ヨーイドンごっこだ。運動会で見た鉢巻きを締め、走る姿を真似たのだろう。家中の電気を消し歩く、スイッチ押し遊び。琥珀の首飾りなど首に一杯ネックレスを着けて歩く貴婦人ごっこ。傑作はお辞儀ごっこだ。

手を二三度振って、ニコツと笑い、二度ほど頭をペコリと下げる。空港やレストランでこれをやる。目が合った人が飛んできて「私に挨拶したのよ、何て可愛いのに」と大騒ぎになる。飄軽な仕草で笑みを誘う。一緒に遊んでいてとても楽しい。

その彼女に、神は残酷にも聴覚を付け忘れた。娘夫婦は何度も検査のやり直しをさせた。自分の子に限ってそんなことはあるはずがない。万が一の誤診を期待したが、結果が変わることはなかった。最終報告が我が家に伝えられた夜、家内は布団をかぶり、声を殺して泣いた。私も寝付けなかった。

何しろ音のない世界は想像もできないことだった。彼女にとってラジオとは何だろうか。音楽会に行くこともないだろう。ボーイフレンドに映画を誘って貰うこともないのだろう。小遣いをためてCDを買いに走ることもない。後ろから大声で危いと怒鳴られても判らないだろう。次から次へと心配事が湧き出てくる。

今、真那は動作で意志表示する。野球帽と上着を持つ

てきて、玄関を指させば、お外に遊びに行こうという誘いである。動かねば手を引つ張られる。自分の靴を履かないときは、マンションの隣にあるプールで泳ごうという意味である。小さい頭脳を精一杯に使つての表現である。

しかし、しゃべる言葉の威力には遠く及ばない。近くの児童館やジムの幼児センターでは同年代からその上の幼児が遊んでいる。自分の好きな遊具に手をかけ、少し年上の子供に突き飛ばされたことがある。「私が先なんだから、貸してやらないよ」という言葉が耳には入らなかったためだ。乗物の遊具に乗っていて、他の子が一緒に遊ぼうよと言ってくれても、聞こえないので拒絶してしまう。社会生活を営む上で、口頭コミュニケーションは想像していた以上の役割を果たしている。

聾唖学校の先生によれば、遅くとも小学校に入学するまでに、音が聞こえないことに気づき、大きな挫折感を味わうという。「何故私を生んだの」、「生んで欲しくなかった」と親に食ってかかる。最大の危機である。

家内と共に手話の勉強を始めた。正直言つて、年を取っ

てからの新しい言語の習得は並大抵のことではない。しかし、危機に直面する前に必ず「真那は私たちのかけがえのない宝物」ということを伝えたい。「真那には素晴らしい人生が待っている」ことも教えたい。

最近、障害者についての本、記事、テレビ番組に関心が行く。聴覚障害者、視覚障害者、脳性麻痺者、身体障害者など障害者数は決して少なくない。しかし、日本の対策は後進国並といわれる。例えば、アメリカでは聾唖者への教育が充実していて、手話による講義を行う大学が幾つもあると聞く。

高齢者も最後の段階はある意味では障害者といえる。足が不自由になる。耳が聞こえない。目が遠い。頭は呆ける。こちらの方は介護保険がある点、まだましたが、十分とは云えない。今後の日本は活力も欲しいが、同時に障害者、高齢者など弱者に対しても優しい国であつて欲しいと考える。

人間―この複雑怪奇なもの 人間はうそをつく

都 甲 昌 利

最近、テレビや新聞で嘘をついて謝る人間を多く見る。はじめがあったのに、なかったと言って責任逃れをする校長、欠陥車の存在を隠して嘘ついて、ばれて平誤りをする自動車会社幹部。マンシヨンの耐震偽装問題で建築士や建設会社の社長らがうそをつきまくった。政治家をはじめ、平気でうそをつく人間が以前より増えたような気がする。私は幼少の頃、母から「嘘をつくと閻魔様に舌を引き抜かれますよ」と諭された。怖い顔をした閻魔様の前で言われると本当に怖かった。しかし、今考えると母は嘘をついたことになる。そんなことありえないからだ。これは嘘といえるのだろうか。

犬や猫の動物は嘘をつくのだろうか。犬は実に正直だ。だから人間が飼ってかわいがるのである。嘘は言語を持つ人間に特有なものかもしれない。四、五歳の幼児も実

に正直である。ということは、嘘をつくのは知恵の付いた大人の人間だけということになりそうだ。

私は嘘という思い出すのは、若い頃読んだゴースキーの戯曲「どん底」の中にある一節である。

十九世紀のロシアに生きる底辺の人々を描いた作品で、さまざまな階層の人々が暮らす木賃宿にルカという年老いた巡礼者がやってきて道を説く。ある者はペテン山師と非難するが、元役者のサーチンが啖呵をきる。

「爺さんは山師なんかじゃない！ 爺さんは嘘をついた、だがそれは、お前らを哀れに思う思いやりから出た嘘なんだぞ、近いものに対する思いやりから嘘をつく人間はいくらでもあるよ！ 俺は知っているよ、本で読んだよ、そういう人は皆実にきれいに、精神込めて、人の気を引き立てるようにうそをつくんだ！ 世の中に、人の心を慰める嘘もありや、和らげる嘘もある。労働者を押しつぶすようなひどいことを弁護する嘘もある。俺はうそのことは良く知っているよ。気の弱い奴や人の汁を吸って生きている奴には、嘘は必要物だ。」

ある奴は嘘でもっているし、ある奴は嘘に包まれている。だが、しっかりした人間、人を頼りにしない、他人のものをあてにしない人間にはうそつく必要は少しも無い。真実とは一体なんだ？人間―これこそ真実だよ！

サーチンのせりふは心にグサツと突き刺さる。嘘の本質をついている。現代にも当てはまる。嘘をついた校長や欠陥自動車を作った会社の幹部は嘘が必要だったのである。医師が末期のがん患者に対して嘘の病状を告げる。これなどは「人の心を慰め和らげる嘘」だろう。人によっていろいろな見方があるだろうが、これは許される嘘だと。ブッシュ大統領は「イラクに大量破壊兵器がある」と嘘ついてイラク侵攻を行った。実にきれいに精神込めて、国民を引き立たせるような嘘をついた、と言えよう。

「嘘」とは少しニュアンスが異なるが、「虚偽」という言葉がある。学歴を偽ってそれがばれて国会議員の職を辞任させられた浅ましい男がいた。税金の虚偽申告などもそうだ。ゴルフでも虚偽申告をしたら失格である。「嘘」も「虚偽」も結局は自分を守るためのものなのだ。

小説家はよく嘘をつくといわれる。それは創り話であるからで、想像力を駆使してありえないようなことを文章にしてゆく。その小説は人々に感動を与えて人間の真実に迫ってゆく。この意味で小説家は「嘘」を題材にするが「うそつき」ではない。嘘をついていたら社会的信用を失うからだ。上手に精神を込めて嘘つく人間に詐欺師がいる。実に上手い。振り込め詐欺なんかはその典型だろう。高齢者が被害にあっているところを見ると彼らはやはり本当のように嘘をつく。

なぜ嘘をついてはいけないか。それは社会的信用を失うからだ。何度も嘘をつく人間は相手にされなくなる。常識人にとってはこれほど恐ろしいことは無い。しかし、それ以前に私などは嘘をついた後は心にしこりが残る。内心忤怩たるものがあって「どうして、あんな嘘をついてしまったんだろう」と夜も眠れないときがある。そんな思いを二度と味わいたくないので、正直が一番良いと考えている。正しく生きていけば怖いものなんか無い。

オウム真理教の麻原彰晃は本当に有罪なのか？
マスコミ報道はどこまで信用できるのか？

豊 前 華
とよ まえ はな

私がこんな文章を書くと、「お前は気でも狂ったのか」といわれそうだが、少しでも我慢をして私の拙い話を聞いて貰いたい。

私の手許に一冊の本がある。『麻原を死刑にしてそれで済むのか？』麻原弁護団の団長を勤めた渡辺脩弁護士の本である。

この本を読み進めるうちに私は「やはりそうだったのか」と少しも民主化していないわが国の実情に暗澹とした気持ちになった。

詳細は是非この本を読んで頂きたいが、概要を述べる
と、「坂本弁護士事件」、「松本サリン事件」、「地下鉄サリン事件」のいわゆるオウム三大事件についての検察側が提出した証拠がまったく証拠の体をなしていない、という事実である。また三つの事件を麻原師が指示したと

される点についても、弟子たちの証言はまちまちでお互いに矛盾に満ちている。

残念ながらここでこの問題を詳細に論ずる紙数はないが、一橋文哉『オウム帝国の正体』新潮社刊を是非一読願いたい。著者は麻原彰晃を犯人としてこの本を書いているが、その紙背に見えるのは、暴力団と政治が絡み合った恐ろしいわが国の現実である。

一四三頁からその一例を引用する。

『「いったい、どこまでやるつもりかね』

『.....』

元首相の思わず、唾を飲み込む音が聞こえる。

『とげなさんな。オウムのことだよ』

この夜は、十二人もの死者を出した地下鉄サリン事件から、まだ一週間も経っていなかった。

『始まったばかりじゃないか』

『うむ。だがあそこを突つくと、いろんなボロが出てきて、大変なことになるよ』

『まあ。政府もそんなことはしないわな』

『自分の首を締めることになりかねんから、念には念

を入れておかまいとなあ』

・・・・・・・・・・

この日の会談は、急に行われた。当日になって突然、フィクサーから申し入れがあり、既に予定の入っていた元首相は、無理やり都合をつけて現れた。

・・・・・・・・・・

いかにも、きな臭さが漂う会合であったが、一つだけハッキリしているのは、この時、一連のオウム事件の幕引きが決まった、ということである。

オウム真理教の最高幹部の一人、村井秀夫が刺殺されたのは、この密談から一か月も経たない（九五年）四月二十三日の夜のことであった」

話を戻そう。私はなぜこの事件に疑問を抱くことになったのか。

それは数々の経済予想、未来予想で二十世紀末をリードしたラビ・バトラ教授の『神との約束』PHIP研究所刊という一冊の本からであった。

この本には、彼がパパと呼ぶアナンダ・マルガ教団（インドの宗教法人）の指導者、P・R・サーカー師のイン

ドでの受難の様子が詳しく記されていた。

詳細はこの本をお読み頂くとして、一九六七年に始まる共産党が主導権を握る西ベンガル州政府によるでっち上げ事件による裁判。さらにその事件が無罪となる七十年代には、インディラ・ガンジイ首相による弾圧がはじまった。

その内容は弟子の一人が逮捕後に、「尊師の命令で五十人を殺した」と自白し、近習として仕えたことのある他の弟子が「そんな話を聞いた」と訴えたものである。サーカー師の場合は麻原よりも悲惨で、妻にまで裏切られたが、結局は無罪となっている。

この話を読みながら「どこかで似たような話を聞いたことがある」と私は思った。それがオウム事件であった。村井が死んだ今となつては、誰が指令を出したのか、真相は藪の中である。「村井が死んで、麻原は助かった」と警察はいうが、村井を暴走させたのがサリン事件を事前に知っていた警察だったらどうなるのか。

先程登場させたフィクサーは、竹下登の「ほめ殺し事件」を解決した人物だ、ということはお分かり頂けたと思う。この事件の闇は、我々の想像以上に深いのだ。

上高地の「鵜飼正直・山岳蔵書」

鵜飼 直哉

昨年（二〇〇六年）の秋、上高地へ行ってきた。父親が上高地帝国ホテルに寄贈した「鵜飼正直・山岳蔵書」を見るのが目的だった。私が実際にこれを目にするのは今回が初めてのことであった。今までに何回か出かけてみたいと考えてはいたものの、いずれと思っているうちに機会を逸していた。

上高地帝国ホテルには、ロビーの奥に読書室がある。書棚が周囲に並んでいて、滞在客は自由に本を手にすることができるといえる。さすがに山の関係の本や写真集が多い。その一角に、「鵜飼正直・山岳蔵書」と記した棚が三列あり、ここだけは鍵がかかっていた。

支配人に訳を話して開けて貰った。何冊かは、以前自宅の書棚で見た記憶もあったが、二百冊以上の蔵書的大部分は初めて見るものだ。

本と一緒に父がワープロで作った目録があった。目録の中に「比較的稀観価値のある近代山岳書」と分類されている三十六冊のリストを見て驚いた。昭和四年発行の藤木九三著『屋上登攀者』と題した本を筆頭に昭和十年頃までの初版本がずらりと揃っている。もちろん私にはその一冊一冊の価値は分からないが、当時の代表的名著であったことは容易に想像できる。

目録の「あとがき」に「私は所謂『山男』ではない。唯、やたらに山が好きなのである」として以下、山岳図書の蒐集を始めた経緯が書いてあった。学生時代には山へ頻繁にでかけていたが、就職後はその時間が全くなくなり、思い立って山岳図書の蒐集を始めたようだ。

一カ月の生活費が一人五百円に抑えられていた時代に、偶然見つけた著者楨有恒氏の署名入りの『山行』という貴重本を千円で購入したなど、驚くような執念である。そんな父の拘りは全く知らなかった。

今回の上高地行きは、今から十八年前アメリカ駐在を終えて帰国したとき、両親と妹とを誘って以来のことだ。

こんな機会はこれから先には多分ないだろうと思つて、帝国ホテルに宿泊した。若い頃には山登りが趣味であつた父も八十歳を越えて、足がすっかり弱くなつてゐた。河童橋のあたりを散策するのがせいぜいであつたが、天候にも恵まれて周囲の山々に、父は懐かしそうであつた。興奮気味に話す昔話も、山に無関心の私には、耳に入つていても記憶に残つていない。

それから数年後、両親は辻堂の自宅を売つて茅ヶ崎のマンションに移る決心をした。今から考えると、その時の父の悩みは、若いときから買い集めた山岳蔵書の処置だつたようである。なにしろ、一人息子の私が山に全く興味を示さない。三人の妹たちの嫁ぎ先にもこの蔵書の価値が分かる者がいない。ほつておくと、いずれ神田の古本屋にでも売られて霧散してしまふ。あれこれ思案する父に「上高地の帝国ホテルにでも寄贈したら？」と私が提案した。提案と言つても成算があつてのことではない。だが父は思つてもいなかったこの案に飛びついた。

幸い元住友銀行頭取の伊部恭之助氏が高校時代以来の親友であつたことから、帝国ホテルの当時の犬丸社長に

紹介されて話ほとんどん拍子に進んだ。犬丸社長ご自身がこの分野にも造詣が深く、二・三の著名山岳書の名前を挙げて、それが父の蔵書に含まれていることを確かめただけで、数日後には申し出受諾の書類が届いたそうである。そんな経緯があつて、貴重な価値があるとの意見から鍵のついた書棚を特別に用意して頂けることになつた。大喜びして私に電話があつたことは記憶にある。

「あとがき」の最後にはこう書いてあつた。

「私は本当に幸福感と満足感で胸が一杯である。六十有余年苦勞して集めた愛蔵書は、自分が生涯の中で最も好きで足を運んだ上高地の、然も最高の場所に安住することになった訳だ」。父は一九九九年に永眠した。

私は父とあまり対話らしい対話をした記憶がない。

だから、父の山岳図書に対する思い入れは知らなかつた。知つていればもっと早くから「鵜飼正直・山岳蔵書」のことを山好きの友人たちに話しておくべきだつた。

今からでも遅くはない。同好の諸兄の方々に、上高地へお出かけの際には是非とも見てやつて頂きたい。

インターネットと世界の窓

渡里 清

私は宮城県の地方都市の大学に転職して九年。この間の大学もそれなりに国際化を目指して、大学紹介を日本語だけでなく英語でも行うようになりました。国際化を目指すことになりました。

それに伴い私宛にも大学のURLから色々なメールが英語で入ってくるのです。例えば、スカラシップを得て貴学で学びたいので世話をしたいとか。これには本学は日本語で講義を行うので、先ず日本語を習得してから志願してくれと返事。アジアのWHO、S.WHOを作成するについて貴殿を候補者の一人に選んだ。については申込書に記入して送り返して欲しいなど。この「アジア人名録」は迷いつつも一寸色気を出して書式に記入して送りました。すると原稿の校正が来て、近々発行予定の初版を四十%割引の特別価格で申し込み出来ますと銀行口座を書いた本音の案内が来ました。来年は定年だから

要らないと断りましたがさてこの後どうなりますか。

数日前には西アフリカのトーゴの弁護士という人から勤務先にゾクゾクするようなメールが来ました。内容を要約しますと、ワタリと言う私と同姓の日本人一家が交通事故で亡くなった。長年トーゴで事業をやっていて多額の資産を残した。以来この弁護士は日本の大使館でいろいろ血縁者を探したが見つからない。そこでインターネットで探していたら私を探し当てた。もし私が同意すれば遺産一千万ドル余りの相続権を「最近親者」として同姓の私に与えるので、相続の比率や手続きなど話し合いたい。必要な書類は揃っているし法律違反になるようなことは無い、と言うものです。

一千万ドルと言えば相当な額の資産です。半分でも五億円以上、間違っても最低二、三億円は入りそうです。年末ジャンボよりは確実かもしれません。もしそれだけの資産を手に入れたら、それを元手に定年後の仕事が何かできるでしょう。人に頼るのではなく、他人に頼られる。学生時代の友人やあいつの奥さんにも声をかけて……など夢が膨らみました。

しかし、この年まで苦勞を重ねてきて世の中にそんな甘い話が転がっていないことは充分に承知しています。ウィルス疑いました、恐るおそれるメールを開いてみたけれど何も起こらない。まずウィルスの被害は関係無いようです。

そこで学生時代の友人のメール仲間に相談しました。早速一人から「先ず相続したい」と希望を出してみたらどうか。その上で冷静に成り行きを見てもよいじゃないかと言ってきました。化学品メーカーに勤務していた友人にしては前向きです。仮に相続が出来なくても、せめて社会勉強にはなるでしょう。でも念のため用心して返事のメールは自宅からではなく、休み明けに勤務先のパソコンから打つことにしました。

別の友人からも来ました。大手商社でアフリカ駐在経験者である彼は慎重です。以前、ナイジェリア発でこの種のメールが複数の同僚に入ってきて、乗った連中が苦勞をしたことがある。トーゴには日本の領事館は無い。ナイジェリアの隣国ゆえ多分ナイジェリアの大使館の兼轄の公算が高い。トーゴには日本の企業は無いので在留邦人はいないはずだ。ナイジェリア・マフィアの仕業で

あろう。暇があるなら時間つぶしに乗ってみても良いが徒勞に終わるだろう、と言うものです。

私は、もし遺産を相続すると言うことになれば、先ずワタリ家の墓も建て、お参りもしなければいけないだろう。場合によってはお坊さんも連れてトーゴまで遺骨を引き取りに行かねばならない。何月ごろにその時間が取れるだろうか？ とりあえず、「ワタリと言う姓は日本では非常に少ない。もしよければ私が探して見ましょうか？」と返信をしてみるか、など考えていたのですが、このメールで迷いは吹っ切れました。からかい半分の返信メールは送らないことにしました。

かつて、ニューヨークや北京で「世界の窓」Windows of the World」と言うレストランが高層ビルの最上階に出来たとき、見晴らしの良さを楽しみながら、「世界に開くこの窓に何がやって来るのだろうか？」と夢を描いたものでした。数十年を経た現在、パソコンのWindowsを経由してとんでもない夢が舞い込んで来る時代になりました。将来、パソコンのメールから有害な光線や放射線が飛び出す時代にはならないようにと祈ります。

親の介護は子の責務

吉 寄 清 巳

私は中国の東北、チチハル市のイスラム清真寺を訪ねたとき、寺の主任楊さん、当時六十七歳は次のように語った。終戦の混乱のなか、日本の夫人たちは止むを得ず幼い子供を大陸に残して帰国した。子供は、現地の中国人から見れば自分達の土地に勝手に乗り込んできたよそ者の子供である。しかし、中国の人々は日本の幼児を自らの家に温かく迎え入れ、自身の子として育てた。ところが、大人になった日本人孤児たちは豊かな日本に憧れ移住すると言う。中国に残こされるよばよばの養母は、誰が介助するのかと、楊さんは怒る。

戦時中、京都府からチチハルに來た今井さんは七十歳のお婆さんになっていた。終戦のとき、南満州鉄道に勤務していた夫は行方不明に、彼女はソ連軍の進駐、逃避のなか日本に帰国できず、中国の農民に助けられ再婚した。中国人の夫が亡くなったとき、今井さんは日本に帰

りたかったが、京都には自身の老後をみてくれる身寄りがいなかった。チチハルには、彼女が生み育てた四人の日中混血児とその家族がいる。今井さんは子や孫たちに見守られて幸せだと言っていた。

今年の冬、日本海側は豪雪であつた。雪深い山村で、独りで暮らすお婆さん、高齢者夫婦だけで生活する人たちがいかに多いかを知らされた。雪の重みでつぶされた家の下で亡くなったり、屋根の雪下ろし中に転落するなど、老人たちの事故は痛ましかった。豪雪地帯の自治体は、困っている年寄りたちを救うためできる限りの手を尽くしている。ところで、雪国の老人たちは公務員に助けを求める前に、自身の老後の生き方をどのようにすればよいのか、子の意見を聞き、それに従うべきである。我を通さず、子と同居するのもよい。それが出来なければ介護施設に入るのもよい。私は、雪に埋もれた家に閉じ込められ、じっと我慢している老婆のテレビを見て、これは現代版姥捨て山だと思った。今日も、東京のど真中で、孤独死の老人が見付かった。老人は可哀そうに子にすてられたのだろうか。

先日、私と妻が参加した海外ツアーは、定年退職した夫と妻が多かった。この人たちと話しをすると、子家族と同居したり、あるいは子とじっくりと気の合う熟年夫婦であった。参加者に、有給休暇をとった四十代の独身女性二人も加わっていた。二人は腰をかがめて歩く老人に比べ若さが目立ち澁刺としている。この利口そうな彼女らでも、年をとれば、たれ流し、徘徊が襲ってくるかもしれない。そのとき彼女らはどう対処するのだろうか。私は八十一歳の高齢者である。それでも年金から介護保険料が天引きされている。若いとき贅沢な生活を楽しみ、老後資金をためず、嫁が生まれまじの愚かな女たち、老いて痴呆婆さんになったとき、社会の弱者を救うと称して、私の介護保険料を使うのは御免こうむりたい。

老いた親を物扱いにして、いじめたり、暴力をふるう若者は馬鹿者である。過保護で我慢知らずに育ち、自尊心のない、何事も他人のせいにする自己中心の子が多くなった。老母の汚い糞尿の世話は公的介護がしてくれると思っている。また生活保護を受けている高齢者世帯は増えている。子は親の生活を助けるつもりはない。これ

では国や自治体の借金は増える一方である。

親は子を育て、子は親に孝行と私は教えられた。老親の世話は家族全員でするもの。私は多くの事務経費をかける介護保険制度はなくてもよいと思っている。

私の母は三重県伊賀市の家で突然倒れ寝たきりになった。父は男尊女卑時代の明治の男である。妻のシモの処置などするつもりはない。私は母を名古屋の社宅に引き取った。介護は大変である。仕事が増えた妻は疲れてくる。妻の息抜きに、ときどき母は日赤病院に預かってもらった。小さな家のなかで、私らと二人の子供は三年間母の世話に苦闘した。

八十五才になる父は自身が建てた家に独りであると言いつ張った。生れ、育ち、住みなれた伊賀市には、父の話し相手になる昔からの友達が多くいるから無理もない。しかし、私は、父が認知症になって、ご近所に迷惑をかける前に名古屋に移る方がよいと説得した。父は私らと生活を共にして天寿を全うした。両親の介護費用は、息子である私が支払った。私は公的な支援を受けるなど考えたこともなかった。

フルベッキのこと

吉田 邦彦

「それではフルベッキのことを聞いたことがあるでしょう？」去る六月、ある美術団体懇談会の席上、旅の話をしていた私に先輩の北川さんが笑顔で話しかけてきた。

「いえ知りませんが……、人の名前ですね？」私は何気なく聞いた。

北川さんはいつまで説明をしてくれた。ひと言でいうと明治維新の頃のお雇い外国人の一人であるが、私にとっては当然知っていなければいけないよと言われても仕方なかった。そのわけは私達家族の交流先がオランダのザイストと言う所で、フルベッキの生まれ育った故郷だったからである。

この六月にフランス出張の帰途、昨年の悠遊十三号で触れた、亡くなった友人の墓参りをしようと思っていた矢先で、もう出発まで十日足らずだったが急いでフル

ベッキについて調べることにした。

北川さんは彼に関する図書を紹介する一方、資料のコピーを送ってくれたり、目黒の久米美術館にも電話を入れ私のことを紹介してくれたり、手をつくしてくれた。早速地元の図書館に行つて一冊借り、急ぎ読んでみた。

それは「明治維新とあるお雇い外国人フルベッキの生涯」（人物往来社刊、大橋昭夫、平野日出雄共著）であり、フルベッキの大まかな輪郭が分かった。

ギドー・フルベッキはオランダの小さな町ザイストに四人兄弟の二番目に生まれ、モラビアン教会の学校に通い語学の才能に秀で、のちにハケ国語に通ずるまでになった。彼は工科学校を卒業すると米国に渡り技師として働くがコレラにかかり、九死に一生を得る。病床でもし生きることができれば布教のために身を捧げたいと決心し、日本に宣教師（他の二人とともに）として派遣された。最初の十年を長崎で布教と教育で過ごし、その中には大隈重信、副島種臣、前島密ら後に明治政府で活躍する人たちが数多く含まれていた。彼の評判は新政府の耳に入り東京へ招聘された。

彼はザイストでの両親、兄弟姉妹との質素な家庭環境の中で生い立ち、モラビアン学校での規律ある勉学、米国での厳しい労働、病床での祈り等で培った敬虔、忍耐、控えめな態度を通じて日本人と対等に向き合ったことが新政府の要人に好感を持たれた。岩倉欧米視察団への支援をはじめ、あらゆる分野での奉仕、貢献を惜しまなかったこと等が評価され、明治天皇から異例の勲三等旭日章を授与され日本国内での自由な旅行を許可された。

亡くなる数年前から心臓、腎臓の病で体調をくずし、春を待たず三月十日に赤坂葵町の自宅で六十八歳の生涯を閉じた。今回彼のお墓が青山霊園にあることを知って訪ねてみた。外人墓地は霊園のほぼ真ん中に面し、フルベッキとマリア夫人のお墓は東京都が用意した角地であり、かなり立派な墓碑が建っている。彼を尊敬する政府要人や門下生、三十九名が募金趣意書を配布し、その募金で建てたものである。

その墓碑には「一八三〇年一月二十三日にオランダで生まれ、一八五九年十一月七日に日本に来て、一八九八年

三月十日に日本で逝去。この記念碑はフルベッキ先生によつて学んだ知友たちにより一八九九年建立された」(原文のまま)と刻まれている。これをみてもいかに彼が惜しまれた人物だったかが想像できる。他の多くの墓も同じお雇い外国人と思われるが、風化しつつあるのに比べ、彼の墓地は普段から手入れが行き届いているのがひと目でわかる。事務所の話では明治学院大学が管理者となっているので安心ですと言っていた。私はその足で高輪にある同大学を訪ね、歴史資料館の原館長さんにいろいろ話を聞くことが出来た。フルベッキは晩年、公職から身を引き同大学で教鞭をとる傍ら、ヘボン博士と共に経営にも携わっていた。その関係から二人の展示コーナーも整備されており、かなりの量の文献、資料があったので一部はコピーをいただいた。その上、佐賀県の洋学堂書店に電話をしていただき、ウイリアム・グリフィスによる、フルベッキ集大成ともいえるべき英文大著「日本におけるフルベッキ」の和訳書(松浦玲監修・村瀬寿代訳編、洋学堂書店刊)が三年前に五百部限定出版され、現在残部が少しあることを教えていただいた。八千円は高いと

思ったが思い切って注文した。間に合えばザイストに持参しようと考えたからである。

グリフィスはフルベッキとともに大学南校（開成校、東大の前身）の教師をつとめており、フルベッキを身近かに知ることが出来た人物である。

ここまでの経緯をザイストの友人ヨスにメールを入れたところ、フルベッキのことは百年以上の昔、東洋に渡った宣教師としてザイストでも年配の者は大抵知っているが、子孫は米国にいて現在当地には縁者は誰もいないということであつた。しかし彼が学んだモラビアン派の学校は今でも現存しており、私が来たときに案内するとう。

六月下旬、私はパリ北駅から列車でオランダのユトレヒトを経由しザイストに入った。ヨスが駅まで出迎えてくれ、二年ぶりの再会を共に喜んだ。

翌日の日曜日、ヨスは早朝から隣にある由緒あるモラビアン 학교に付随している教会の礼拝堂のミサに参加をすすめてくれた。ミサには近隣に住むお年寄りから幼稚園児位の子どもたちまで、オランダ人のみならず、黒

人やアラブ人も多く、真剣に祈ったり賛美歌を何度も唱和した。二時間あまりの礼拝のあと、ヨスは私を数人の牧師、知り合いの信者達に紹介した。私が持参した青山霊園の立派なフルベッキの墓碑写真を大勢が取り囲んで覗き込み異口同音に感嘆の声をあげた。牧師は裏庭にある膨大な数にのぼる平面の墓石に私とヨスを案内し、フルベッキの先祖の墓を見せようとしてくれたが殆どが風化しており、刻んだ文字が読めない有様だった。が、この学校、教会、墓地こそフルベッキが生まれ育ち、終生愛してやまなかつた故郷であつた。現在のザイスト市民にとつてフルベッキが近代日本の誕生に大いなる貢献をしたことはあまり知られていないが、謙遜で控えめな彼にとつては氣にも留めないであろう。その分、われわれ日本人が心に刻んでおきたいと思う。



特集・仕事の風景



吉田 邦彦

バイヤー三題

安藤 晃二

長い企業生活を振り返るとき、仕事の現場はいつも澆刺と語れる事ばかりではない。当事者としては、決して忘れ難い、胸の奥に仕舞い込んで口にできない、その様な胸の痞えを時の流れが解き放ってくれることもある。心に圧し掛かる生々しい話も今は懐かしい人間模様であり、やがては風化して行くに違いない。

私は世界に雄飛する職業像を描いて就職した商社で、若き日にニューヨークに赴任した。日本の製品を全米に売り込む立場であれば、ここでセールスマンの苦しみの洗礼を受けることとなる。米国の大会社の購買のヒエラルヒーが巨人の如く立ちはだかり、絶対に迂回することができない関所がバイヤーである。その上にいる購買部長ともなればもう哲学そのもの、良くぞと思う程正しい人が多い。一方バイヤーは権限がないだけにサプラ

イヤーを支配したが、いじめの構造は典型的であった。

オハイオにある一大ゴム会社向けに繊維資材製品とその金属版である鉄鋼製品の取引があり、会社では繊維、鉄鋼両部門が夫々担当していた。相手のバイヤーは同一人物である。或る時バイヤー氏がニューヨークに来訪した。鉄鋼担当者として連日もてなしに務め、同氏も上機嫌であった。食事の後コーヒーを飲みながら、今日五番街の高島屋で素晴らしいパールのイヤリングを見た、ボツリと一言。三、四人の席だったこともあり、次なる会話は耳打ちとなった。「妻はピアスだね」成程とそのメツセージを受け取り、上司の指示で先輩格の繊維部と相談、共同でギフトを送ることにした。翌朝、繊維部の担当者がデスクの前に来て黙って立っている。その浮かぬ顔がいまだに忘れることができない。「昨夜うちにも注文が来てしまったよ」何と有難や、ダブルオーダーである。担当者同士額を集めて悩んだ。夫々ぞ知らぬ顔でダブルデリバリーの結論となり、一件落着した。余禄を楽しむ人が居り、こちらは、いじめも止んでホッとした。

愛着を込めて「田舎の殿様」と呼んでいたイリノイの大機械メーカー、そのバイヤーM氏は複雑系思考回路の持ち主で、言わば御用聞きに訪れる我々に常に正しいアドバイスを与えることに無類の喜びと、優越感を感じているようであった。机の向こうで淡いサングラスの奥から凝視されると、心の裏まで見透かされるような鋭さを感じた。後に問題があつて解雇することとなる私の部下とM氏を訪れた際、同氏はこっそりその部下を呼び「諸君の間には憎悪が渦巻いている、気をつけなさいよ」と言われたという。脱帽である。あるときM氏曰く、「わが社の購買部では、サブライアーから二十ドルを超える贈り物や供応を受けるときには必ず会社に報告が義務付けられています、またそんなご心配は一切必要ないので」それでも同行の米人セールスマンとしては電話を入れる。「今晚如何」既婚者であるM氏は異性の友人と現れた。その高級レストランで取り残されている我々を尻目に、こよなくエンジョイするご兩人であつた。

シカゴのサウスサイドと言えば貧民街の代名詞である。その町に前世紀を思わせるレンガ造りの工場があり、スプリングワイヤを納入する重要顧客であつた。このサイズの会社では購買部長が全てを取り仕切る。K氏は、その実直さと、発言の重みで、企業の財布を任された人間の存在感がその人格と相俟つて人を惹きつける。ある日、アメリカならではの我社の取立て催促係が口汚く罵り、K氏より電話が来た。「おたくの審査部を連れて来てくれないか。」極秘裏に帳簿を全て見せる、その上で支払い延長に応じて欲しい、そのニコリともしない迫力に気おされ、検討した結果、会社の判断は是となり、K氏も立派に約束を果たした。その六十歳を超すK氏が乗継ぎでニューヨークに立ち寄ると言う。ラガーディア空港で出迎え、生まれて初めてというマンハッタンに案内した。摩天楼を一瞥する老紳士に一瞬驚嘆の表情が見られたが、後は二時間程昼食のレストランで懇談、その足でJFKに送り届けた。帰りは時速百マイルで脱兎の如く夕刻のニュージャージーへ突進した。朝、陣痛があり、独りで病院に行かせた妻と対面した。長女誕生の日の出来事であつた。

Entertainer（お座敷接待）

榎 本 喜三郎

私の三十歳台から四十歳台にかけて、会社がかなりの利益をあげ、社内はいつも明るい雰囲気だった時代があった。

その当時、私は備船課長という、新設の課員十人位のポストにいた。この課の仕事は我が社の系統の船主（ownerと言った）から、その所有船を定期間備船して、その運航を担当する課へ渡すという役目で、備船料とその期間を取決めるのが私の仕事のキイ・ポイントであった。交渉の相手方は大抵船主会社の社長が直接これに当たった。こっちは若造だが、その備船業務の責任者で、相手の社長は皆良い年配の人が多かった。一時は私の課で百隻以上の船を備船していた。

わき道の話になるが、百隻も備船していても、その各船の備船料と契約の満期更新する期日は、殆ど頭の中に入っていた。その必要があったのである。というのは相

手方船主会社の社長は、東京来ると（神戸の船主会社が多かった）昔馴染みの当社の社長のところへ、いきなり挨拶に出向いた。

すると、やがてうちの社長から私に呼出しの電話がかかる。事務所の階が違っていたので、どんな用件なのか内容が分からないが、とにかく既に社長と話し合いに入っている。その時その船主会社の所有船の備船契約更改の日時と、現在の備船料がいくらであるかを知っていることが必要で、担当課長としては「待って下さい。ちよつと調べてきます」という訳にはいかない。自然それらがみんな頭に入っている。

ところで題目にした Entertainer だが、私の仕事は相手社長の東京滞在中に新備船料を取決め、契約を更新しなければならぬ。新契約の期間は三か月、六か月、一年位である。マーケットの先行きを考え、一重量トン当り、一か月当り何ドル何セントと決めるのである。

相手方としては三隻か五隻を所有しているだけだから、新備船料とその新契約期間の取決めによって、これから先三か月から一年位の間その船については、会社の

経営状態が決まるわけで極めて大事な話だが、取決める内容そのものは簡単なことである。

しかしそれを自分の会社の社長がいる目の前で、相手方社長と交渉に入るのは必ずしも必要ではない。それは、後のことにして、とりあえず相手方社長を夜の席に招かなければならない。相手もそれを期待して楽しみにして東京へやってくる。そんな折に招く場所は、相手の年配もあり当たり前のように、芸者の入る料亭ということになる。そこで私の役目は Entertainer となる。

その頃流行したのは、お座敷で芸者の三味線にあわせて先ずお客の社長が唄う。赤毛氈の上に三味線を弾く芸者と社長が行儀よく並ぶ。それは大抵小唄だったが時には長唄の修行をつんでいる社長もいる。小唄に合わせて踊る芸者とともに、これら三人に一座が鳴りを静めて注目する。

社長の次には今夜の司会役として私がしゃしゃりである。そこで私も小唄の十や十五と長唄の二つや三つは唄えなければならない。こういう次第で Entertainer はアルコールに強くて、楽しい会話のネタが豊かで、その上

小唄なり長唄なりを三味線に合わせて、唄えなければならないという訳である。

「立ち方と言われて立つたが、貴方の前で、思うに委せぬ舞扇」（自作都々逸）

Entertainer（小唄稽古の巻）

「君達のサラリーのなかには、小唄や長唄の月謝の分も入っているんだから……」と課長になった当初、営業担当の常務に言われたことがある。その当時……今でもそうかと思うが……会社のあった日本橋界隈には小唄を教えるお師匠さんが、路地裏の一隅に住んで小唄の練習所をやっていた。お聞き者という身の上の人が多かったようだ。

その当時、小唄の稽古に熱を上げている会社の仲間と連れ立って、同じお師匠さんの許に通って稽古を受けた。昼飯をとる時間に飯を抜いて、歩いて五分か十分で行ける、その稽古場に週に一回か二回通ったもので、月謝は三千円位だったと記憶する。春日派だとか蓼派とかいう

のが主流で、家元はその派の名を名乗って、春日^{かすが}にながしとか、蓼^{たて}なにがしと名乗った。唄い方や三味線の節に、若干その派の特徴もあったが、大同小異だったようで、転勤で違う都会に行つて、その派の師匠の便がないと他の派の師匠についた。

今日ではこんな小唄の稽古に代つて、ゴルフの練習の方に人気があるだろうが、私は小唄の稽古もかなりやつたものだった。何年もやっていて、或る程度技術が上達（声や歌の音声や調子、節回し）してくると、家元の師匠から名前をもらつて、いわゆる「名取り」となつて、その派の芸名を許されるのだが（もちろん相当の礼金を出す）私は内地では東京、名古屋と転勤したので実力はあると自惚れていたが、名前をもらうことはできなかった。何か所もの稽古場をもつて二十人、三十人という数の弟子を抱える師匠は、年に二回おさらい会を開くのが普通だった。夏の浴衣^{ゆかた}さらいの方は、その稽古場だけの弟子でやるので簡略に済ませたが、総ざらいの方は、何か所もの弟子を集めてプログラムを印刷し、派手にやつたものだった。

熱心な人はこの日に聞きにくる知人、友人にその日の記念に何かの品を配ったりする。この総ざらいのために特別な会費を徴収される。師匠もその収入を当てにしている。小唄は健康のためにはさしてプラスにならないが、長唄は声量が必要なので、長くやっていると音声がかになり、健康のためにも良い結果を生んだようだ。一度はかなりたくさん覚えた小唄や長唄も今は殆ど忘れてしまった。またそんなことを披露するチャンスもなくなって久しい。

「二人で仕上げた貴方の小唄、独りで聞くには惜しい節」（自作）



私への勲章

松谷 隆

一九九一年五月十五日の朝、サンタクララの事務所で、日課の種類の新聞を読んでいた。全国紙「USA TODAY」の経済欄に「ビジネスおよびサービス分野でFRITOLAY、スミソニアン財団賞受賞」の見出しを見つけた。その九年前、初めて同社を訪問したときのことを思い出しながら、記事を読み進んで、驚いた。

「同社は二万人のセールスマンに端末機を携帯させ、一人当たりの事務処理時間を一日五分削減した。これは、昨年のコンピュータ・テクノロジーの最良活用事例である」との記事に、思わず「わあっ」と大声を出した。秘書が「何事か」と飛び込んできたのも、懐かしい思い出である。

どうして驚いたり、大声を出したりしたのか。それは、一九八二年五月、同社から「携帯用端末機を一万台」という引合いで、当時アメリカ担当の私が訪問し、商談を

始め、同年八月、ロサンゼルスの子会社との合併会社に出向後も、担当したからである。私は三年後に帰任した、その翌春に、足掛け五年で受注した商談である。

商談をはじめた時、富士通は日本向けの製品を開発中でアメリカのビジネスに参入できる状況ではなかった。アメリカでもこの端末機を製造・販売していたのは中小企業だけで、IBMを始め大手企業は無関心だったので、何とか競合できると思い、突っ走ったのが成功した。

担当事業部は、「一万台、五千万ドル」には魅力を感じていた。しかし、実力不足のため、二の足を踏んでいた。「将来必ず対応するから、なんとか商談を引き伸ばして欲しい」と頼まれた。幸い競合他社の動きも鈍かった。

一年後、やっと出張してきた担当課長を連れて先方を訪問し、要望事項の確認を始めたところ、先方の要求は当初よりドンドン拡大していた。記憶容量は倍増、使用環境条件は摂氏五十度からマイナス二十度までという。コンピュータ製品は空調完備の環境で使うことが当たり前と思っていた彼は、強烈なショックを受けていた。

それでも、彼は「当社製品の使用環境は摂氏零度から

四十度」と話し始めた。その説明を遮り、なぜそんな条件が必要かと質問した。答えは明確だった。「セールスマンは当社製品を積んだトラックを運転して、得意先を巡回する。夏のアリゾナの砂漠から厳冬のミネソタでのセールス活動に支障があつては困る。トラックの振動もあるし、舗装道路ばかりではない」。

恐れ入って聞いていた彼は「そんな製品を作る社内規格がない」と呟いた。これ以上話を続ければボロがでるので、次回に回答を持参すると約束し、早々に退席した。

彼に「関係会社が製造している自動車ラジオは、車のエンジンを掛けたら鳴ることが絶対条件だ。その上、安く作ることが至上命令で高価な部品を使つていない」と、懇々と言い聞かせ、「勉強に行かないと、商談を打ち切ると脅かした。

彼が帰ってから約半年間、なんの音沙汰もなかったの
で、ついに諦めたかと思つた矢先、彼から関係会社を訪
問し、有望な解決策を見つけたとの連絡が入った。これで、
合併会社内での「マージン率が低いから、商談中止」と
いう反対意見を封じ込めて、受注体制を整えた。

半導体メモリーも大容量の目処が立ったので、日本のユー
ザでの実用例を見て、当方の力を判断してほしいと提案
した。同社は自費で三名を派遣し、岐阜のユーザが、集
荷のためトラックの運転手にこの端末を持たせていた実
例を見て、安心してくれた。これで受注に大きく前進した。

一九八四年九月のことだった。

翌年七月の最終段階で、負け戦覚悟の競合相手が大幅
な値引きを提案、これに対応したため、ギリギリの採算
となったとき、残念ながら、帰任でお役ご免となった。

製品納入後も、日本では起こりえない想像を絶する多数
の技術問題もすべて克服された。二十年間、このユーザ
をサポートしている関係者の努力には脱帽である。

一九八七年、ハーバード大学のMBAコースの事例研
究に同社の事例が採用された。毎年各分野で一社にだけ
授与されるスミソニアン財団賞は、それに花を添えるも
のだった。これらは、私自身への勲章であると自負して
いる。好奇心とパートナーが与えてくれた勲章である。

なお、この携帯端末は、ワシントンのスミソニアン博
物館で展示された。この上なく、うれしく思った。

タッチパネルを支えた人々

中川路 明

素材産業の化学会社が、情報産業の基幹製品タッチパネルの国内での開発の先駆者として成功した。過酷な競争の渦中、なぜ異業種参入者が茨の道に開花できたか。支えてくれた多くの先輩、友人、顧客の顔が浮かぶ。

入社四十年で新事業開発を担当した私のモットーは、誰も手をつけていない商品開発であった。世の中になく商品にあるのはニーズだけ、開発には時間も掛かるし経費も掛かる。事業化後の成長性と協力者が必須である。

ロサンゼルス北西百キロのS社を訪れた駐在員が、類のない高透明導電性フィルムを見つけ、サンプルを送ってきた。関連会社の富士フィルムのマイクロフィルムを、明室現像で追記できる電子写真へ転換することをはじめ、電子材料への展開を図り、早速輸入販売を決定した。一九八一年S社に飛び、フェン博士と知己を得たことが私の電子材料開発の起爆剤になった。豊かに鬚を蓄

えた博士は、電子写真、液晶電極、静電防止、電磁遮蔽向けと、透明導電性フィルムの技術情報を披露してくれた。軍用機風防の電磁遮蔽フィルムを手掛ける彼は、電線を組み合わせた多点入力装置を使う演習用コンピュータに、フィルムタッチパネルを使用するアイデアを示唆した。

帰国し、試験蒸着機を購入した。タッチパネルは、二枚のフィルムの数個に分割した導電面を対向させ、絶縁スパーサーを介して貼り合わせ、指で押し接触点で入力する。わが国初の三×三で九点の透明メンブレンスイッチを研究所で完成し、日電、松下、三菱、東芝、ソニーなどに持ち込んだが、化学屋のスイッチ、使用例がないなどの理由で彼らは反響しなかった。

さらに八×八の商品に充実、タッチパネルと命名し、八二年エレクトロニクスショーの初舞台に立った。松下とソニーがこの試作品を組み込んだ商品を展示した。試作工場の完成とともに各社の開発部門が注目をはじめ、八三年四月から販売を開始した。

電卓、計測器に続いて、待望の大型商品が現金自動

入出金機ATMで実現した。業界の第一人者立石電機が二年間の慎重な性能テストを経て同年八月採用を決定した。スイッチメーカーの同社の金融機器への採用の決断は、信頼性が最大の関心であった未知の商品タッチパネルの発展にとって貴重な礎だった。社内の抵抗を押し切った立石電機の若い技術者の勇気の賜物である。

フランスのベンチャーM社のミティ社長は、八三年に提供したタッチパネルをキーボードに使う、手帳型サイズのパソコンを企画した。彼は年一回秋葉原で半導体、部品を調達自作し、十五人の若手プログラマにIBM互換のソフトを開発させていた。彼らが十台を二年間昼夜連続操作して故障がないから、パネルの信頼性に自信を持ってよいと励ましてくれた。八五年パリの古風な煉瓦建ての一室を訪ねた。ヒッピースタイルの十数人の若者が、ソファや長椅子で思い思いに仕事をしており、社長はコーヒを配っていた。「私は食事と飲み物をサービスするだけ」と水以外コーヒも酒も飲まない社長だった。同年再びフェン博士を訪ね、シリコンバレーの知人各社を案内してくれた。特にメンローパークのR社のプラ

スチックスに電磁線を照射し物性を変える研究設備と、五十台以上並ぶ全自動物性評価機の壮観さに圧倒された。同社は、ガレージでプラスチックの高電気絶縁化に成功、人工衛星の軽量化でソ連を逆転し大統領表彰を得ている。従業員尊重を旨とするクック社長に共感し、透明導電フィルム事業の夢を語った。ほかにプラスチック液晶のT社など数社と交流した。二年後R社は、我々がタッチパネルで技術提携していたE社や上記T社を傘下に収め、クック社長との協業は深まった。

八七年収益の上がらぬタッチパネル事業に、ダイセル化学は継続を断念した。会議後、社長は将来性を見通すために猶予を与え別会社に分社した。八九年、R社は透明性堅牢性に優れる、超音波パネルに関するZ社の休眠特許を取得した。その開発を目的に我々はR社と合併会社を設立、タッチパネル事業は開花した。

私の推進した事業の成功は、過半を中途採用した二十人の若い力と創造への意欲が生んだ。それとともに、フェン博士、クック社長をはじめ欧米の先達との友好なしには、ハイテク異業種への参入の今日はなかった。

先輩の功罪

大 平 忠

私は、会社生活のうち約三十年間、プラスチック原料の営業を担当した。

いくつかの新しいプラスチックについて、第一線、あるいは後方支援など業務の性格は異なっていたが、いずれも営業の仕事であった。幸運だったのは、どの場合も生産、販売の当初から担当したことであった。市場も調査し、販売すべき分野、顧客を探す。販売方法を練り、先兵部隊の一員として市場に出て顧客開拓を行う。ゼロからのスタートであるから試行錯誤の繰り返しが続く。見ず知らずの顧客に夜打ち朝駆け、まず話を聞いてもらうだけでも容易ではない。

しかし、俺がやらなきゃ誰がやるという意気込みもあり、仕事は面白い。新しい製品であるから、先輩も後輩もなくチームの一体感も大きい。初めて売り込みに成功した喜びはまた格別である。やがて一つ二つと顧客が増

えていくのが嬉しく、充実感があつた。

そのうち三、四年経つと少し落ち着いてくる。事業も進展し、増員で下に後輩が入ってきたりする。五、六年もすると、人事異動で初代担当者も転勤となり、後任の担当へ業務を引き継いでいく。

ところが、次の担当者に引き継いで暫くすると、決まつてある現象が起きるのに気がついた。これは、どこの部署でも二代目の担当者に共通していた。それは、新しい顧客開拓の力が激減するという現象である。よく見ると、従来の顧客のフォローはきちんとするが、新しい顧客をあまり追いかけていない。当然、既存の顧客の維持は大切である。ライバルとの競争も激烈だ。しかし、だからといって新規顧客を獲得しなくては発展が止まる。

調べていくといくつかの事実が浮かび上がってきた。

一、上司は、従来顧客への販売実績と状況を真つ先に問題にする傾向がある。特に、その上司が初代開拓者であった場合はなおさらで、フォローに抜かりがあると担当者は怒られる。

二、既存の顧客は目に見えるが、未開拓の顧客について

は手を抜いても目立たない。不作為の罪は概して咎められない。

三、仮に懸命の努力をしても、それを評価してくれる上司がいないと、従来の顧客に対する手薄なフォローについてのマイナス点がついて合計点でもマイナスとなる。

四、初代担当者からなにかにつけて、苦勞話、成功談を聞かされる。

以上の事実から、なるほど二代目担当者の立場は微妙で難かしいことが分かってきた。初代担当者が成果をあげていればいるほど、二代目は新しい仕事ができないという皮肉な現象が起こっていたのだ。

あるとき、営業の第一線から本社に転勤となり、初めて販売の統括業務の端くれになった。それでも、業務は異なっていたが同じ現象が見られた。長期の戦略、あるいは来期の予算作成業務のため、膨大な作業が行われていた。前年度やった作業項目は必ず踏襲し、それ以上完璧なものを作るのである。私は新参者であったが、隣りの仲間にもうささやいた。「戦略、予算ばかり作っていて、

これでは実行する時間がないではないか」

後年、それらの作成責任者となるときが訪れた。戦略作成の膨大な作業を大巾に軽減した。事業部の予算も時間をかけずに作成した。細部の不備には目をつぶったのである。予算検討会では、案の定、社長に叱られた。

二代目担当者の問題については、既存の部隊以外に新しく開拓専門の部署を設けた。しかし、仕事の境界線で、既存部隊との摩擦問題が頻発して、頭を抱えてしまった。正解は出ないままであった。

前例主義は、生まれたばかりの組織にもあつというまに芽生える。困ったことに、先輩たちが優れているほど、過去の成功が大きいほど、この病菌は繁殖する。目の前の現実を忘れて、前例があたかも現実となる。保守化、官僚化というもの、このへんが根つ子なのではあるまいか。政治の世界では、小泉さんは「自民党をぶっ壊す」と頑張った。経営の世界では、成功体験、過去の業績を破壊して進めというのがトヨタ自動車である。

しかし、悪しき先輩ならともかく、良き先輩を乗り越えて進むことは、組織の中では至難の業である。

多くの人に支えられ、大過なく

佐久間 直 正

四十数年前に丸の内のある船会社に入社しました。この年数のうち終わりの方は、余り記憶も鮮明ではなくなり、なんとなく過ぎてしまったような気がします。

しかし、初めの方は毎日が学生時代とは全く異なる出来事の連続で、多くの楽しい場面が蘇ります。何よりオフィスには、今と違って戦力には数えなくともよい、職場の花が咲き乱れておりました。

今思い返してみると、ほとんど何の自覚も取り柄もない若い連中が、そのとき流行の「スーダラ節」を歌いながら会社にくるのですから上の人たちは本当に気がもめた事と思います。

従って私の場合も、単なる常套句ではなく、正しく『多くの人に支えられ、やっとこ一つの会社でサラリーマン

生活を全うすることが出来ました』

本当に大勢の人に助けていただきました。

入社して都心の独身寮に入りました。生憎配属されたのは横浜支店で、丸の内の本店の連中より一時間も早く寮を出るのですが、朝が起きられません。

管理人に頼んで一番出入り口に近い部屋に入れてもらいました。早速部屋のドアに大きく張り紙をして、先ず自己紹介をした後に、『私は朝中々起きられません。通りがかりの方で、気が付かれたらどこでも叩いて起こして下さい』とお願いました。お陰で遅刻はほとんどありませんでした。これは寮生の皆さん全員に感謝しなくてはなりません。（勿論ドアは開け放し）

仕事上のちょんぼも結構あり、社外の方たちにも助けられました。

入社二年目に本社に来てしばらくは世界各方面に向かう定期船の運航に携わりました。

日本から豪州各港に行く船を担当しているときに二百

トン近い重さの発電機をシドニー向けに積みました。この重量物が揚げ荷の際海中に落ちてしまいました。これは大事件で社内でも一寸した騒ぎになりました。

しかし、入社間もない佐久間書記は少しも騒がず、「大丈夫、ロイズに十分なる保険が付けてある」と落付いたものでした。しかし私のロイズに宛てた電報を調べてみると、ゼロが一つ足りません。荷主から十億円のヴァリューと聞いたので、百万ポンドで付保したつもりでしたが、十万ポンドと相手に伝えていました。その時代にこんなちよんぼで九億円も損させては、とても会社に住られません。

辞表を書いて折角慣れた海運界ともおさらばかと思いましたが、上司がロイズに事情を伝え、相手も分かってくれました。今でも損保業界全体に対し感謝しています。(この頃いろいろ不祥事が伝えられてはおりますが)

とにかく入社の際はどうしてもトラブルが多くなります。

後輩を勇気付けるためにこの話を何回かしたのです

が、そのたびに自分で可笑しくなります。

それは横浜支店で三月ほど過ぎたとき、突然上司に「君、四月以降に出帆した船の、仕向け地別積み高を書いたテレックスを持ってきてくれ」といわれた時は、驚きました。毎月七隻の私の担当する船が横浜を出帆しますが、本社にテレックスした後は、そのコピーは用済みなので毎回捨てていました。要するに後で考えと誰もファイリングという事を私に教えてくれませんでした。しかしこの頃は記憶力抜群でこれらの数字を諳んじている限り回答したのですが、テレックスそのものがなくては駄目と言われて、困ってしまいました。

一年と少ししか居なかった横浜では、岸壁で沖仲仕のサイコロ博打を見ていて、一緒に曽根崎署に持って行かれ、支店長に身柄を引き取ってもらった事もありました。

まだまだ書ききれない国内外の数え切れない人たちに支えられて、大過なく定年を迎えました。

始末書

上 原 利 夫

会社の仕事で何か拙い事を仕出かすと、始末書を書かされる。どういう事態のときに書くのか基準があると思うが、わたしは知らない。わたしが書かされたときは、なぜ書かなくてはならないのか、納得がいかなかった。

ところが、その後知ったことだが、自主的に始末書を書く人がいたのだ。この人は、自分ほど多くの始末書を書いた人は他にいないだろう、と言った。この人は偉くなっていたので、始末書を書く方が出世するのかもしれない。失敗をおそれずに、ばりばり仕事をし、失敗すれば始末書を書けばよいのだ。ただし、法律違反は駄目。たとえ会社のためであっても、社会的に許されないからである。だから、法律に抵触しそうな仕事を進めるときは、注意を要する。しくじったからと言って、始末書を書けないのである。始末書を書けば懲罰委員会でも公正に処置されるが、書かないときは担当部限りの評価となる。これ

は本人の人事考課にとってプラスになるか、マイナスになるか分らない。担当部内には、やり手を厳しく採点し、日頃の鬱憤を晴らす上司もいる。

このように、始末書は違法行為を前提としない内部統制の制度である。上司の承諾を得るなど、然るべき判断に基づいて仕事をしなさい、というのが始末書の狙いである。その方法はホウレンソウ（報告、連絡、相談）を励行することだ。しかし、変化や進歩の速い時代には即決も必要で、ホウレンソウが間に合わない。果たして、スピードの時代に対応できる方法を創れるだろうか。

新しい会社法は、内部統制システムの構築の決定を取締役に義務づけた。仕事をルーティン化してコンピュータ・システムに組み込み、エラーの起こるリスクを減らす。しかし、人の介在するポイントが残るので、不正や誤りが起こり得る。

内部統制システムの限界は、複数の担当者が共謀したとき、環境が変化したとき、取引が非定型のとき、経費削減をしすぎたとき、経営者が意図的に不正をしたとき等である。怖いのは不正である。実態を一番知ることが

できるのは内部の者である。したがって、内部告発をしやすくすることである。

近頃は、会社のみならず、多くの組織で不祥事が発覚している。倫理の欠如を嘆く人は多いが、組織ぐるみも珍しくなかった高度経済成長時代の「つけ」である。組織ぐるみの場合、始末書に至らなかった。

バブルのあとの「失われた十年」に世相は変わった。欧米流の価値観が浸透してきたのである。これを素早く察知した経営者は過去のやり方に決別した。しかし、先見力のない経営者は気付きが遅い。

新しい会社法が施行されたことから、内部統制システムの構築に多くの上場会社が着手した。始末書だけに頼ってきた会社かもしれない。会社の経営者を変えるには買収は有効だが、買収者が見向きもしない危ない会社もある。自社の弱点に気付かず、買収防衛策に拘っている経営者は、公私を混同している。

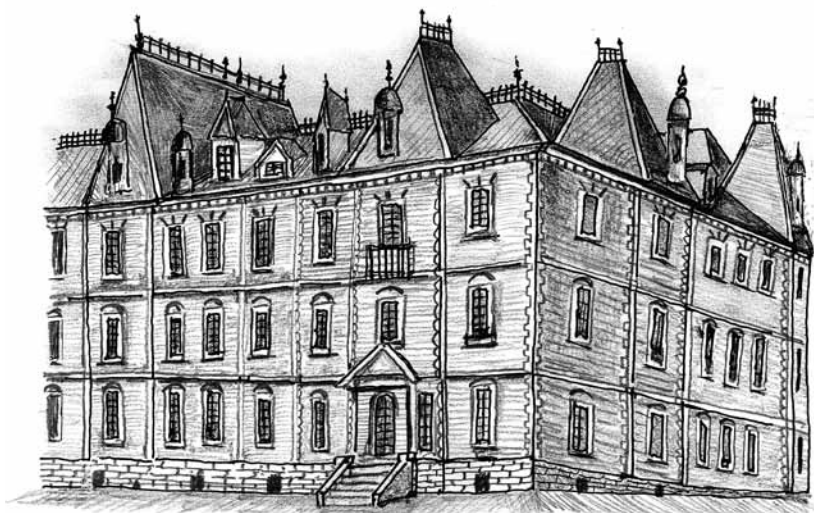
証券取引法に代り金融商品取引法が新しく成立した。この新法に定める財務報告に関わる内部統制は厳しい。上場会社の経営者は「内部統制報告書」を毎期作成し、

公認会計士の監査を受けなければならないのだが、取締役会の承認を得ていないなど社内手続きが不備な場合、連結税引前利益の5%以上の影響を与える重要取引は、会社に公表を義務づける。粉飾決算の防止が狙いである。

公表せずに社内限りの制裁で済まし得る未承認取引には、始末書の存在は有効である。過去の始末書は、成長過程にある会社の役職員が、未開拓の仕事を手探りで進めるときに起こした不始末を会社に報告し、その行為を詫げるシステムであった。会社への制裁はなく、会社に成長のチャンスを与えた。社長が発破をかけておけば、役職員は臨機応変に働き、会社の発展に寄与した。

今後は内部統制システムを構築し、その履行状況を公表することになると、全役職員が企業理念を共有し、誤りや不正をなくさなければならない。片や、規模の小さい成長過程の新興企業は、内部統制システムの限界を超える取引が発生することが多いので、依然として始末書の役割は大きいであろう。

特集・昭和を生きて



旧三菱一号館 山縣 正靖

川の流れるように

野瀬 隆平

ドナウを下る客船のデッキにたたずみ、移りゆく景色をぼんやりと眺めながら、川の流れるように過ぎ去っていった遠い昔の事をとりとめもなく思い出していた。

* * * *

北京の大通りを人力車が七台、街路樹に沿って一列に走っていた。子供までも一人で、ちょこんと一台に乗っている。一家七人そろって王府井にある中華料理店に夕食を食べに行くのである。父親の仕事の関係で北京に住んでいた小学一年生のころの想い出である。中華料理特有の匂いをする部屋の大きな円テーブルを囲んで腰掛ける。かぼちゃの種を歯でつぶし、中の実をかじりながら料理を待っていたのと、最後に芋を揚げて飴をからめた甘いデザートが出てきたのを憶えている。

日本から来たお客さんを案内して、家族みんなで家の近くにある紫禁城に歩いて行ったこともしばしばあった。

た。広大な城内を歩き廻り、くたびれて家にたどりつく。我が家は紫禁城と北海公園の中ほど、大通りから胡同と呼ばれる狭い路地を入った所にあつた。同じ会社の人たち何家族かが、一つの庭を囲んで建てられた数棟に分かれて住んでいた。

穏やかであつたこの様な生活も、あの日を境に大きく変わった。お昼に大事な放送があると言うので、社宅に住む人たちがラジオを囲んで聴き耳を立てていた。子供の私にはチンプンカンプンであつたが、大人たちが、「どうも日本が戦争に負けたようだ。外地にいる我々はこれからどうなるのだろうか」と、心配そうに話す。数日後、親しくしていた中国の人が訪ねてきて、「〇〇公司ノ前マデ来ルト日本ノ兵隊サンガ、ヤラレテイタヨ」と、それまで威張っていた兵隊が町の人たちに取り囲まれ、殴られていた様子を、興奮しながら話してくれた。できるだけ外出を控えていた我々は、その話で町の様子を窺い知ることができた。

日本に引き揚げることとなった。勿論、家財道具を日本に送ることなど許されるはずも無い。手に持てるだけ

の荷物を携えて帰るのである。出来るだけたくさん、価値のあるものを持ち帰ろうと誰しも考える。家財道具を売って、宝石、金の延べ棒に変えて持ち帰る考えもあったようだ。しかし、日本人社会の中で、こんな噂がまことしやかに囁かれていた。「途中で荷物検査があり、万一そのような貴金属が発見されたら、没収されるだけでは済まず、そのグループ全員が抑留され日本に帰れなくなる」というものである。

北京からは貨物列車に乗せられた。無蓋車である。勿論、トイレなどついていない。隅のほうにブリキの缶を置き、そこを毛布で囲ったのが急ごしらえの便所である。ゴトゴトと単調な音を響かせながら走る貨物列車の中で不安なときを過ごした。途中、汽車から降りて、大きなテントの中で夜を過ごしたこともある。

やつとのもので天津の近くにある港に着き、アメリカの貨物船に乗せられた。こうして、数年間過ごした中国から離れた。日本に近づき、祖国の山並みが見え始めたとき、皆が安堵の声をあげた。着いた港は佐世保である。波止場に張られた大きなテントに入れられ、配られ

た真っ白なおにぎりを夢中で頬ばったことを思い出す。

とりあえず、滋賀県にある母の実家で暮らすことになった。小さな村で、家の回りは田んぼに囲まれている。夕方になると蛙が一斉に鳴きだし、うるさい程である。村での生活は決して文化的とはいえなかった。電灯はついてはいたが、水道は無い。井戸水を汲んで、台所の甕にためておいて炊事に使う。食器洗いや洗濯は、屋敷内の隅に小川の流れを引き込んで作られた水屋でする。食事の後、その水屋で食器洗いをして家事を手伝った記憶がある。風呂は五右衛門風呂だ。火吹竹で火を熾し、薪をくべ火力を調節する。不便な生活ではあったけれど、思い返してみると懐かしさがこみ上げてくる。井戸にスイカをつるして冷やしたこと。裏の田んぼで蛭狩りをしたこと。夜トイレに行くのに、母屋から少し離れた厠まで、星空の下とほとほと歩いていったことなど。

* * * *

アムステルダムからこの船に乗ってもう幾日たつであろうか。船は悠久の大河に身を任せるようにゆつたりと進む。船旅の終着地、ウィーンはもう近い。

昭和二十年前後

山下 春夫

(一)

私は昭和十三年に東京・蒲田で生まれ、そこで育った。私のあとに二年おきに弟妹が生まれた。一家五人は父の勤務する会社の構内にある社宅に住んでいた。戦時下ではあるが幸せな家庭だった。だが、十九年五月に暗転する。父の出征である。召集令状を母と私が父より先に見た。私は父の職場へ駆けていった。

父は通路に面した窓側の席だったので、私の合図でガラス窓を開けた。私は「おとうちゃん、赤紙が来たよ」と伝えた。

出征の別れの場所は品川駅のＪＲと京浜急行の連絡通路上だった。坊主頭になった父が「泣きなさんな」と母に言った。後年、四才下の妹が、母から聞いた話として語ったことによると、このとき私は柱の陰で泣きそうな表情で父を見つめていたという。父は三九才でビルマへ向かった。

十九年も後半になると、空襲の脅威が強まった。蒲田はまだやられなかったが、夜間、都心の方向が焼夷弾で明るくなることが何度もあった。警戒警報が鳴ると、母子四人で暗闇の中を近くの防空壕に避難した。年が明けて二十年一月、わが家は母の生家へ疎開することとした。

(二)

群馬県渋川の町から吾妻川に沿って西へ二十キロ、吾妻郡太田村（現、吾妻町）に農家である母の生家がある。この家は当時祖母一人が守っていた。祖父は私が生まれる前に亡くなっていた。祖母にはいずれも嫁いでいる娘五人と末子で独身の息子がいる。この叔父は出征したが病のため台湾で入院中である。

祖母は時々、足踏みでうどんを打ってくれた。いろいろを囲み鉄鍋で煮る。これはうまかった。冬、家から北方三十キロのところに谷川岳の白い頂を望むことができる。春が来ると母の好きな連翹の黄色い花が庭に咲く。

四月、私は村の国民学校に入学した。学校にはすぐに馴染んだ。そして農作業が始まる。麦畑が芽を出し、祖母の指導で私は麦を踏んだ。麦の次は養蚕で、これが始

まると家中が養蚕工場と化す。蚕は四六時中、桑の葉を食む。夜中暗闇の中で、この音が絶えない。私は桑の採取を手伝い、葉を取り去った枝で近所の子たちとチャンバラ遊びに興じた。

六月に叔父が復員した。戦争の終結が近づく。八月九日のソ連参戦の報に接して、叔父は「日本はもうだめだ」と母に言った。広島、長崎の原爆をいつ認識したかは定かではない。そして八月十五日。蒲田から持ってきたラジオの前に近所の人も含めて集まった。玉音放送を聴き、大人たちの説明も聞いて、戦争が終ったことを知った。夜、蚊帳の中で母が「戦争に負けて、おとうちゃん泣いているでしょうね」と言った。

十二月になって、私の身に一大変化が起こった。私一人だけ、神奈川県藤沢の父の生家へ移ることになったのだ。母子四人が生き延びてゆくには食い扶持を減らさざるをえない。二親の両方の実家が応分の負担をするという考えもあったろう。母と私は超満員の上越線の列車に乗り藤沢へ向かった。

(三)

父の生家も農家である。慶応生まれの祖父を筆頭に三代の夫婦と四代目の幼女三人、合計九人の大家族である。こういう家に三代目の私は預けられた。一泊して群馬へ戻る母を、私は家の近くの県道まで送って行つた。別れの際に母は私の手にながしかの小遣いを握らせた。

私は藤沢市立明治小学校に転校した。私は元気に活発に振舞つた。二十一年三月の学芸会では舌切り雀で主役のお爺さんを演じている。下校すると、部落の子たちと暗くなるまで遊んだ。群馬のときは違って、働らき盛りの夫婦がいるのだから、農作業の手が足りないということはない。常時四、五人の仲間と野山を駆け、木登りをし、グミや蜂の子を口にし、山芋を掘つた。夏場の活動舞台は川となる。泳ぎを覚えたり、流れをせき止めて鮒や鰻や鯰を獲つた。

二十一年の秋の夕方、遊びに出ている私を家の者が探しに来た。父が還ってきたという。私は跳んで帰つた。二年半ぶりの再会だった。父は母と弟妹を呼び寄せ、物置を改造して仮住居とした。ここには一年いて、二十二年十一月わが家は二年十ヶ月ぶりに蒲田に戻つた。

昭和历史の通奏低音

西川 武彦

十月に入ると一箱の栗が長瀨から宅配された。疎開先だった農家から贈られる秋の味覚だ。六十年前にあった栗の樹は今も健在という。株分けした分身かもしれない。茹で上った大きな栗を二つに割って掬っていると、思い出が走馬灯のように流れる。庭で作ったさつま芋、芋蔓、

キュウリ、茄子、トマト、卵、果物がわりの桑の実、手で編んだ草履、疎開つ子へのいじめ、可愛がつてくれた女性の先生、杉の枝を削ってバットを作り、布切れを丸めたボールで遊んだ草野球、小川での釣り、沢蟹、山並みの彼方の空を染めた東京大空襲の夜……。八月十五日は蚕部屋を改装した仮住まいで迎えた。物心がついた八歳の頃だから、私の昭和史はそこから始まったといえよう。

焼け残った東京の家に戻ると、路地裏にある一千坪の豪邸に進駐軍の将校が移り住んできた。ジョエーナ、スエーナと呼んでいた同じ年頃の姉妹がいてよく行き来し

た。軍令なのだろう、たまには池のある庭に近所の日本人を招いてガーデンパーティを開く。貧乏の極みにあつたから、チョコレート、ガム、鉛筆、便箋などのお宝を兄妹で取り合つた。

二階の寝室からは、鬱蒼とした庭木の合間から、先方の洋館が望め、夜には着飾つた夫妻が米人仲間と談笑するのをうっとりと思惚れる。豊かな世界へ、そして未知の外国への強烈な想いが植え付けられた。私の昭和史の通奏低音である。

小学生の高学年には、カムカムエブリボデイを暗誦した。中学では流行のペンバルが三人できた。アメリカ・ロードアイランドの女の子と、ドイツ・ハンブルグとハンプルグの男の子である。船便で贈られた異国の写真集は今でも書棚に飾つてある。高校時代には生きた英語を身につけるため、同じ志向の仲間とワシントンハイツのリッチー博士一家を定期的に訪れる。同家の三姉妹を交えてのティパーティ。日曜学校でバイブルを勉強し、礼拝で讃美歌を歌う。大学は国際化を軸に新しい理念で開校したICUを選んだ。留学生を交えた英語の授業が多

い。国際派路線まっしぐらである。

就職先も同じ路線の延長で国策会社JALに決まった。英語が出来るという理由で、羽田空港の国際線カウンターに配属される。英語で接客する、タイプを打つ。飛行機の下アを閉めてタラップを降り、世界各地に飛び立った機影が消えるまで見送るのは壮快だった。

ジェット機の登場で国際線が本格的に拡張され始めた頃、国際営業企画部門に配属になった。バックツアー、旅の割賦販売、総代理店指定、他社との乗り継ぎ契約など相次ぐ新プロジェクトの開発に関わる。次いで配属されたのが国際線乗り入れ業務部門である。一九七〇年代にジャンボが現れて、高度成長を背景に大量輸送時代に突入した。路線開設、便数設定、共同運航等々で各国当局や競争会社との交渉に加わり、喜怒哀楽を重ねる。

一九八〇年代の終わりに二極体制が終焉し、バブル崩壊に突入する中で昭和が平成に替わる。数え切れない海外出張と二度の海外勤務を積み、私の昭和史は豊かさとも未知の外国への想いが通奏低音になって、国際派路線を突っ走った半生といえよう。

退職し、世界水準で見れば豊かになった今でも通奏低音は残り、ネット、TV、あるいは横文字の読み物で海外情報を漁らないと落ち着かない。帰国子女紛いで育った子供三人のうち二人は内外を棲み分ける仕事を楽んでいるし、孫たちも外国生れである。

かくして昭和を国際派として生きた私だが、語学力は未だに発展途上である。昨夏、孫たちと過ごすため英国でロングステイ中、なぜかひどい便秘に襲われた。

投薬、通院など治療に励んだ挙句、今度は軟便が止まらない。こんな時に的確な英語がなかなか出てこないのがある。飛び込んだファーマシーでは便秘という単語が分からない。どうしたか？ポデイルンゲージでお腹を押さえ、次に右手で尻を指差し、*"I have had irregularity, not diarrhea, the other way around."*と悲しげに訴えた。この程度なのだが、各地で鍛えたコミュニケーション能力で用が足りればよしと達観している。

横文字が乱発し始めました。晋三節に似てきたようです。戦前生まれの私の昭和史はこの辺でペンをおくことにいたします。

塗りつぶされた教科書

―国民学校から「新制」中学へ―

大月 和彦

昭和十七年四月に信州の国民学校に入学した。二十二年四月に国民学校は小学校になる。翌年三月、小学校を卒業し、同年四月に「新制」中学に入学する。短命だった国民学校と発足直後の新制中学を経験したことは歴史のめぐり合わせだと思う。

開戦四ヵ月後の国民学校の入学式は、かすかな記憶をたどると、付き添った父母は晴れ着を着飾っていたし、担任の女性教師も羽織袴で新一年生を迎えてくれるなど戦時色はほとんどなかった。

手にした教科書はインクの匂いをするカラー刷りの見映えがする本だった。国語（ヨミカタ）の教科書は「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」で始まり、数人の子どもが丘の上で朝日に向かって万歳をしている新人生にふさわしい絵が添えられていた。

二年生頃までは、出征兵士の見送りや戦死者の村葬などがたまにあったが全体としてはのんびりしていたように思う。三年生になると戦争の影が浸透してきて、生活用品、学用品、食料などの不足が身近になる。運動靴の購入がくじ引きになったり、校庭にイモやカボチャを植えたり、繊維をとるために山野に自生するアカソという草を刈り集めたり、作業が急に増えてきた。三年生になって加入した少年団は、道路清掃、神社の参拝と清掃、出征農家への手伝い、防空訓練など戦争遂行の体制に組み込まれていて、上級生の暴力やいじめもあり、この団体生活は息苦しかった。

終戦は国民学校四年生のとき。夏休み中の暑い午後、五年生以上が学校に集められて放送を聴いたようだが、家でラジオ放送を聴いた記憶は無い。外で遊んでいると学校から帰る上級生に「戦争に負けたんだぞ」と言われ、半信半疑だった。中学生だった兄から、まだ連合艦隊が無傷だし、戦闘機も何百機かが温存しており、近く反撃するはずだなど聞かされ、信じていた。

戦後の混乱や改革の方が、戦争の影響としては大きく

のしかかったように思う。

秋ごろだったか、学校にあった銃剣道の用具、薙刀、ラッパなどが廃棄され、校舎をビカビカにして進駐軍の訪問を待ったが、とうとう姿を現さず、ジープなるものを見る機会がなかった。

同じ頃、使っていた教科書を墨で塗りつぶすことになった。教師の指示する箇所を理由がよくわからないまま面白がって塗りつぶした。墨で消され、残りが少なくなった教科書を見てさびしいとは思ったが、この「焚書」作業を異常な体験として深刻には受け止めてはいなかった。価値観がひっくり返った瞬間だったが、その意味を理解したのはずと後のこと。翌年春からは、暫定教科書が配られた。表裏両面に印刷された一枚の大きな紙を自分で切断して本の体裁にした。敗戦が実感される教科書だった。新設されたばかりの教科「社会科」は新鮮に感じた。郷土の歴史や産業の勉強と称して社会見学や自由研究など好き勝手なことをしていたように思う。

入学した新制中学は、小学校を間借りし、体育館を仕切った教室を使っていた。教師は復員軍人や休学中の大

学生など多彩で、教員室は梁山泊のようだった。宿直室でドブロクを飲ませてもらったこともある。おんぼろ校舎だったが、教師は熱っぽく語っていた。

経済、社会が混乱する中で、農地改革、女性参政権など改革が進められた。疲弊と混乱の中で、中学校を全国一斉に作るという学制改革は、占領軍の指示があつたとはいえ、人材立国に賭けた国民の熱意と合意があつて始めて実現できたものだった。労働運動も激しくなり、二一ストは村の学校をも巻きこんだ。教師は家庭を訪問してストライキの理解を求めた。村の雰囲気は教師に好意的だったと思う。

破壊と混乱の中で、新しい時代の息吹を感じ取ったこの時期が、私にとって「昭和」の核心だった気がする。憲法発布の時に、戦争放棄、文化国家への転換など明るい未来を謳歌した作文を書いたことがあり、この時期の心情が今も確実に残っている。

戦後生まれの指導者が、憲法や教育基本法が押し付けられたものとして見直しを主張しているが、この時期について冷静な歴史的評価が必要だと思う。

昭和を生きて

中村 將^{まさ}陸^{みち}

中村草田男の句に「降る雪や明治は遠くなりけり」があります。平成の御代に代わってから、はや十八年の歳月が過ぎようとしています。正直言つて「昭和は遠くなりけり」という感慨はまだありませんが、昭和が遠くなりつつあるという想いが強くなったことは否めません。一口に昭和といつても、その御代は六十三年間の長きにわたつて続きました。大きく分けると、戦前期、戦中期、戦後期の昭和ということになります。人によって、人生の多感な時期、活躍した時期を、昭和の何処で過ごしたかによって、受け止め方は多様であるはずですが。

私の場合は、二・二六事件の年に生まれ、終戦のときはまだ、十歳でした。幸運なことに、多感な青年期を日本の高度成長期と共に歩んだ世代であったと自覚しています。したがってこの稿では、戦後期の昭和について話を進めたいと思います。

戦争で壊滅的な破壊をこうむった日本は、全くの廃墟の中から世界が驚嘆するほど急速に立ち上がりました。これには幸いにも、三つの要因が、プラスに作用したからだと考えています。第一は、戦争に敗れたことで、社会全体が極端な物資の不足に陥っていました。ただし、単にこの需要を埋めるだけでしたら、戦後の日本の躍進は低いレベルで止まっていたことでしょう。第二は、江戸時代以降、営々と積み重ねてきた国民の高い教育水準が幸いし、世界規模で進行していた技術革新の成果を取り込むことが出来たことです。さらに第三の要因は、経済を国家目標の中心に据えた池田内閣が、所得倍増論を引っ提げて登場したことでしょう。

わが国経済は、一九五〇年の朝鮮特需による一時的好況に沸いたことがありました。しかし、それだけでしたら成長も短期的に終焉していたはずですが。なんといつても、持続的な日本の躍進の原動力は、これら三つの要因の相乗効果によるものだと思います。

その結果、一九五〇年代後半には白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫が三種の神器として市場に現れ、さらに、

一九六〇年代半ばには、カラーテレビ、クーラー、カーが3Cとして華々しく登場しました。それまで、米国映画の夢の世界と諦めていた憧れの生活を、国民が手にし始めることが出来ました。

生活に密着した分野だけでなく、有人宇宙飛行、原子力発電、新幹線、ジャンボ・ジェット機、スーパー・コンピュータなど、それまでは存在していなかった新しい製品および技術が毎日続々と出現し、まさにサブライズの連続でした。

この戦後期の昭和に青年期を過ごすことの出来た幸せを、つくづくと感じています。戦場に送られることもなく、平和な生活を営む恩恵を素直に喜んでいました。さらに、感受性豊かな若者にとって、この時代は刺激的でした。振り返ってみますと、はち切れんばかりの生の喜び、生きていることの充実感を感じながら、日々無我夢中で仕事に没頭して生きていたような気がします。

それに引き換えバブル以降の日本は、繁栄の灯が消えたように暗い感じがします。現代は、若者から夢を奪い

去りました。マスコミは、現代の若者を、ネクラ、引きこもり、パラサイト、ニートなどと、不謹慎な形容詞を付けて呼んでおります。

一方昨今のビジネス界では、企業収益を増大させる経営が重視され、賃金の高い正社員の採用を極力控え、非正規社員の採用に積極的に切り替えています。こうして売上高の伸びは停滞しているにもかかわらず、企業は着実に収益を増加させています。この結果、従業員の労働分配率が低下傾向をたどる一方で、会社上層部の分配率は着実に向上しております。これは大きな矛盾です。

何時の時代も、正業に就くことを望まない若者がいるのは確かです。これを就業の多様化などという言葉で糊塗してはなりません。現代は正業に就くことを望んでいない若者ですら、やむを得ず非正規社員にならざるを得ないのが実情です。若者から夢を奪うような社会は短期的には繁栄するかもしれませんが、長い視点から見たとき必ず衰亡に向かいます。夢を与えられて昭和を生きた世代として、今の日本を若者が夢を持てるような社会に改めるよう努力することが責務であると考えています。

私の昭和史「今は天国」

大泉 潤

昭和十一年に生を享けて、今年古稀を迎えた。この七十年日本は大きな変貌を遂げた。人口は七千万人から一億二千七百万人・八倍へと毎年〇・八五パーセントの伸びを示した。国民所得は一九九五年換算で三兆四兆円から五四三兆円へと十六倍へ毎年五・二パーセントの伸びであった。国民一人当たりは五十万円から四百二十万円へ八・四倍へと毎年三・パーセントの伸びを示した。途中に大戦争を挟んだ国としては規模が大きく、伸び率は一本調子で驚異的であり、世界第二の経済大国となり、国民は豊かな生活を享受している。七十年の歴史を顧みて、三つの観点で綴ってみる。

一つは大量高速化である。地上の移動は時速四キロメートルの徒歩から、百キロの自動車、二百キロの鉄道、空には時速千キロの飛行機が飛ぶ時代になった。昔は軍人か富豪に限られていた地球の裏側まで日本人は気軽

に出かけてゆく。成田へ送迎に出ると春夏秋冬、朝から晩まで旅行客で溢れている。世界の名所旧跡が身近になり、毎日の話題も国際的になっている。年金生活者もオフシーズンに限らずどこへでも出かけられる。本当に地球は小さくなった。

二つめはIT化の急速な進展である。パソコンについている事務ソフトで文章の作成、複雑な計算が短時間に出来る。商業書道家を父に持つ小生は、突然変異の遺伝のせいか、稀代の悪筆で手書きの書類作成には筆舌に尽くせぬ苦勞をした。今やキーを操れば思いのままの書体で高速の書類作成が可能である。もう少し早く発明されていれば私にとって大きな福音であつたであろう。加えて複雑な計算が縦横斜め自由に出来る。特に冪乗、冪乗根の計算は年率の計算に欠かせない。また相当複雑な文章、書類、写真が世界中に瞬時に複数の相手に伝わるのは神秘としか表現できない。空中の電線を光ファイバーで繋ぎ、地球上のあらゆる場所と膨大な情報をやり取りする。場合によっては携帯電話でコンテンツを交信する先達もいて畏敬の念も増すばかりである。

昭和が終わり一時代を画した感があるが、今の日本がこのまま続いて欲しいと念願している。日本人は真面目で勤勉、加えて進取の気性に溢れ積極的である。礼儀正しく清潔である。通勤の満員電車、事故の時の落ち着いた対応を見ても本当の意味の先進国である。自然も美しい。山、野、川、湖、森林、海は四季折々美しい変化を見せる。街も毎年整備され安全で楽しい散歩が楽しめる。こんな国を誇りに思い永続して欲しいと願う。

三つめは、抑圧、制限から自由、豊富の時代へ変わったことである。

人生、社会生活で衣食住の不自由は人間の尊厳を抑圧する。夏はともかく、冬の寒い時に寒風から身を守るものがない、子供はいつも鼻たらし、周りはいくしゃみの連発、着たきり雀で襟や袖は黒光り。食べ物の不自由は人間を動物的にする。花びらをちぎって食べ、柔らかそうな路傍の草の葉を口にすることもあった。悲しかったのは、人里離れた山の麓を母と開墾し、西瓜を育て、さあ明日収穫と思って出かけたら奪われていた時である。その時の居たたまれない、どこにもぶつけようもない悔し

さは忘れることが出来ない。兼好法師が家は夏快適に住めるようにすべきで冬はどんなところでも良いと述べているが、暖房のない隙間風の家でよく生き延びたと思う。六十年を経て今や、着る物は家中収納場所に困るほど有り余る。衣替えの時には忘れていたファッションが突然出てくる。食べ物四季折々、世界中の産品が軒を競ってショーケースに陳列されている。住まいも年収の五倍程度、すなわち年収の二ないし三割程度を二十年くらいの負担でエアコンディションの効いた、明日の再生産に備えるものが手に入る。月並みな表現であるが、本当に我々の世代は隔世の感を味わっている。今後はどうなるか。我々の目の黒いうちは大勢に影響がない。年金収入も程ほどにあり、物価の上昇も貯金の金利を上回ることはない。世界における日本の地位も安泰であるし、局地を除けば安全な旅行も安く行ける。同じ動機の好奇心に満ち、行動的で、発信力に溢れた仲間と有意義な時間を共有する、最も幸せな世代となった。今は天国である。

昭和に生きて―半世紀生きた男の反省記

関谷 裕彦

昭和の由来は中国の堯舜時代から秦の、或る時代までの史書、書経の言葉「百姓昭明にして萬邦を協和す」から取られた。

昭和の日本はもつとこのような意味の共栄圏的思考をつらぬけばよかったが、あまりに資源、領土への野心が見え見えで、最近の中国の描く「アジア大家族構想」ほどうまくたちまわなかったのは残念であった。

昭和十年代、世界の風雲まさに急をつけ、わが国は、マーチとユニフォームにたぶらかされて、何の義理もなかった連中と手を結び、出来合いの三国同盟にたよって、日露戦争で世話になったイギリス、アメリカと手を切って世界の大勢から孤立して行つた。これはまずかった。日本人は情報に弱いというより、思い込みが意外に激しく、他のニュースソースを無視する傾向がある。枢軸派にこり固まり、本気で和平を模索しなかったのは残念で

ある。

昭和昭和の子供よ僕たちは

姿もきりり 心もきりり

山 山 山なら富士の山

行こうよ 行こう

足並揃え タララッタ タララ

タララッタラ

私達がこの歌を歌わされ、入った尋常小学校は、翌年の昭和十六年、国民学校に名称変更された。大体国民学校という名前が嫌だった。国民服というカーキ色の服の印象が悪かったせいかもしれない。特に、我が家にとつては不満であった。

父はついに死ぬまで日本から出たことがなかったが、世界のことは今考えても驚くくらい良く知っていた。どちらかと言えば親英米派であったが、ドイツ、イタリアにもそこそこくわしく、戦前銀座に店のあった第一次大戦の捕虜、オットー・ローマイヤの数少ないファンだった。おかげで本格的なハム、ソーセージにはすっかりお馴染みになった。

父は勉強しろとは言わなかったが、本は嫌というほど読ませてくれた。野球、アメリカ映画、歌舞伎にはよく連れて行ってもらった。

俗に、「天に口無し人をもって言わしむる」と言う。「なんだ、あの歌は？」父が憤慨したのは、昭和十五年、皇紀二千六百年に出来た大政翼賛の歌だった。「両手を高くさしあげて、なんて全面降伏みたいじゃないか？」五年後に実際そうになってしまったのだが。

太平洋戦争開戦の通告が遅れるトラブルは置いておいて、折角航空作戦で劈頭勝利をおさめたのが、翌年四月十八日、本土空襲の奇策に足を掬われ、あせって計画したミッドウェイ作戦で惨敗、敗戦への道を辿った。

敗戦、途端に襲いかかった食料危機、カボチャの花、甘藷の茎、野草、雑草なんでも口に入れた。闇市もさまよい、粗悪な紙の教科書で学んだ。

敗戦後、日本は戦前の理想も哲学もかなぐり捨てた。正に君子豹変だ。

戦中世代の最後を承った我々は結構がんばった。

平成もすでに十八年が終わろうとしている。いろいろあっても、昭和はまだまともだった。平成になって年ごとに世相はおかしくなっていく。人々の心はすさみ、親殺し、子殺し、いじめ。国籍不明な珍獣―知識人、専門家、芸能人、TVタレント、マスコミ人種。なんとなく連中の黒幕は北方か宗教団体くさい。

しかし、現代はつまらない世の中だ。ひたすら無駄を省いて受験受験。単位のとれそうな講座を選び、卒業し会社へ入っても一日パソコン相手、社員同志の付き合いはほとんどしない。礼儀知らずのオバタリアンを上まわる沈黙の戦艦オジタリアンの氾濫である。その上「英語をやる前に自国語を」などと学者先生や担当大臣閣下がおっしゃるようでは世も末である。自分の国の言葉じゃないですか。そんなのは親が仕込むことですよ。

世の中がだめならば、残りの人生を何にかける？

失われたモラル、マナーの再確立、国際語英語の育成、エイズ、これは撲滅ではなく防衛というべきだ。これが人生の大半を昭和という世代で過ごした一人のダメ男の反省と冴えない決意の呟きである。

昭和に生きる―実人生の時代

森田 茂

第二次大戦中の中学時代の軍事教育や終戦時の自失呆然が、まだ脳裏から消えていない。昭和シングル年代生まれの人も同じような想いを抱えていることだろう。

戦後数年間の食糧難のときに青年期を迎えたが、上京中の学生時代は生きる決意と緊張の日々であった。

昭和三十年、石油会社就職してから、当初は生活に余裕のない乏しい歳月を送っていたが、経済の活性化が見え出した当時の日本には、それなりの明るい展望が生まれていた。そのために、生活の原点である衣食住は、充分とは言えないながらも整いつつあり、仕事や私生活にも幸福を感じるようになってきた。

次第に、都市化と地方の過疎化が進行する社会になっていくが、地方の経済や文化も存在感を失っていない中で、国内数ヶ所の転勤、海外出張や駐在など、自分なり

の多様な経験を重ねてきた。最近のような単身赴任ではなく、つねに家族同伴の暮らしであった。

四十年近い会社人間を止めたのは平成に入ってからであるから、私の昭和は現役時代に重なってみえる。昭和の時代は、社会活動、娯楽やスポーツなどが上昇傾向にあり、そのためのエネルギー消費が増大してきた。結果として、生活も豊かになり、車社会の到来など便利な社会になっているが、一方、温暖化などの環境問題がクロージアップされ、いまそのエコ対策に懸命である。

その上に、経済至上主義から損得思想が強くなり、教育までが点数尊重などに偏りの結果、倫理や道徳観念が低下傾向になっている。最近では、イジメや殺人などの犯罪行為が目につくようになった。

また、いまやグローバル時代といわれて久しいが、日本人は概して国際社会での対話能力が低いといわれる。これは、なにも語学だけの問題ではなく、日本文化にたいする誇りが乏しいことも起因しているのではないか。

永い間、残っていた脱亜入欧の影響は少なくなってきたが、いまや日本の伝統的な文化を尊重しつつ、政治、経済、技術などの質的向上を追及する時代になった。

私にとって、「昭和」は「活動と反省を凝縮した実人

生の時代」と位置づけているが、このような時代の経験や習得知識を活用しながら、平成の現在への貢献を忘れずに生きていきたい。昭和に生きた自分を再認識するこの頃である。



昭和を生きて

岩崎 洋一郎

私の昭和は、波乱万丈の一句に尽きる。同時代の皆も第二次大戦を生き抜いたという点で、他の世代には無い得がたい体験をしたと言える。しかし、私の場合は、それを更に色濃くした理由がある。即ち、当時まだ珍しかった帰国子女という経歴を背負っていたからである。一九三〇年代に海外生活を出来たのは、一握りの人たちであった。父は三菱商事に勤め、海外勤務が多かった。私が三歳になった時点で、父はニューヨークに赴任した。当時、渡米は船便であり、海外勤務になると短期に帰国できない。我が家の場合も足掛け七年の長きにわたった。その頃のニューヨークには、日本人は百人いただろうか。私の住んだ町は、日本人はおろか、中国人も黒人も居ないオールホワイトであった。従って、英語すくめ、当然日本語は完全に忘れた。両親が互いに話すとき以外は、接する機会が皆無なのだから無理もない。

日本に帰国したのは、一九三八年。日本はもうシナ事変を起こし、戦況は膠着し、英米との関係は、つるべ落としに悪化していつていた。一九三九年から、欧米の映画や音楽、そして文学も、排斥・禁止の対象となった。九歳の少年の眼に映った祖国の印象を、率直に述べよう。まず貧しさである。便所は、汲み取り式であり、想定外の野蛮さである。冬の暖房が木炭やタドン練炭であり、一軒家でも灯油による自動式集中暖房になっていた者にとり、辛いことこの上ない。米国では、中流家庭は勿論、労働者階級でもかなり普及していた自家用車が、見当たらない。学校では、私が理解できる唯一の科目の算術で、米国より程度が低いので楽勝であった。ただ、漢字が読めないもので、問題を先生に読んでもらわないと手も足も出ない。最初は、公立尋常小学校に入った。苛めはなかったが、好奇の眼差しでみられ、珍獣扱いで、なんと失礼な国民だろうと思った。移民の国アメリカでは、決して味わうことのなかった疎外感に心寂しく、結局、帰国子女学級のある成蹊に転校した。

やがて始まった戦争について、あえてここで触れまい。

しかし、あれだけ大きな国（大陸横断に高速列車で四日以上かかる）、工業力の差などを日本の大人、特に軍人はどう考えるのか、子供心にも不思議であった。

戦後、鬼畜米英と大声を張り上げて、私のことを敵視し無視していた大人どもの多くが、掌を返すように親米派に衣換えしたのに、人間不信を覚えた。一つの例を記す。戦時中に、明治記念館を見学に行つて、日本史を彩る出来事の絵画群をみた。その中の一つを選んで、詩を書く宿題が出た。私はベリーの来航を選び、詩の中で黒船の渡来を「威風堂々」と表した。それを先生が、「野心満々」と直した。封建時代を吹き飛ばす外圧であり、科学力と軍事力の圧倒的差を認識させた大事件と考えていた私にとって、この訂正はショックであった。もっと

ショックだったのは、その先生が戦後、アメリカ礼賛に走ったことである。こんな信念のない人が、子供を教えることが良いのか、深く疑問に思った。

戦後第一回と第二回の日米学生会議に参加した。未だ旧制高校一年生であったので、面白半分の好奇心からだった。言葉が出来ても内容が伴わないと駄目だと痛感

した会議でもあった。印象的だったのは、日本側に復員軍人が加わり、米国側は現役の占領軍であるにも拘らず、何のトラブルもなかったことである。つい半年前には銃を向け合っていた若者たちが、卓を囲んで歓談している。それは、今思い出しても感激する場面であり、それに参加できたことは、自分の将来に大きな影響を与えたと実感した。

昭和は、又、私のサラリーマンの時代でもあった。父と相談して、三菱レイヨンに就職した。父の助言は、「三菱系」、「あまり大きくない規模の会社」と「伸び盛りの分野」であった。当時は、合成繊維や石油化学の夜明けであり、急速に成長してゆく時代であった。アセテート繊維やアクリル繊維を企業化しつつあった三菱レイヨンは、正に該当した。初めは、繊維の市場開発や製品開発を担当したが、入社四年目に本社に引き抜かれて、渉外業務を定年まで担うことになった。

仕事の内容は、単なる通訳や翻訳ではなく、海外との折衝業務に手を広げ、新しい事業分野への進出の尖兵となった。繊維産業の歴史を勉強すると、年月の差はあっ

ても、必ず後進国に追い越される事実が判明した。特許に守られている合繊であっても、特許の消滅や迂回でイメージを受けるのは必然と判断した。そして、若年ながら、一九六〇年台半ばから、積極的に多角化と非繊維化を提唱した。と言っても単にお題目を唱えるのではなく、どのような事業に進出すべきか、その方法論も併せ提唱した。具体的には、日本よりも進んでいたアメリカの企業との提携を提唱した。そして、提唱する以上は成算がなければ意味を成さないもので、予め、その潜在提携先と非公式に打診して、筋道をつけるようにした。未だ当時は常務会により許可される貴重な海外出張を、課長代理にもなっていない若造に、容易に許した会社も会社であるが、当時はそのような下克上が許される雰囲気には会社があったのも幸いした。

この仕事に、私が旧制高校で理科を専攻したのが大いに役立った。その時は回り道とも思えたことが、後になって、無駄どころではなく、大いなる武器に変身した。その時その時を、真面目に一生懸命に生きればいつかは報いられると実感した。

具体的な事業として、塗料や表面硬化技術、光学繊維等々があるが、若造の必死の提言を受け入れてくれた会社には、感謝している。それら技術が、三菱レイヨンの現在の利益の源泉になっている事実を見ると、「少しは恩返しが出来たかな」と感慨一入である。

その外、契約や特許侵害等のトラブルに関して、欧米の巨大企業を向こうに回して、対等以上に戦えたことは、誇りでもあるし、後輩たちへの土産でもある。

現役時代は激務で、十二指腸潰瘍で四回もダウンしている。しかし、仕事の達成感は、そんなことを忘れさせる大きな慰めになっている。

昭和を振り返ると、日本が無謀な戦争をし、敗戦を経験し、戦後は復興に命がけで国を挙げて注力した時代であった。その中に生きてゆき、得難い経験をする中で、自身を鍛えて、持てる才能を延ばした時代でもあった。また、国家その他の権力に頼らず、自分で主体的に物事を判断し、進路を決めて行くことの大切さを教えられた時代でもあった。

八十年の人生を振り返って

三宅 劭

あと半年、来年の半ばには満八十歳の誕生日を迎える。旧制高校二年の夏の敗戦時の絶望的な状態を考えると、現在の日本の贅沢さは夢想も出来なかったし、大病もせず生きてきたのは、丈夫に育ててくれた両親に感謝している。

満四歳の時に満州事変が始まり、太平洋戦争の敗戦まで少年時代の大半は、明治維新以後の日本の汚点といえる軍国主義の時代だったが、日中戦争の頃までは、貧しいながら物不足もなく、子供には戦争をしているということは分からなかった。

敗戦までの少年時代には、大きな出来事が三つあった。最初は、小学校一年の一九三四年九月二十一日の室戸台風である。情報伝達方法としてはラジオだけで、天気予報も不完全だったので、この日は普通の雨支度で登校し、正午過ぎに現在の芦屋市・当時兵庫県武庫郡精道村字打

出と呼ばれていた海に近い我が家が高潮で屋根まで水没したことを知った。夕刻になって消防隊の舟で山手の避難所に行き、一夜を過した。

数日後、我が家を見に行き、襖や障子は流され畳の上は泥だらけで変わり果てた家を見て、自然の恐ろしさを身をもって体験した。家族全員は無事だったが、近くでは親しかった何人かが亡くなった。

小学校二年の終わってから五年までの約三年間は、当時京城といっていた朝鮮で過した。滞在中に日中戦争が始まり、かなり広がった我が家には毎週のように満州に赴く若い将校が二人ずつ宿泊、母は内地から来ていた女中さんと一緒に彼らの食事の世話が大変だったようだ。この頃になると戦争が大変だということが良く分かった。

新聞社に勤めていた父は転勤が多く、京城の後、僅か五年間に福岡・長崎・大阪と転勤が相次ぎ、四年間の中学も福岡・長崎・神戸と三回も転校した。中学時代は日中戦争、太平洋戦争の時代で、軍事教練の時間が多くなり、食料難が始まったが大きな事件はなかった。

第二の大きな出来事は、旧制高校二年の一九四五年五

月二十三日、二十五日の東京大空襲で、我が家の隣家まで焼け隣組でも何人もの死者がでたことだ。父は予備役将校として外地に、弟妹は田舎のある親戚に疎開、東京の家は私と母の二人だけだった。それ程広くない庭・家屋にも焼夷弾が落ちたが、町内に下宿していた何人もの立川航空隊勤務の若い将校たちの指揮で、不発焼夷弾を抜き取り近くの川に捨て我が家は焼失を免れた。

第三の最も怖かった出来事は、武蔵野市の成蹊高校のキャンパスの防空壕のすぐ近くに落ちたB29からの爆弾だ。敗戦の直前には何度もB29の編隊が中島飛行機の三鷹工場を爆撃した。ある時、編隊から外れた一機のB29がキャンパスの上空を飛行し、いたずらなのか成蹊高校のキャンパスに爆弾を投下した。直前に防空壕に飛び込み死者は出なかったが、その時の爆弾の落下音の恐ろしさは今も忘れられない。

一九四五年八月十五日の敗戦は、旧制高校二年の時、動員先の恵比寿にあった海軍技術研究所で迎えた。半年余りここで、迎撃用戦闘機「秋水」の燃料に使う高濃度の過酸化水素の製造・研究の助手をやらされ、多くの他

校の生徒たちが工場に動員されていたのに比べると、恵まれた職場だった。

大学では化学を勉強して、当時は肥料会社だった化学会社に入社して研究・製造・企画・営業など多くの経験をしたが、十年近い営業の仕事で多くの人との触れあいがあり、退職後の人生にも大変役立った。

四十歳前後の四年間、ポルトガルに設立した塩ビ工場の工場長として勤務した。日本ではゆっくりした休暇は取り難い時代だったが、この時は現地人従業員に合わせ休暇をとり、車で近隣諸国の田舎を廻り、EUの歴史を学ぶことが出来た。

六十歳で三十七年間勤務した化学会社を定年退職、其の後の十年は恵まれた条件で十分な仕事が出来た。退職して十年、好きな旅に出ることが多いが、旅先で話し合うと、どの国でも自分の国は良い国で、政治家は国民のために良い政治をしているという人が多い。このような質問をされて、わが国位満足度の低い国は珍しい。

国民が良い政治家を選び、良い国だと言えるような国になって欲しいものだ。

『昭和を生きて』

大庭 定男

大正十一年生まれの私が物心ついたときは昭和であった。遠州の村の小学校の入り口に昭和天皇御即位奉祝の杉の葉のアーチが立てられていた事をかすかに思いだす。そして、その後六十九年、崩御の記帳をロンドン大使館で行った。この間の自分はどうであったか、自省をこめて振り返ってみたい。

戦前、暗かった時代 恐慌、思想弾圧、暗殺、大陸で進む戦争、「非常時」、「愛国」が覆いかぶさるような社会、失業者、半島人の押し売りなど重苦しい、暗い時代であった。そのなかで、進学した町の中学校では、映画、食堂、女性との交際などすべてがご法度、一部の悪童たちからいじめられたことも加わり、よけいに暗く、重苦しい世の中であった。

そのなかで、昭和十五年春、根雪の残る小樽高等商業に入学した。故郷を遠く離れた学園にはまだ、自由が残

り、資本主義の矛盾、政府批判なども論ぜられ、未知の世界への目が開かれる思いがした。この自由もつかの間で、昭和十五年秋から戦時体制が日々強化されてゆき、一年余り後、真珠湾となった。高商三年目は六ヶ月短縮、残りの半年分の詰め込み教育が毎日一時間追加、土曜日も平日並みで行われた。

従軍、インドネシアでの体験 卒業直後に入営した私は幸いにも陸軍経理部幹部候補生に合格、小平の経理学校幹部候補生隊での速成教育を終え、昭和十九年一月、ジャワ島バンドン市の独立混成旅団司令部に赴任、衣糧関係の補給業務統括に当たった。司令部では最も若く、軍歴も少なく、部下には頼りない上司であったと思う。また、自ら省みても、初級管理者としてよい点数は与えられない。あまりにも世間を知らない、部下の良識を信じすぎた。しかし、上司、周囲の目は好意的で、大きな問題も無く済んだ。

日本軍の兵力を補うためのジャワ防衛義勇軍の経理要員の教育にも参加した。経験の乏しい新品少尉は日本で習った事しか教えられなかったが、彼等を遠足に連れ出

したり、映画「海軍」を見せたりしたことはよかったと思う。

敗戦後、英、蘭軍の下でJSP（日本降伏軍人）としての苦難については前に書いたことがあるのでここでは触れない。

商社員として 昭和二十二年初夏、復員した私は解体された三井物産系の子会社に入り、昭和二十九年、ハンブルグ駐在員、帰国後は本部の海外関係を担当、昭和四十四年よりロンドン支店勤務となった。管理者としての自分は六十五点位の出来ではなかったか。ゴルフ、碁、マージャンは拒否、共に酒を飲むこともしなかったからには部下もついてこず、周囲も扱い難かったであろう。しかしながら、その私に多くの海外出張、Harvard Business Schoolのコース、そして、最後の約十一年という長い間、ロンドン勤務を許してくれた会社に対し、私は感謝しても感謝しきれない。

ロンドンでの自己発見 昭和五十四年の定年後もロンドンに残り、五年間、野村総研支店に勤務、欧州の産業、マーケット、社会情勢などの調査に当たった。ここで、

客のために調査し、お金を頂く方法を学びえたことはその後の自営に役立った。

ロンドン在住を通じ、多くの英知識人と交わり、彼等が深い専門性と幅広い教養、特に歴史に造詣が深いことに感銘を受けた。私の進むべき道もこれに範をとり、「日英関係史、特に英国における日本人社会の歴史」、「戦争体験、特にJSP体験の語り継ぎ」という調査、発表におくべきと考えるにいたった。これが私の最も得意とし、好きなことであるとの新しい自己発見でもあった。その結果、「戦中ロンドン日本語学校」（中公新書）、これを英訳した「The 'Japanese' War」（Japan Library, UK.）、「ジャワ敗戦抑留日誌一九四六―四七」（龍溪書舎）を出版できた。

残された時間 平成七年、帰国した。スッカリ変わってしまった町並みなどに戸惑うこともあったが、IT化の波にもすんなり入ることが出来た。パソコンの導入により交流範囲を飛躍的に拡大、メールの登録者は七百人を越えている。企業OBペンクラブに入っていたが、生活が豊かになった事を感謝している。

『愛国心にご用心』

石川 正達

教育基本法が改正された。安倍首相は改正の目標として「愛国心」を強調している。この愛国心なるものが曲者である。私たち昭和の前期に青春時代を過ごした者は「忠君愛国」の名によって育てられ、戦争に駆り出された。私の友人を含めて、どれだけ多くの若者が命を落としていったことか。昭和は、日本がこれまで経験したこともない大戦を引き起こした「戦争の時代」であった。

私は大正十年（一九二一）広島市で生まれ、尾道市で少年時代を過ごした。尾道は瀬戸内海に臨み、街の東から浄土寺、西国寺、西に千光寺と、大きな寺に囲まれた商家の連なる、のどかな街である。山陽線の列車が街沿いに走っている。列車を眺めながら線路沿いに小学校へ通った。そのころ「きょう三等〈共産党〉の列車が通ったよ」と子供たちが言い触らしていた。昭和三年（一九二八）三月十五日に共産党員千余人が大量検挙さ

れた。言論弾圧が厳しくなる。

小学校四年の第二学期に入った昭和六年九月、満州事変が勃発。世界大恐慌あとの不景気脱出の手段としての満州進出であった。軍部は天皇の持つ統帥権を握って十五年戦争へのめりこんでいった。

出征兵士を、先生に引率されて日の丸の小旗を振りながら駅まで見送りに行く。夕方には校庭で皇軍の満州進撃の記録映画を、また映画館へ引率されて「守れ南の生命線」といった国策映画を見せられ、天皇に忠義を尽くす尽忠愛国の魂をたつぷりと植えつけられた。

小学校の校庭に奉安殿があった。天皇のご真影と教育勅語が収まっている。毎日これに最敬礼をして校門を入った。当時の憲法には「天皇は神聖にして侵すべからず」とある。

東京に移って中学四年、修身（道徳）の授業を思い出す。先生が厳しく真面目な顔をして「天皇陛下は人の姿をした神、現人神（あらひとがみ）であられる」と教える。生徒は一齐に「人間でしよう」と反撃するも先生は「アキツカミです」と譲らなかった。

その後、紀元二千六百年の式典だったか、在京の学生生徒が皇居前広場を分列行進して天皇の査閲を受ける機会があった。行進しながら天皇の顔を仰ぐと、ひよっとして現人神とは本当かと思えるほど輝いて見えた。

学徒出陣によって京大生から皇軍の一員となり、終戦を迎えたときは岐阜・各務原近くの丘陵地下に、手遅れながら発動機工場を造ろうと、横穴を掘っていた。米軍の捕虜となって働かされるかと思ったが「天皇の軍隊」は解散。私は東京へ帰った。

司馬遼太郎は、日本の敗因について、昭和二年ごろ英国女性評論家が論じていた話を伝えている。「ヨーロッパ人は物事を他国と比較しながら考える。日本の軍人は地方から出てきて幼年学校、士官学校、陸軍大学と、閉鎖社会で育ち、日本の陸軍が世界一だと思っている。他国との比較を知らない者たちが政権を取れば、日本は滅びる」と。正にそうだった。

この敗戦で天皇制はどうなるか。「天皇退位」の声も高まる。帰郷した次の日、皇居前広場へ行ってみた。そこには多くの人々が芝生に正座して二重橋を仰いで祈っ

ていた。

こんな謎々が流れていた。「マッカーサーにかけて何と解く。おへそと解く。そのころは、チン（朕）の上にあり」。進駐軍は天皇の戦争責任について、天皇を処罰すると日本統治を混乱させかねないと、天皇に免罪符を与えていた。

天皇は終戦後の九月にマッカーサー元帥と会ったあと五年間にわたって地方回りの旅を続けた。私が駆け出し記者として新潟勤務中に巡幸があり随行した。郊外の日暮れの森を歩かれている時、写真班の撮影用ライトが破裂した。激しい爆発音に天皇は驚いて無様によるめいた。やはり「神」ではなく人間天皇だと実感した。

ところで、お隣に物騒な国があって、核武装さえ論じられている。しかし、国という偉大な権力によって愛国心が利用されると国民は思わぬところへ運ばれかねない。スポーツの国際大会で、日本選手の活躍に日本人観客は拍手喝采して声援する。誰かに教育された訳でもない。愛国心は自然な人間感情として生まれてくるものではないだろうか。

『太平洋戦争に軍国日本は勝てた』

玉山 和夫

太平洋戦争で日本が完敗したのは痛恨の極みだった。戦争の後半に主要都市は爆撃で破壊され、敗戦後は日本に報復戦争を仕掛けられないように巧妙に仕組まれた米国の占領政策によって戦前の日本の良かったことすら変えられてしまったのである。

日本はどうしても勝つ事は出来なかったのか。米国の格段に高い生産力に支えられた戦力に資源小国で生産力の劣る日本は当然負けるべきであったというのが大方の意見である。確かにこの意見は正しいが、これは二年以上の長期戦の場合にのみ当てはまるのである。

米国の鉄の生産量は当時の日本の三十倍であった。しかしこの鉄が瞬時にして戦車や大砲に変わるのではない。必要な工作機械を発注し工場の建物を建て機械を動かす工員を養成して、始めて戦車や大砲の増産が出来るのである。この間少なくとも一年、生産の規模によって

は二年以上要するのである。

しかし一九四一年日本が英米と開戦した時には米国はドイツに押されていた英国に緊急に莫大な武器援助を行っていたので、武器の予備は殆んど持っていなかったし、また訓練された兵員も多くなかった。モンロー主義を標榜していたから戦争の準備は出来あがっていなかったのである。一方日本は一九三七年以降中国と百万の兵を動員する大規模な戦争を行っていたので戦時体制になっていた。そのため米国の生産体制が平時から軍事優先に切り替えられる前に、日本が短期決戦を狙えば勝ちチャンスがあった。

日本海軍は当時世界最高の実戦能力のある戦闘機（ゼロ戦）を配備していた。この戦闘機は格闘性能が良かったばかりでなく、航続距離が英米のどの戦闘機に比べても五割以上長かった。秘密裏に建造していた超弩級戦艦「大和」も開戦時に完成していた。大和は世界唯一の四十六センチ砲を有する戦艦で米英の最大の四十センチ砲弾を跳ね返した。

このように日本は一九四一年十二月の開戦時には軍事

的に圧倒的に有利な点があったのを生かして、米國が軍備を拡張する前に短期決戦するシミレーションを二種類行つてみた。第一案では實際の歴史のように開戦と同時にハワイの真珠湾に集結していた米戦艦を航空母艦からの航空機で奇襲攻撃してから、史実と離れインド洋で米英連合艦隊を破りスエズまで進出し、ドイツの英本土上陸作戦では日本海軍航空隊が活躍し、大和が艦載機と共に米國西海岸を砲爆撃する。第二案では対米開戦を極力避けようとして真珠湾を攻撃せず、英蘭と戦い東南アジアを占領し、進攻して来た米主力艦隊と決戦し壊滅させる。このいずれの案でも日本は有利に戦争を終えることが出来た。米國の軍事専門家の書いた評論でも日米主力艦隊が決戦すれば米國は戦艦の数では優っていたが航空兵力が劣っていたので敗れた可能性は高いといっている。

このようなシミレーションを元に太平洋戦争で日本は勝てたという固い論文を書いても読んでくれる人が無いと思い、小説の形で書いてみた。第一案は「勝利の日：一九四二年」第二案は「真珠湾を攻撃せず」と仮に題をつけた。「勝利の日」の方は日本が勝てることを読者に納

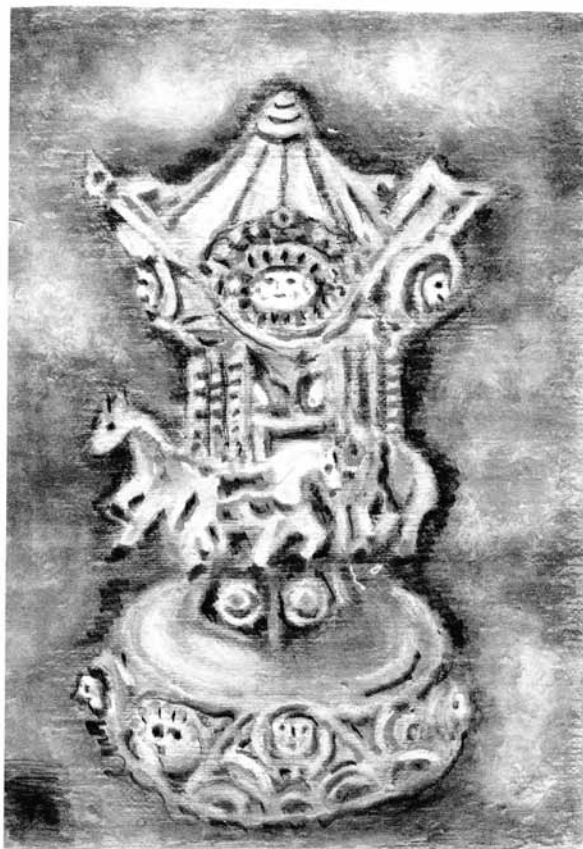
得してもらいたいと戦闘の経過を詳しく書いたので四百字詰で六百五十枚と冗長になったのを反省して、「真珠湾を攻撃せず」は、小説として面白くするよう二、三の山となるエピソードを入れ三百十枚にまとめてみた。

このように紙の上では日本が勝つので筆者は一応満足したが、現在の出版不況ではこういう小説の公刊は難しいので発表の方法を模索している。

ではなぜ日本はこのような勝利の道を選ばずに敗れてしまったかという点、当時の軍人が官僚的なセクシオナリズム自己中心的で大局を見通すことが出来なかったことによる。

開戦当初東南アジアの要地を占領し昇進に値する功績と認められた將軍は、次の作戦を引き受けて失敗すれば折角の昇進が駄目になるので極めて消極的になった。一例をあげると一九四二年四月海軍がセイロン島（スリランカ）付近で英國東洋艦隊を撃破したとき、陸軍は万一輸送船団が沈められると軍司令官の責任になると考えセイロン島上陸部隊を送るのを拒否し、英國を屈伏させる道を閉じてしまったのであった。

創作短編



吉田 邦彦

「片想い六十年」

古川 さちお

一、秘めた少女の恋

七十三歳の伊都子は、山あいの曲がりくねった道を川田村に向かって歩いていて、道が舗装されているのを除くと、緑に満ちた周りの絶景は、五十年前と少しも変わっていない。「従兄妹会」の始まる時刻まではたつぷり余裕があった。あまりの懐かしさに、彼女は栗野駅で乗った十六人乗り「ふるさとバス」を、途中下車して歩くことにした。

初めてこの道歩き、ミサ伯母の住む川田村に向かった日を思い出す。あれは六十一年前、大口高女一年生の夏、広島に原爆が落とされた日だった。戦争も末期、北野町の伊都子の家は配給米の耐乏生活だったので、義姉の苦労を少しでも軽減しようと、農家の伯母宅で夏休みを過ごすことにしたのだった。

着いた平川家では、母屋と隠居家の大家族に笑顔で迎

えられた。「大きくなったねえ」「別嬪さんになって」「北野の方はみんな元気かね」……。

賑やかに騒ぐ中に、ただ一人ひと言も口をきかない少年がいた。伊都子には、幼い頃「コーチャン」と呼んでよく遊んでもらった次男の幸二郎だとすぐ分った。それなのに、なんだか面映くて顔を直視できない。向こうも彼女をまともには見えてくれず、すぐに奥へ引っ込んでいった。

思えば、その日その時が伊都子と幸二郎の恋の始まりだったのに、すぐにはそれに気付かない。しかも、二人は後々、自分だけの片想いだと思いこんでしまう。幸二郎は下宿してK市内の中学校(旧制)二年に在学と、伊都子は聞いている。一つ年上だ。何やら大変な空爆で傷を負い、休暇中は実家で治療するとのことだ。

生来底抜けに明るい伊都子は、平野家の様子や女学校生活を、楽しそうに語って皆を引きつける。伊都子の賑やかなお喋りに耳を傾ける様子の幸二郎も、恋心(こいごろ)を抱いた恥ずかしさで、直接には口をきこうとしないのだった。

親兄弟とは普通に話す幸二郎だが、伊都子が近づくとさっと避けてしまふ毎日だ。一方、伊都子は幸二郎の声が聞こえたり、姿が見えたりすると、何か訳の分らない胸騒ぎを覚えるようになる。

そうするうちに、終戦騒ぎとなった。食糧豊富な伯母宅の生活に魅かれる一方、幸二郎への『えも言われぬ』恋心(こいごころ)の恥ずかしさがある。あと暫くと引きとめられたが、終戦の翌日には帰ることにした。

北野に帰る前、隠居家の裏にあった孟宗竹の幹に、小刀でこっそりと落書きを残したのも思い出す。ハートを二つ彫った下に『大口高女一年一組平野伊都子』とだけ書いた。本当は『平川幸二郎』の名も書き連ねたい気持ち。しかし、恥ずかしくて書けない。

待ちに待った半年後の冬休み、伊都子は胸を躍らせながら、再び伯母宅を訪ねる。帰省中の幸二郎は、上の間の机にかじり付いて読書ばかり。伊都子など相手にする気配も示さない。件の竹も切り片付けられていた。

好きになった頼もしい幸二郎の後姿や横顔をじっと見つめる伊都子の胸は、怪しく躍って、何かしら甘い息苦

しさを覚えるのだった。はつきり『これは初恋だ』と意識するようになる。それでも、神のみが知る「相思相愛」の二人は一言も話さないまま別れてしまった。

その翌年も翌翌年も、休暇がやってくると伊都子は川田村で数日を過ごした。が、二人の間に会話はなかった。将来、幸二郎は東京の大学に進学するという。ミサ伯母と彼は、経済的に大変だというようなことを話しているようだった。

最後に幸二郎を見たのは、彼が高校三年生のときだ。引き締まった顔に白線の帽子を被り、蜜カラなマントを羽織った姿が、伊都子の胸を破裂せんばかりに躍らせたのを、未だにはっきり記憶している。

生後間もなく孤児となった境遇にもかかわらず、大伯父に引き取られた伊都子は、その明るい性格ゆえに幸せな少女時代を過ごす。それでも、義兄の兼秀が嫁を取ってからは、何かと気苦労を覚えるようになった。

そのせいもあり、女学校を終える年に持ち込まれた結婚話には、ためらうことなく乗っていった。十九歳で嫁入りに踏みきったのは、今ひとつの理由があった。

ひそかに恋する幸二郎が、学業を終えるのは早くとも四年後だ。学士様になった幸二郎が、伊都子を嫁にしてくれる可能性は万に一つもないと踏んだのである。

かくて六十年が過ぎた。

今は子供たちも独立して別居している。大分市で華道の教師として、寡婦暮らしをしている伊都子。遠い思い出に浸って歩くうちに、「従兄妹会」の集合場所・照光寺が目の前に現れた。幸二郎に会えるか！ 胸がおどる。

二、少年のプラトニック・ラブ

平川幸二郎が七十四歳になった春、故郷の長兄・一郎から電話が入った。母ミサの三十三回忌を期して、久しぶりに母方の「従兄妹会」をやるから、命日にはお前も必ず参加してくれと言う。

「必ず」と言う理由は、幸二郎が海外勤務で参列できなかった母の葬儀に、遠方から来てくれた伊都子ちゃんが、今回の「従兄妹会」にも出るからだというのだ。伊都子と聞いて彼はぎくりとしたが、兄は微笑んでいる気配。事情はすぐ飲み込めた。

少年時代、幸二郎の初恋の相手が伊都子だったことを、一郎兄も感じていると思ったからである。

幸二郎は少年時同様の片想いを密かに続けている恋しい伊都子に、本当に会えるかどうか確かめたかった。

それで、福岡に住む従弟の相沢靖男に連絡を取り、北九州方面の従姉妹たちの参加予定はどうかと聞いてみた。彼は参加予定者の名を言い、大分の伊都子ちゃんが一番喜んでいるという。「幸二郎さんもあるかしらと言っていましたよ」などと、笑っている。

幸二郎のプラトニック・ラブは、兄弟や従兄妹間に知れ渡っているのかも知れない。恥ずかしい反面、嬉しいことに、少女時代の伊都子も彼に思いを寄せていた気配を感じる。

ここに至ったら、もう恥ずかしがることもない。従兄妹会では堂々と、明るく伊都子ちゃんに接することしよう、少年のように胸を膨らます幸二郎老であった。

さて、片想い同士、否、相思相愛の老男老女、数十年ぶりの再会にどのようなシーンを見せただろうか。

それは読者諸氏の想像にお任せしたい。

一件落着

平尾 富男

一体どうしてこんなことになってしまったのかしら。今はもう夜の九時を過ぎているのに、恵美子さんは家に入って来るなり、何も言わずにご自分の下着類を整理ダンスから出し、クローゼットの洋服をベッドの上に積み上げ始めたりして。お昼過ぎに出かけるときには、とても嬉しそうに、にこにこしながらいそいそとしていたのに。何があったのかしらね。

恵美子さんのご主人、もう長い間札幌の方に単身赴任をしていて、年末年始や休暇で鎌倉のこのご自宅に戻られる以外に、月に一、二度の東京出張のときには、こちらに寄らずにご自分がいつも泊まれる都心のホテルに恵美子さんを呼び出されたりすることがよくあるんです。今日の恵美子さんは、数日前から東京に出て来られているご主人に会うために、久し振りに夫婦揃つてのディナーを銀座で、そして夜はホテルに泊る筈だったのです。

恵美子さんは私よりは年長ですが、私とは同じ趣味仲間でご近所付き合いをする間柄なんです。老父と二人暮らしの私は、その身軽さから恵美子さんがお友達と旅行に出かけたりして家を留守にするときには、いつもここに来るようになっていきます。今日も恵美子さんがとても大事にしているチワワの世話をしながら留守番を頼まれているのですよ。

恵美子さんはもう五十歳を超えている筈なのに、とても淑やかで若作りですから、一人暮らしの年増美人として近所では大変な評判なのです。それが、恵美子さんの今の様子はとても唯事とは思えません。こんなに取り乱した恵美子さんのことを今まで見たこともありません。いきなりこんなことを私に言い出すんですからね。

「私、明日から札幌の主人のマンションに行つてきます。暫くそこに住むことになるかも知れません。だって、主人ったら札幌に女の人がいるらしいんですよ。そんなこと許せますか。主人は否定していますけど、徹底的に調べてなくては、私の気持ちが治まりません。場合によっては主人と別れてもいいと思っています。だってそ

うでしょう、私という妻がいながら、赤ちゃんまでもいるらしいのよ。ええ、証拠はありますよ。赤ちゃんを抱いたその女のひとと主人と一緒に写した写真が、主人の財布の中に入っていたのですからね。白々しくも主人ったら、部下の奥さんの写真だつて言い張るのよ。普通そんな写真を自分の財布に入れて持ち歩きますか。

私たち夫婦に子供がいなかったことは、私だけの所為なんかではないのよ。お医者様からは、健康な身体だから子宝に恵まれないということは考えられないつて、ずっと言われてきたんですからね。もう、この年では無理ですけども。主人の方に原因がありそうだって、お医者様は仰っていたくらいなのよ。それなのに、主人が他の女の人に赤ちゃんを産ませるなんて」

恵美子さんはもう自分で何を話しているのかお分かりにならなくなっているみたい。旅行鞆を持ち出して、あれやこれやと洋服を選んではそこにしまい込んだり、思い直しては入れたばかりの洋服を出したりと、側にいる私が見ていられないほどの取り乱しそうですね。

あつ、ご主人がお帰りになったようです。あら、ご主

人ったら、お一人ではないんだわ。会社の方と一緒に連れしたみたい。

「お帰りなさい」と私が言うと、片目を瞬きさせ、にこにこしながら仰いました。

「恵美子のヤツ、機嫌が悪いでしょう。私の部下の奥さんの写真を見て逆上してしまつたみたいです。仕方ないから、その部下と一緒に来てもらいましたよ。偶々同じ用事で出張に来ていて、同じホテルに泊まっていたから。おーい、恵美子。吉田君にご挨拶なさい」

これで一件落着のようです。でも私、ご主人がお連れしたその方と顔を合わすなり驚いてしまいました。だって、私その人を知っているのですよ。本当は独身で東京住まいなことね。つい最近親戚の結婚式で同じテーブルに座って話をしたばかりですもの。その時初めて会ったのですが、私の甥に当るんですよ。恵美子さんのご主人とは大学の後輩の筈だわ。そういえば、二人ともラグビー部出身。私、ご主人には大きな貸しが出来たようですよ。

“人殺しにも一分の理”天界でも!?

新 山 章 一 郎

天国では天帝がお怒りです。このごろの日本の有様。ついひと昔前まで『殺人がない日はない国がある』と聞いて『想像もつかない』と驚いていた日本。その日本が、今やどこを向いても殺し、殺しの毎日。まるで『振り向けば人殺し』、『犬も歩けば死体に当たる』といったすさまじい殺人国になってしまったのです。

かつて、東洋の紳士国と称えられ、多くの西洋の文人をして『かくのごとく礼節を尊とび、温厚篤実、人情細やかな人たちの集う国がほかにあろうか』とまで書かせた日本。それがなぜ。原因を究明すべく、天帝は神様方に命じ『日本殺人国化調査委員会』を招集され、今までに殺人を犯した日本人たちの『心』を呼び出してヒアリングを行われました。そしてその結末は。

委員長「これ『心』たちよ。お前らは殺人を犯した。人

を殺すなどということは普通、人間の考えることではない。どうしてそんなことを考えるようになったのか、それを聞きたい。自由に話せ」

心1「はい、神様方は人を殺すとは、とんでもないとおっしゃいますが、私はそんな大それたことをしたとは思っておりません。私たちのしたことは、日常どこでも行なわれていることだと思えます」

委員A「これ、これ、ちょっと待て。人を殺すという

ことは誰でもやっている、普通のことだと申すのか」

心1「自由に申せということなので、ぶっちゃけて言いますが、そうです。あんた、テレビちよっとつけてみなはれ。アメリカの映画など、いとも簡単に人を殺してまっせ。ポンポンとな」

委員B「うむ、天界ではすべての国のテレビを見ておる」

心2「そな、話が早いわ。殺人ばかりでっせ。アクションものなんか殺しのオンパレードですわ。そら、映画やさかい、主役同士の対決は仕方おまへん。けどそこへ持っていくまでに何十人となく人が殺されます。主役同士の怨念に関係なく、ただ、見張りをしていただけ

で、いきなり後ろから口をふさがれてプスリと、また、車を運転してただけで、こめかみにピストルを突きつけられて消音銃でプスツと。もっと可哀そうなのは、ただの通行人だっただけで人間が何の容赦もなく殺されます。それぞれ夢も、希望も、家庭もある一人、ひとりの人間がでっせ」

心3「それも仰山、派手に。戦闘場面なんか見てみなはれ。砲弾でも落ちれば一度に五人、十人、いや何十人と盛大に吹っ飛びますで。あれ、みんな死んでしまうのと違いますか。あんなのを見ると、人の命の重さなぞどこにあるんかいなと思いますわ」

委員C「馬鹿な！あれは映画じゃぞ」

心3「そやかてあんだ、人が死ぬのに変わりありやせんがな。ああ簡単に人間が殺されるところを毎日見せ付けられてみんさい、誰でも人の命なんてそんなものだと思うようになるのとちやいますか」

心4「しかも、みんなそれを見て喜んでいなる。いや、ほんまに。あの、悪役が人を殺すとき、じっと狙いをつけて、目えが点のようになって、唇が殺しの快感にゆが

んできて、銃の引き金にかかった指に、じわーっと力がかかってきて、引き金を握り締める瞬間。わくわくしますな。びゃーつと。もう、たまりまへんな。こっちも一生に一度ぐらいは、やりとうなるのと違いますか」委員B「うーむ、そう言えば、『人が殺してみたかった』というだけで殺したのがいたな」

心4「でっしやる。そんな気になるように、殺しそのものを見せ場にして、それで映画会社は大儲けや。人の命なんて映画を盛り上げる小道具のようなもんやと思うようになりまっせ」

委員C「あれは映画だ、映画っ！お前ら、現実と映画の区別もつかんのか！」

心5「映画だといって馬鹿にはなりまへん。わいら、あんまりものを考えない奴らは、あんなの見せつけられれば、殺しは大罪だなんて感覚はなくなります。今、目の前にいる人間を見て、『こいつは俺の人生を盛り上げる小道具や』と考えるようになってもおかしくありません。現に、どこかの奴が言ったじゃないですか『有名になりたくて殺した』と」

心6「殺し場面だけじゃありめへん。よく、カーチェイスなんかでやりますやろ。逃げる車が、広場かなんかで、チマチマと野菜なんか売っていなはるおっさんの屋台をバーンと蹴散らかすのを。あのおっさん、家で待つてゐる家族を、その日の日銭で養おうと、一生懸命、朝早ようからあそこに店出していたのと違いますか。

そんな真剣な人間の営みが一瞬にしてバーや。そんなの小さいうちから見慣れていれば、『自分が窮したら、他人がどうなつてもかめへん、何でもやらかしま』と考えるようになるの当たり前やと思いまへんか」

委員B「いや、しからば日本映画はどうじゃ。時代劇などではばった、ばったと切り殺されておるぞ。それを見て育つたお前らの前の世代では、こんな、日ごとの殺人などなかったぞ」

心6「ありや、ちよんまげ結て草鞋はいた、昔の人間がやつとることです。誰だつてあれは昔のことや、今では通用せんと区別がつきま。けど、アメリカ映画はわいらと同じ服着た、同じ時代の人間がやつとることです。現実味が全然違いますわ」

委員長「まったく、もう。お前らが現実と映画をごちゃ混ぜにして、屁理屈を言い立てておるのは分かるが、なにやら妙に説得力があるのう。まあよい。今日はこれで解散じゃ」

とまあ、こんな具合でヒアリングは終わつたんです。が……。で、委員の神様方のご感想は。

「いやあ。彼らの言うことにも一理あるかもしれん。

確かにアメリカ映画では人が簡単に殺されすぎる。面倒くさいから殺してしまえといったところだ。生命の尊さなどくそ食らえといった感じだな。やたらに自動小銃など撃ちおつて、あの弾が当たれば人が死ぬなどということは考えん。日本でも『そんなことをすれば人が死ぬとわかりきったこと』をやりながら『殺意はなかった』と平然とぬかしている奴らがおる。それに『むしろくしゃしていたから殺した』というのもある。昔は我慢した。しかし、米画を見てみると、我慢などするもんじやないという気になる。アメリカ映画の影響が大きいのかも知れんな」

某日

清水 勝

定年退職の日を前にしていろいろと物思いに耽っている酒井の席に同期入社の大谷浩二が訪ねてきた。彼は関連会社に出向しており、気楽な毎日のようなのである。

「いやあ、久しぶり！一杯やるか」ということで、近くの居酒屋に直行だ。ビールで「乾杯！」。お馴染みの冷奴・枝豆・焼き鳥セットで盛り上がり、焼酎のお湯割りと刺身の盛り合わせとピッチが上がっていく。酔えば同期だ、ついつい昔の癖が出てくる。

「そういえば大谷、昔はこの後にはキャバレーだったな。オイ行ってみるか」

「お前、遅れているな、キャバレーなんぞはもうないゾ」大谷は若いときにはキャバ君といわれたほどの男で、本人曰く「モテモテでね」ということだったのだ。それだけに今もその方面の情報には詳しいのだろう。

「それに代わるものは、上品さから言えば、クラブ、

パブ、キャバクラだな。風俗度からいえばヘルス、イメージ、エステ……まだまだあるが我々向きじゃないかな」

そんな話で盛り上がれば、酒井も決して嫌いじゃないことから、歳を考えて品の良さがあいながらも、キャバレーの良さを残している某パブへ、大谷の案内で向かうことになった。

酒井にとっては久々のネオン街ということだが、定年後は全く縁のない場所になるに違いないと少し淋しく思う。それだけに躊躇するものがあつたが、ここは同期といっしょだという気安さもあり、新入社員気分になり、大谷の元氣さに刺激を受け、酒も入った、定年前のモヤッとした気分もあり、ちよつと冒険するかという気持ちになり、ド派手な店の扉を開けた。

まず、八千円を入り口のカウンターで支払い、ボーイが席に案内する。その際に「ご新規さん2名！」と大きな声を張り上げられビックリ。暫くして若い子が三名やってきて、「アヤでーす！」「真知でーす」「智恵でーす」とそれぞれが握手を求めてくる。両側に我々を挟むよう

にして席に着いた。水割りが作られ、乾きもののつまみが来る。飲むことに目的があるのではなく、若い女の子と話をすることがポイントという雰囲気であった。しかもいずれの女性も水商売という感じはなく、オフィスや大学にいるような服装で、媚を売ることなく、楽しそうに話してくる。そういえば、お客のほうも若い男性は少なく、三十代後半のネクタイ族が主であることに意外な感じがした。

やっぱり世の中は変わったのだ。中年族は接待でネオン街に行くことには縁がなくなり、自分の小使い銭で遊びに来られるのは教育費の負担がまだない連中か三十代独身者ということなのだろう。若い独身者はもともと自分の金で遊ぶことから、より直接的な風俗店に流れているのだと、遊びに来ていながらレポーターになった気分が納得してしまう。

「おじさん達はいくつに見える？」

「そうね、ネクタイの趣味がいいから、お・カ・ネ・持ちのズバリ五十一歳！」

「ピンポン！お見事！」

「ズバリ賞！はい千円！」なんて大谷は遊び慣れた感じで盛り上げていく。

酒井はというと、遊びなれない人間の常套句である「出身は？」「今は何処に住んでいるの？」「昼間は どうしているの？」なんて具合だ。相手もこういう人間には慣れたもの、「青森よ」「今はね、この店の寮」「昼間も仕事したいんだけど、時々コンビニの昼バイトに行く程度」といった具合に適当に答えている。

八千円・五十分は瞬く間に過ぎてしまふ。「お客さん時間ですよ、このまま延長しますか？」

「いや、今日はこれで帰る。また来るからネ」と、大谷が答え、本日はおしまい。

意を決したつもりで大谷について来た酒井には物足りなさが残ったし、遊び人の大谷にしてはえらくあつさりしているのが予想外だった。

「どうしたんだ？」

「いや、あの手の店は最初のサービスタ임だけにするのがコツよ、あのまま延長したら次の三十分は五千円、その次は六千円だよ。バカバカしいじゃないか。ガキっ

ばいお姉ちゃんとおししゃべりするだけだもんな」

「まあ、その代わりズバリ賞の女の子、真知の携帯メールは聞いておいたよ」

いやはや恐れ入りました。これではとても大谷には敵わないと実感した。やはり慣れないことはすべきでないなあと酒井は一人納得した次第。

こうなると、いつもの親父がいる居酒屋に限る。もう十年近く通っている店だし、無愛想だが、三千円程度で酒が飲めるんだから、これ以上の所はないなあ。あの店を大切にしくちやとの思いが帰りの電車の中で強く意識付けられた。

翌日、酒井はいつもの親父の店に立ち寄った。たまたまこの店で顔を会わせる人物と隣り合わせになった。この店はカウンターしかない。お互い、永年の知己を得たように喋る、飲む。でもこの隣人の名は知らない。知らなくていいじゃないか、気持ちよく飲めて、喋れて、そう、ここでは仕事の話なんて出ないよ。人生を語るんだな、あるいは歴史上の人物の話から、旅の話、頭の上がない女房族の話が中心かな、プロ野球の話になるとこ

れは大変だ。巨人ファンも阪神ファンもいるもんな。

しかもこの居酒屋は混むから長居が出来ないのもいい点だ。お客が並びだすと、先に来ている者から順におあいそをするルールが自然にできている。そんな按配だから一時間程で帰ることになる。従って総費用は三千円もかからない。いい店だ、そしていい客だ。ここを大切にしくちやいけない、酒井は昨日の出来事から、身の丈にあったところがハッピーということを知ることができた。

実は昨日の酒井の心づもりは、大谷といっしょだから最後のアバンチュールをとの思いも正直あっただけに、なんとも平凡な展開となってしまった。まあ怪我なくこれで良かったと納得してしまう自分に、意気地なしと思いつながら、それなりに愛着を感じている。

同期の大谷はその後、真知と携帯のメールを通じて次の展開を図っていることだろう。羨ましくもあり、見苦しくもあり、ああやつぱり羨ましいな。でも俺には似合わないから、まあいいか。

定年まであと二ヶ月の酒井だった。

短 信・悠 遊 の 記

セカンド・オピニオンの効用

遠 藤 俊 也

三年前加齢黄斑変性症という厄介な眼の網膜の病気がかかってしまった。最近高齢者間に急に増えている。数年前までは手術もできなかった。ほって置くとほとんど失明状態に近くなる。初期の自覚症状は、ものが歪んで見え、視力もどんどん低下する。私は東邦大学大橋病院（渋谷の近く）に一カ月おきに通い、診察を受け経過を見た。進行が遅ければできるだけ手術は避けたかった。

しかし、本年二月、左目の網膜の中心部（黄斑という）に孔があき、手術で塞ぐ^{ふさ}ほかはないと宣言されてしまった。家族とも相談の結果、他の権威ある医師のセカンド・オピニオンを聞き決断するほかないということになったが、そんな医師は急に見つかるものではない。

何かの機会に、前会長の北田純一さんにこの話をしたら、何十年も世話になっている順天堂大学の内科の先生に相談してみようということになり、一緒に出掛けた。

悠遊の記

橋 本 政 彦

すっかりした先生で、私の説明を聞いた後、その場からすぐ電話をして眼科部長の村上教授とのアポを私のためにとって下さった。地獄に仏である。すぐに東邦大学の主治医に頼み、私の病歴と資料を貰い、それを持って村上教授に会いに行った。

まだ若い新進気鋭の村上教授は、診察を終えるところで私にこう言った。「手術はすべきです。さもないければ円孔から網膜全体の剥離はくりになります。術後のケアはフェイス・ダウンと言って、二、三週間はうつぶせで寝たり、真下を向いて歩いたり、食事をしたりする老年者には大変な苦痛と負担が伴っていたのですが、今は欧米からシリコン・オイル療法が入り定着しかけてるのでだいぶ楽になっています。東邦大学でもこの方法は使われている筈。東邦の竹内教授は網膜の手術では日本の第一人者です。お任せなすつたらよいですよ」。そう言って笑った。そして意見書をその場で書いて封にいれ私に呉れた。

私は手術を決断した。入院手術は五月にした――。

以上、セカンド・オペニオンが効力を發揮した一例と言ってよい。

母を亡くしました三年前頃より、企業OBペンクラブの行事にはご無沙汰致し心苦しく思っております。ここ数年、不定期ではありますが政府外郭団体やいくつかの大学からの「国際ビジネス」関連テーマのセミナーや講義の依頼を受け、その講師を勤めています。他に、週一回は定期的に日本貿易会傘下のNPO法人「国際社会貢献センター」にコーディネーターとして出向いています。そろそろ、これまでの生活を見直し、「悠遊の記」を書ける本来の境地を求めてわが生活のリモデリングに取り組みたい等と考えております。

西多摩郡喜多見領ミニ遍路について

黒崎 昭二

さきに百才にしてエージシュート仲人達成という目標をたてた。そのためには、まず体調を整え百歳まで生きることが絶対必要である。規則正しい生活、適度の運動をしなければならぬ。歩くのが一番であり、それも「強速歩で有酸素運動になるように勢いよく歩け」と、さる健康推進有識者はおっしゃる。しかし、喜寿を過ぎて傘寿を目前にした昨今では、速歩はきつい。そこで、自転車ではどうかと考えた。自転車で走っていれば近隣の街の様子がわかり簡単な社会探訪が出来る。少し遠くへも行けるではないか。

私は今、世田谷の西端、調布市と狛江市に境を接する世田谷区成城に住んでいる。気がついたことがある。この辺には小さな稲荷神社がかなりある。バス通りにも然るべき角々に交通安全やら標識のための石のお地藏さん。道祖神が、そぼくな鑿捌きで彫ったのが立っている。

この近傍住民の遠くない過去（江戸時代末期）の祖先たちが、安全と平和と健康を祈って建立したのであろう。これらを、ミニ霊場と考えた。道行く人は関心がなく、手を合わせる人もほとんど見かけない。しかし、時には花が供えられ、線香の跡もある。草鞋や千羽鶴、たまにはビールもキャラメルもある。やはり、心ある近隣の人がお参りして管理しているに違いない。

十年ほど前に転居してきた私としては、意識して合掌し供え物をすることに決めた。この半年前から足繁く実行し始めた。自転車で廻れば、程々のところにミニ霊場がいくつかあり、道筋を変えて新しい霊場を発見するのも嬉しい。何といってもいい運動である。四国や熊野、秩父のいわゆる名の通った霊場廻りの遍路もよいが、地元の祖先の作ったミニ霊場を廻るのも、ひとつの供養になって価値があるのではなからうか。

これは先ずは世田谷から始めるとして、自転車で無理になつたら、次には電車やバスで地域を拡げてみようかと、何となく気宇が壮大になりワクワクしている。傘寿を目の前にしてもうひとつ大きな夢ができた。

ペン俳句のこの一年 これよりの一年について

平間 真木子

この年の前般は「学士会館」というよき句会場を得て順調に続けて来られたのですが、八月、私の思いがけぬ大患による一か月の入院などで、皆様にご迷惑をお掛けしてしまった。幸い、すでに以前と同じ生活に戻るこゝとが出来、新しい年には更なる句会の充実を図ってゆくつもりです。去る三月の「旧岩崎邸」吟行以来、吟行の機会がなく残念でしたが、今後はもっと積極的に外に出て作る勉強をして行きたいと思っております。「俳句は足で作る」ことを実践してゆきましょう。

大連にて

リラ咲くやかたて租借地たりし街
春榆の花のこぼる交差点
コンテナ埠頭働く人の日焼濃し
みな汗を光らすアジア系の顔
桐咲いて旅順の町のありとのみ
ロシアンティ海より夏の霧湧けり
走馬灯「大和ホテル」の中庭に

伝ふべきこと原稿にペン始め
春陰に明治の気配ありにけり

石川素屯

新聞記者としての心意気を今も忘れることのない方である。それは心の若さでもある。年齢を感じさせない作品

風雪に耐へし老梅香の満てり
古戦場石榴大きく裂けるたる
敗戦の大地に群れて赤とんぼ

がなにより好の美味しいと思っている。三句目は旧岩崎邸
での作、「春陰に明治の気配」とはいみじくもの形容詞、
と拝見している。

老い母の顔の明るし屠蘇の酔
花鳥賊を焼いて一と日の無事思ふ
百年のタイルの褪せず春うらら
糸瓜蔓伸びをり天を目指すごと
古書市のすでに灯りし冬の靄

大泉 子泉

身辺句の楽しさ、その良さを示してくださっている。先
ず身近な人、ものを丁寧な詠んでゆくことの大切さがあ
り、その先に大きな風景を把握してゆく喜びのあること
をおのずと学んでくださることであろう。いつもお元氣
に、明るい発言をなさるのがうれしい。

梅古木幹の窪みに雨水溜め
牙返る古き屋敷に来てをれば
いつせいに芽の揃ひたるライラック
蟬殻を手にして思ふ命とは
領事館前の銀杏の黄葉濃し

亀井 弘次

その日の「席題」による句作りにみなさん専念されると
き、ことに静かに黙考されるのが弘次さんである。
例えば「蟬殻を手にして」とこまでは誰でも考えるこ
と。そのあとに「命とは」と付けるこの一語は重い。
ライラック・領事館の句ののびやかさは楽しいもの。

胡太鼓を打ち韓人の梅まつり
誘蛾灯杏の里の闇深し

北田 純一

夕蟬や湖に動かぬ逆さ富士
カフエテラス銀杏黄葉の散る中に
刀匠のかくれ工房菊薫る

当句会当初よりのベテランにて、勉強もさりながらいつも巧な弁舌にて一同を煙にまく方である。このところ心境の深まりを見せて下さって、今回のお句は特に幅のあるよい作品を揃えられた。「韓人の梅まつり」という異色の句材・表現は楽しいものである。

ふるさとの吟醸酒酌み年迎ふ
身に叶ふ暮しをせむと初日記
花の昼水上バスの汽笛鳴り
古きよき友と向き合ひ花見酒
閑かなる池のほとりの落し文

岸本 義生

故郷の在る方の、故郷の想い出を沢山持つておられる方の仕合せ。東京に生まれ育った私にはその感がことに深い。作者はいつも楽しみに故郷のことを語る人である。その際に何よりなのは「酒」、それも故郷の吟醸酒ということ。作者のご健康を希うばかりである。

初春のシリウス光まさりけり
梅咲きぬ就職率の上向きに
もの捨てに出でし小路に花の雨

関谷 裕彦

「シリウス」の中国名は天狼星。冬の夜空にひとときわかがやき心魅かれる。その反面の作品として「就職率の上向きに」「イラク内戦」とあり、作者の持ち味の深さと

ひと悼む心に落し文拾ふ
糸瓜垂れイラク内戦長引ける

いうものが想像される。「落し文」「花の雨」における叙情は美しい。

過疎の村今日祭笛にぎやかに
雨戸無き北海の家夏の月
蛸やひと日の旅に疲れあて
待ちわびし喜雨を全身もて受くる
寮歌にて棺を閉じぬ沙羅の花

玉山 和夫

北海道の生まれとお聞きしている。北の国に過疎は進んでいるのであろう。そうした或る一日、賑やかな祭笛が響き、久し振りの人々の再会。映画の一シーンを見るような趣きである。「寮歌にて棺を閉じぬ」との句には、或る年齢以上の人々の深い悲しみを痛感。

夏雲や緑濃くなるゴルフ場
ヨット疾走恋の季節の始まりぬ
モスクワの冬やペチカを焚きし日々
古稀を過ぎ菊枕など欲りにけり
晩菊や嫁入りの日の姉のこと

都甲 昌利

おずおずという感じでこの教室に入って来られた日より半年は過ぎ、少しは俳句の面白さを理解されたようである。面白さというのは難しさのことであるが、いつも先ず熱心に歳時記を繰っておられる。揚句の明るさは何よりで、自由なのびやかな句作りを期待したい。

中村 雅道

雪止まず山古志村の去年今年
落し文読めやと妻に渡したる
大夕立千の棚田を叩きけり
空蟬の琥珀に透けて縄がりゐし
実石榴の裂けしを人のみな仰ぐ

句会場のお世話を始めなにかと一手に引受けて頂きまことにありがたい存在である。作品はこのところ大幅に躍進して、句会に置ける高点取りの一人となった。二句目の「落し文」の句には作者の人柄がよく出てをり、季語に対する新しい感覚の句として好の美しい。

西川 知世

折り紙の鶴不揃ひや冬に入る
浅間嶺の噴煙低し冬菜畑
黄落や繰り返し読むマタイ伝
実石榴に昼過ぎよりの雨となり
霧冷の手に受取りしルームキー

ご自身の身の不調に加えて、高齢の母上の介護のこともあり、多忙ゆえの欠席が続いたが、なんとか新しい年にはと抱負を述べておられる。勿論、当句会の星として、若さあふれる新鮮な作品を見せてくださることを期待し、楽しみとしている。

今年一年の川柳勉強会の成果

世話人 平尾富男

新橋の割烹「森田」の座敷を借りての月例勉強会も、二〇〇六年十二月で三十一回を数えました。今年は、時事川柳の選者として活躍中の千葉朱浪氏の見学参加と指導を受ける機会も得られました。メンバー十三人が毎月の兼題を基に、苦しみながら(?)遊び心を駆使した句をひねり出し、「男座敷」でそれを批評し合い、それを肴に楽しんできました。

しかし何と言っても今年最大の「成果」は、二〇〇五年の春に出版の決意表明をして以来の努力が結実し、今年四月、クラブ創立以来はじめての文藝本『卒サラ川柳』『不良老人たちの溜息』の出版を果たせたことです。又、有楽町電気ビルの外国人記者クラブの宴会場を借り、参加者百人近い盛大な出版記念パーティも成功させました。出版直後には毎日新聞他の新聞書評でも紹介されました。中には産経新聞文化欄の書評のように、メンバー一

同が畏れ多くも恥ずかしくなるような過分の好評も得ました。これに気をよくして、柳の下に泥鰌を狙う尊大不遜な気概を以って、メンバー一同研鑽に励み、大いに楽しんでます。

ひとつだけ大変残念なことは、川柳勉強会立ち上げの時の宗匠として指導的な立場で貢献されてきた小林正憲(柳号「閨」)さんが、十二月十一日にご病氣のために亡くなられたことです。十月の勉強会には出席されませんでした。投句を寄せられました。その中の一句「カルテ読む……」が、ご本人も認める将に辞世の句でした。小林さんは、十月にはご自身の既に短い余命を覚悟されておられていたということです。最後に「有り難う」を改めて故人に申し上げ、心からご冥福をお祈りします。

今年一年メンバーが詠んだ句から、各自が自薦した優秀(！)三句を以下(順不同)にご紹介します。(事情により、一部世話人の独断と偏見による選句も含まれますことをご了承ください)

閨

- ① 匂よりも戻り鯉の味の良さ (戻る)
 ② 鬼嫁は豆まき厭で里帰り (まめ)
 ③ カルテ読む医者盗み見覚悟する (読む)

微酔

- ① 雑魚寝して狸寝入りの手が延びる (タヌキ)
 ② 酒場での気炎もどこへ腰砕け (腰)
 ③ 太鼓腹むかし貫禄いま病氣 (腹)

不言

- ① 狸寝の聞き耳立てる姑殿 (タヌキ)
 ② 桜散り静けさ戻る墓地周り (戻る)
 ③ 隠すツノ隠せぬ腹で高砂や (腹)

酔雅

- ① 散る前の色香艶めく姥桜 (散る)
 ② 杯重ね口滑らせて窓際に (口)
 ③ 地獄耳今は補聴器はなせない (耳)

井蛙

- ① チルドレンいずれ狸に化けるかも (タヌキ)
 ② 文化財散るを忘れた花ばかり (散る)
 ③ 戻らぬと解つていても口説く奴 (戻る)

酔深

- ① 後妻得て夜昼まめな定年後 (まめ)
 ② 孫抱けば転ばないと労わられ (転ぶ)
 ③ 口だけの手形空しく定年に (口)

周帆

- ① キス迫り携帯音に気持ち散る (散る)
 ② 夏の花ビキニの腹に目も泳ぐ (腹)
 ③ 眼鏡替え本読む様も板に付き (読む)

昂

- ① 出戻りに良くぞ子連れと喜ばれ (戻る)
 ② 老害が散り際こそと説教す (散る)
 ③ 耳許の明日も来てねでまた通う (耳)

西貢

- ① 設計もメールも偽で揺れる国 (揺れる)
- ② 今日九段明日は千鳥に転び節 (転ぶ)
- ③ ケータイの絵文字読めぬと孫笑い (読む)

だし

- ③ 転びかけ縋るわが身を避ける妻 (転ぶ)
- ① 田舎町狸立つ店懐かしい (タヌキ)
- ② わからない鬼さんどうして豆嫌い (まめ)
- ③ 近頃は転んだだけで救急車 (転ぶ)

安兵衛

- ① 鬼は外豆が掃き出す濡れ落葉 (まめ)
- ② まあひとつ腹を割つてと談合坂 (腹)
- ③ 読まずボツ毎日顔出すエロメール (読む)

しん

- ① 腰を折り謝罪ばかりで舌ペロリ (腰)
- ② 転んでも立ち上がる君好きになる (転ぶ)
- ③ 川柳の深さも読めず苦悶する (読む)

零門

- ① 腰と尻振りよでわかる熟練度 (腰)
- ② 俺のだけネタが少ない上ちらし (散る)



追悼

多田修さん



平成18年
11月22日 逝去
享年77歳

素晴らしい若い友の死をいたむ

三宅 劭

二〇〇六年十一月二十三日夜帰宅してパソコンを開き、平尾さんからの悲報ですとのメールで、多田君が亡くなられたことを知り、信じられない思いです。

多田君と私は旧制成蹊高校の同窓ですが、多田君は私が卒業した

一九四七年に入学されたのですれ違い、専門分野も化学と電機と異なった分野で現役時代を過したので、お目にかかる機会は全くありませんでした。

多田君を知ったのは、八年前、成蹊高校のクラスメイト黒崎君の紹介で、企業OBペンクラブに入会した時です。私の入会した翌月、故杉山修一君が入会され、当時八十人余りだった会で、成蹊出身が黒崎・岩崎・多田・杉山・三宅と五人にもなりました。

一九九八年秋、私が入会した直後に、多田君はEメール勉強会というプロジェクトを立ち上げ、横河電機で素晴らしい仕事をしてパソ

コンに詳しい君は、インターネットの重要性を提唱し、当時はパソコンをやる人が数人しかいなかった会員を指導されました。

その後、プロジェクトはIT勉強会と名を変え、現在では年配者が多いペンクラブで、八割前後の会員がインターネットをやるようになり、会員がデジタル時代に即応した充分な知的活動出来るようになりました。これは多田君の優れた先見性と指導力のお陰です。

IT勉強会の運営については、私と多少意見の違う点もありましたが、四年程前から三鷹産業プラザ内のITルームで、分科会を開

催しました。最後の三鷹での会合の後、二人でＪＲ三鷹駅まで歩いて別れ際に、多田君が「少し疲れたので、暫らく休みたい。これからは若い皆さんにお願いします」と言うので、私は「私は君より三歳年上、先輩だよ」と反論しました。今になって思えば、この時既に多田君は体調を崩しておられたのかも知れません。

二年近く、例会、ＩＴ勉強会に出席されないで、かなり体調が悪いのかと思っておりました。しかし、まだ若い君のこと、来春にはまた元気な姿でお目にかかれると信じていたのに、大変残念です。多田君、どうか安らかに眠り下さい。

成蹊の同窓とはいえ多田君の業績については余り知らず、十一月二十六日、四ッ谷たちばな会館で行われた告別式に参列して、故人と一緒に仕事をされた元横河電機取締役・若狭裕氏の弔辞を拝聴して、多田君が横河電機で素晴らしい仕事をされたことを聞きました。佳子未亡人を通して若狭さんの弔辞のコピーを頂き、転載のお許しを頂きましたので、記載して故人の徳を偲びたいと思います。

弔辞

多田さん。

お元気に回復されて、またお会いできることを願っておりましたのに、このような場面でご挨拶す

ることになろうとは、全く思いもかけず、悲しみに耐えません。

多田さんは、CENTUM生みの親として、世界に先駆けてプロセス制御のデジタル化の時代を開かれましたが、私が配属された、当時の工計研究二課は、多田さんが率いるデジタル制御システムの開発部隊でありました。

多田さんは、マイクロプロセッサもまだなかった時代に、現在の技術を予見され、三つのCのキーワードを提唱されて、CENTUMの開発が進められました。三つのCとは、Control（制御技術）、Computer（計算機の技術）、Communication（通信ネットワーク）

ク技術)のことで、CENTUMアーキテクチャの基本をなすものであります。

世界最先端のDCSを開発しよう、絶対にダウンしないシステムを作ろう、工計研究二課は、多田さんのご指導の下、徹夜もいとわず、寝食を忘れて一丸となって開発に打ち込んだ部隊でありました。帰りの電車もなくなりました。帰った深夜に、多田さんの車で家まで送っていただいたことも幾度もありました。多田さんが電気釜とおせち料理をお持ちになり、工場の七階の職場で正月を迎えたこともありました。このように多田さんは、部下を思いやり、皆が仕事に専念できる環境作りに大変な

心遣いをなされました。そのおかげで、チームが一丸となって、ひとつの目標に向かって没頭することができ、CENTUMが開発できたのだと思います。

NHKにプロジェクトXという番組がありますが、私は、この番組を見るたびに、多田さんが率いたCENTUM開発の歴史が重なって見えてしかたがありません。CENTUM開発にかけた多田さんの執念ともいえる熱意と、多田さんのご指導のもとに寝食を忘れて開発に没頭した技術者たち、そして成果が大きく育って、世界のプロセス産業を支え、そして何よりも横河の経営を支え続けて今日に至っていることは、まさに横河版のプロジェクトXであり、プロ

ジェクトYとして記録に残されているものであります。

CENTUMは、一九七五年に世界初のDCSとして登場し、その後新しい技術を取りいれながら進化し、世界をリードしてきました。その基本アーキテクチャは三十年以上経った今も変わっておらず、このアーキテクチャがあったからこそ今日への進化が可能であったともいえる訳です。このことは、多田さんが提唱されたCENTUMのアーキテクチャが、いかに本質的で優れたものであったかを示しています。

絶対にダウンしないシステム。CENTUMはいまや世界のユーザの信頼を勝ち得ています。さ

さまざまなプラントで二万に近いシステムが稼働しておりますが、99.99999%、セブンナインという驚異的な稼働率実績を更新しています。昨年、CENTUMの三十周年記念行事の一環として、世界のユーザをお招きしたユーザ・会議が、バンコックで開催されました。私は開発者の一人として、このセブンナインの信頼性がいかにして築かれたかについて話し、ユーザの皆様はCENTUM誕生の背景を聞いていただきました。帰国後、多田さんにご報告いたしました。大変喜んでおられました。

このように多田さんが蒔かれた種は、大きく成長し、世界のプロセス産業を、横河のビジネスを支え続けて参りました。これからも

更なる発展を続けてゆくことでしょう。多田さんのご指導を受けた技術者たち、CENTUMの恩恵を受けた世界の多くの人たちに代わりまして、心からお礼を申し上げます。

多田さん、本当に有難うございました。

どうか安らかにお眠り下さい。

最後に音楽がお好きだった多田さんへのお礼とご冥福をお祈りいたしつつ、素人のつたない演奏ですが、気持ちをこめて精一杯演奏し、弔辞とさせていただきます。

二〇〇六年十一月二十六日

若狭 裕



追悼

小林正憲さん



平成18年
12月10日 逝去
享年76歳

関さん逝く

平尾 富男

私が小林さんのお人柄に親しく接するようになったきっかけは、小林さんがこのクラブで川柳の勉強会を立ち上げられる、そのお手伝いをするようになってからです。

小林宗匠による「企業OB川柳」の創刊号が出たのは二〇〇三年九

月のことでした。先日、改めて創刊号を読み直してみると、そこには、長い間の闘病の末つい先日旅立たれた故多田修さんの句と、それに対する小林さんの句評を発見しました。

『デフレにもそろそろ飽きて九千円』という多田さんの句に、小林宗匠が「皮肉が面白いです。読む人に分かりやすく、『株価までデフレに飽きて上がりだす』では如何でしょう」と評されていた。小林さんの株に対する知識の深さと仕手上手が句評に現れているのが微笑ましく思えます。

小説を書くことがご趣味でもあった小林さんは、分野を問わない博識な話題と、温厚で洒脱なお人柄、そしてその優しい笑顔で、

穏やかに人と接してられました。恥じらいの微笑を浮かべながらユーモアたっぷりに、そして時には斜に構えるその姿は、小林さんの生き方を象徴するかのようでした。

小林さんのお通夜で、普段小林さんが語ることのなかったご家族とのご関係についてのお話を伺う機会を得ました。その一つに、小林さんの亡きお父上（小林八三郎氏）が出版された『法象学』という全十二巻の大著を復刻出版するに当たったのエピソードです。小林さんは、林田関というペンネームで『法象学眺望』という挿入序文を書き、これを条件に出版を許可したそうです。

「若いころ経済誌の記者から実業界入りをした父は、多くの有力者の知己を得て、社会的にも或る程度の地位に達したが…」とご尊父について書いておられる小林さんですが、お父上が最後に到達された思想的帰結であるこの大作については、小林さんらしい反骨の精神を剥き出しにして、復刻を迫る出版社を困らせたといいます。

後に、我々の川柳勉強会でも「閨」という柳号を名乗られました。その小林さんが最初に「閨」をお使いになったのはこのときの「林田閨」以来のようです。「さんずいのない閨は、うるおうとかゆたかの意にあらず、はみ出し者のことである」と自らをニコニコし

ながら規定された小林さんの粹な反骨精神の一端を知る思いがします。

小林さんと最後に電話でお話しをしたのは十月の下旬でした。新橋での川柳勉強会には毎月欠かさず出席されていた小林さんが、八月になって「疲れるので暫く投句で勘弁して」と私に手紙をくださいました。十月の電話で「投句するから書き取ってください」と言って二句を読み上げられました。その内の一句『カルテ読む医者盗み見覚悟する』をお聞きして、私は「小林さん一体これは何ですか」とぶつけました。すると、「いや、本気なんだ。辞世の句と受け取ってくれてもいいよ。でも、

必ずもう一度皆さんに会いに出掛けていくことが出来ると思うから、皆さんにはよろしくとだけ伝えてください」

その後、私が小林さんに手紙を差し上げたのが十二月九日でした。十日に急逝された閨さんには、その手紙は届かなかったようですが、遺族の方に事前に読んで頂いた上で、納棺して頂きました。

小林さん、いや閨さん。どうしてもこんなにも先を急がれてしまったのですか。私との、そして勉強会の面々との約束を果たさぬままに。

閨さんも思い残すことが沢山あった筈ですよ。この勉強会で皆が力を合わせて書いた『不良老

人たちの溜息』の本の出版を、本
当に喜んでおられました。次作目
に向けて密に「閨」作品を書き溜
めていたことを私は存じ上げてい
ます。洒脱な閨さんの作品と一緒
に、我々の作品を世の中に出した
いと願っていた矢先のことです。

閨さん、我々の勉強会を、そし
て企業OBペンクラブのこれから
の発展を、その優しい微笑を浮か
べながら見守っていてください。

ペンクラブ一同、心より小林正
憲さんのご冥福をお祈りします。
そして、有り難うございました。
合掌！



「企業OBペンクラブの本年の歩み」

『平成十八年(二〇〇六年)』

年 表 (会員への敬称略)

三月例会(二十日)

一月例会(十九日)

- ・新入会員Ⅱ大月和彦、大西宏
- ・ゲスト講演Ⅱ岩倉信弥氏(ホンダOB)

「車の進化と未来」

- ・新年パーティⅡ会員参加 二十九名

四月例会(十九日)

- ・退会会員Ⅱ石井正紀、中野隆夫、許斐義信
- ・会員講演Ⅱ清水勝
- 「マーケティングの社会的責任と新たな方向」
- ・お花見Ⅱ(三十日)

招待参加 七名

「遙かなる昭和」

二月例会(十六日)

- ・新入会員Ⅱ山下春夫、垂水健一
- ・退会会員Ⅱ村田孝四郎
- ・会員講演Ⅱ都甲昌利

- ・出版記念パーティⅡ川柳勉強会による『卒サラ川柳―不良老人たちの溜息』の出版を記念して開催(十四日)

五月例会(十七日)

「シベリア航空路開設の裏話」

- ・『悠遊』十三号の合評会

六月例会（十五日）

・ 会員講演Ⅱ 山縣正靖

「絵描き、写真機、挿絵描き」

七月例会（十九日）

・ ゲスト講演Ⅱ 坂井保之（プロ野球経営評論家）

「曲がり角のプロ野球」

・ 『悠遊』編集基本方針Ⅱ 新編集委員（大平忠／

安藤晃二）による基本方針の承認

八月例会（夏休み）

・ 入会会員Ⅱ 若林支郎、濱田優、佐久間直正

九月例会（二十二日）

・ 会員講演Ⅱ 大塚滋

「東海道新幹線が誕生するまで」

十月例会（二十三日）

・ ゲスト講演Ⅱ 谷口侑氏（読売新聞社OB）

「フランスの移民政策」

十一月例会（十七日）

・ 退会会員Ⅱ 多田修（物故 合掌！）

・ 「何でも言おう会」Ⅱ 拡大月例会

（月例講演に代わる出席会員によるクラブ運営に関する意見交換会として開催）

十二月例会（二十一日）

・ 退会会員Ⅱ 兄玉進、小島博志、芦刈 克、

岸本義生

小林正憲（物故 合掌！）、

・ ゲスト講演Ⅱ 日米学生会議

（恒例となった現役大学生による活動報告と懇談）

（事務局長記）

年 史

一、役員人事

昨年十一月末、会員投票により二〇〇六年から二年間の任期を務める新理事が選出され、役員人事も次の通り確定された。

会 長	(出版担当理事)	西川 武彦 (新任)
副会長	(運営委員長)	松谷 隆 (再選)
副会長	(事務局長)	平尾 富男 (再選)
理 事		中川路 明 (新任)
理 事		都甲 昌利 (再選)
理 事		金京 法一 (再選)
理 事	(会計担当理事)	大泉 潤 (新任)
監 事		山縣 正靖 (新任)
会計担当	(準役員待遇)	清水 勝 (新任)

二、二〇〇六年度の方針

・①全ての会員が何らかの活動に参加する (参加できる) 運営を心掛ける。

②物書き・物言うユニークな集団として、出版活

動の一層の拡充を図る。

③ホームページの更なる活用を通し、会員のＩＴレベルと広報活動の向上を目指す。

④団塊世代を視野に入れた会員獲得への取り組みを行う。

(二〇〇七年度も引き続き、この方針でクラブ運営を進めることとする。)

三、会員数 (五十八名)

二〇〇五年末の会員数は六十一名。本年度中に七名の新入会員があつた一方で、物故者二名を含め九名の退会者が出た。従つて二〇〇六年末の会員数は五十八名となつた。

・退会会員Ⅱ村田孝四郎、石井正紀、中野隆夫、許斐義信、多田修 (物故)、児玉進、小島博志、小林正憲 (物故)、荻刈 克、岸本義生

・新入会員Ⅱ大月和彦、大西宏、山下春夫、垂水健一、若林支郎、濱田優、佐久間正直

四、月例会会場の変更

・二〇〇六年度一月から、代々木の「国立オリンピック記念青少年総合センター」を月例会他の会合の基地とし、格安な会場費にてクラブ活動を推進することが出来た。これによって月例会他主要な会合について、会員は会場費をクラブの負担で参加できるようになった。来年度以降も、同センターでの活動拠点を確保していく。

五、出版プロジェクト

(一) 同人誌「悠遊」第十三号が三月に発行された。(編集世話人＝小島博志・石川正達)

第十四号以降からは、新しい編集世話人にバトンタッチされ、二〇〇七年二月の第十四号の発行を目標に会員全員が編集委員に協力することになった。(新編集世話人＝大平忠、安藤晃二)

(二) 電子雑誌「ベストライフ・オンライン」には前年に続き「政治・経済・社会の目」および「年金」が掲載された。好評につき来年度にも継続される。

(プロマネ＝大泉潤)

(三) 同じく電子雑誌「ナムコポーロ」は「ナムコトラベル」に社名変更され、一時中断されていた同社の新サイト構築の完成に伴い、十一月より旅行記のサイトへの寄稿が再開された。(プロマネ＝松谷隆、大月和彦)

(四) 月刊誌『Fuji Airways Guide』の旅行記欄「My Cross Road」への寄稿は十月を以て終了となった。(プロマネ＝都甲昌利)

(五) 川柳勉強会のメンバー十三人による、クラブ初挑戦となった文芸書『卒サラ川柳ー不良老人たちの溜息』が、青蛙房より出版された。四月の店頭販売開始を記念し、盛大な出版記念パーティーが外国人記者クラブにて開催された。(プロマネ＝西川武彦、平尾富男)

(六) 念願の電子出版がデジタル書房から、八月に三年前に完成していた翻訳本『ビルマ戦線はこうだった』が出版された。(プロマネ＝松谷隆)

六、ミーティング・勉強会

(一)「英語を読もう会」

発足以来六年目を迎え、会員の勉強の場として定着した。時事問題を中心に英文記事の講読を通じて、読解力向上と国際事情の理解に努めた。

尚、七月より午前十時半から正午までに時間を変更して開催されることになった。(プロマネ＝中村爽・野瀬隆平)

(二)「何でも書こう会」

800字の文字制限にて、エッセイ・論説・超短編小説等を勉強会の場で音読発表し、出席者全員で自由闊達に批評し合う楽しい文章力向上の勉強会は、新入会員の参加により、楽しい雰囲気の中で発展中。(プロマネ＝野瀬隆平・中村爽)

尚、ここでの批評・修正提案を得て更に作品を推敲したものを、「八〇〇字文学館」として再構成してホームページに掲載し、広く会員の閲覧を可能にした。将来的には外部発表を踏まえた活動展開も検討中。(プロマネ＝野瀬隆平)

(四)「21世紀サロン」

今年の「21世紀サロン」では、日本を取り巻く国際情勢の分析を中心に、「国際関係における日本の経済課題や政治課題」また間接的・直接的に日本に影響を及ぼす「米露対立、米欧の亀裂、米韓関係の亀裂」といったテーマを取り上げ、出席者の自由な意見開示を求めてきた。来年はより多くの会員の参加を得て、更に活発な意見交換と勉強活動を展開したい。(プロマネ＝金京法)

(五)「IT勉強会」

IT登録会員は全会員の八割を超えている。従来のメールによる情報交換活動に代えて、昨年六月に立ち上がったクラブのホームページを通して、会員相互のフォーラム形式の交流の場が構築された。更には対外的にもエッセイ・コラム及び会員写真館を通じてのウェブ投稿の場で、ペン活動の広がりを経験した。(ホームページ委員＝中村将陸、松谷隆、平尾富男)

これに対応するため、毎月一回パソコン操作の

基礎的勉強、及びホームページの利用法についての勉強会を続行している。(プロマネ〓中村将陸、松谷隆)

(六) 俳句教室

会員でもある平間真木子先生の指導のもとで会員相互の熱心な研鑽が続けられた。年二回の吟行以外は、学士会館にて勉強会を開催している。月例歳時記のクラブ・ホームページへの公開掲載も昨年に引き続いて行われている。

(世話人〓中村将陸)

(七) 川柳勉強会

二〇〇四年六月より新橋の割烹「森田」で毎月勉強会を開催、出席者全員による和氣藹々とした雰囲気の中で選句・句評を行い、企業OBらしい川柳を研鑽している。

更に、昨年五月には川柳勉強会独自の出版プロジェクトを立ち上げ、今年四月には目標通りに念願の単行本『卒サラ川柳―不良老人たちの溜息』の出版を成功させた。(世話人〓平尾富男)

七、来年度役員

十二月末で現役員体制の一年目が終了し、任期満了となる二年目に向けて全役員が来年度を続投する。

会長 (出版担当理事)	西川 武彦
副会長 (運営委員長)	松谷 隆
副会長 (事務局長)	平尾 富男
理事	中川路 明
理事	都甲 昌利
理事	金京 法一
理事 (会計担当理事)	大泉 潤
監事	山縣 正靖
会計担当 (準役員待遇)	清水 勝

八、まとめ

クラブ運営の改革を目指して様々な取り組みがなされた。先ずは、新設の会計担当の専任と予算制度の導入による財政健全化を計る体制が確立さ

れた。

クラブの財政問題の根本的改善、クラブ運営上の積極的な財政支出と収入のバランスを図り、より魅力的なクラブ活動を目指すことが前年の「拡大理事会」、「拡大運営委員会」にて確認された。これらの確認事項を基に新役員人事が実現した。

今年も電子雑誌「ベストライフ」への継続投稿活動、新生「ナムコトラベル」への写真旅行記の投稿が十一月から始まった。会員の国際経験を生かし、来年度以降も一層の電子雑誌媒体への掲載拡大を目指す。

一方、クラブの活動の場を印刷媒体だけではなく、作品の電子出版が実現された。

時代の流れと会員の意識の变革に伴い、「企業OBペンクラブ」の在り方と目的に対して、会員の総意を改めて問い直す必要性が出てきていることを再認識させられた一年であった。過去に囚われず、クラブの改革と前進を、会員全員の参加によって実現するための雰囲気づくりの第一歩が踏

み出せた一年でもあった。来年二〇〇七年度、現役員体制の最後の年に向けて、更なる改革の実現が期待される。

(文責・事務局長)



執筆 者 名 簿 (五十音順)

氏 名 (カッコ内は本名)		出 身 会 社	生年
阿部 洋己	あべ ひろき	キリンビバレッジ	1937
安藤 晃二	あんどう てるつぐ	三菱商事	1940
石川 正達	いしかわ まささと	毎日新聞社	1921
今川 確郎	いまがわ かくろう	兼松	1926
岩崎洋一郎	いわさき よういちろう	三菱レイヨン	1929
上原 利夫	うえはら としお	住友商事	1934
鵜飼 直哉	うかい なおや	富士通	1937
榎本喜三郎	えのもと きさぶろう	三井物産 三井船舶	1914
遠藤 俊也	えんどう としや	東京銀行 丸紅	1924
大泉 潤	おおいずみ じゅん	三菱化学	1936
大塚 滋	おおつか しげる	国鉄	1929
大月 和彦	おおつき かずひこ	労働省	1935
大西 宏	おおにし ひろし	松下電器	1933
大庭 定男	おおば さだお	三井物産	1922
大平 忠	おおひら ただし	三菱化学	1938
北田 純一	きただ すみかず	三菱商事	1928
木下 洋介	きのした ようすけ	文化放送	1933
金京 法一	きんきょう ほういち	三菱商事 三菱総研	1933
黒崎 昭二	くろさき しょうじ	新日鉄	1927
佐久間直正	さくま なおまさ	日本郵船	1938
清水 勝	しみず まさる	明治安田生命	1945
莊司 忠志	しょうじ ただし	石川島播磨重工業	1932
杉浦 右藏	すぎうら ゆうぞう	N T T 三菱電線工業	1932
関谷 裕彦	せきや ひろひこ	ローヤル・ネトロト・ラインズ	1932
高橋 孝蔵	たかはし こうぞう	丸紅 松竹	1936
玉山 和夫	たまやま かずお	通産省 日英協会	1919
都甲 昌利	とこう まさとし	日本航空	1933
豊前 華	とよまえ はな		1933
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業	1929
中洲 靖雄	なかす やすお	三菱レイヨン	1927
中村 爽	なかむら そう	日本工営	1933

氏 名 (カッコ内は本名)	出 身 会 社	生年
中村 将陸	富士通	1936
新山章一郎	在日米海軍基地統合人事部	1930
西川 武彦	日本航空	1937
野瀬 隆平	石川島播磨重工業	1938
橋本 政彦	日商岩井	1942
濱田 優	三菱化学	1938
平尾 富男	キヤノン	1942
平間真木子	日本機械輸入協会	1925
藤岡 豊	三菱商事	1932
古川さちお(幸雄)	安宅産業 石川島播磨重工業	1932
松浦 武弘	伊藤忠商事	1939
松谷 隆	富士通	1940
三宅 劭	信越化学	1927
森田 茂	出光興産	1930
山縣 正靖	三菱銀行	1937
山下 春夫	日東化学	1938
吉寄 清巳	関西ペイント	1925
吉田 邦彦	安田生命	1938
渡里 清	山一証券	1938

「悠遊」の編集世話人を今号より任された。兩名共、初めての経験で、またベテラン前任者の石川、小島両先輩の後では、幼子の如くうろろしながら、何とか纏め上げたと言う印象をまぬかれない。出版社との折衝、会員との連絡においてさえ、全てのアクションが緊張を要した。自由テーマ二十一編、特集二十編、創作短編四編、悠遊の記三編、計四十八篇という執筆者諸氏の大いなる協力を頂いた。「昭和を生きて」には皆さんそれぞれの歴史の中で強い思いが表現されたと思う。卒サラのクラブで、「仕事の風景」への参加が比較的少なかったのは、活字にし難い、という側面と「もう結構」なのかもしれない。作業の前半は構成、テーマ作りなど、夢の多い仕事をエンジョイしたもの、後半に入り、実作業の段階ではもう戦争であった。パソコンという文明の利器と、編集側を含めその利用に取り組む人々の悪戦苦闘の渦に巻き込まれた。所知らぬ顔でデジタルデイバイド等と評するやからは、洞察力に欠ける。ビル・ゲイツに仕組まれて人類が未だ不完全な技術の犠牲者になっていると思えてならない。

編集世話人 大平、安藤

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第十四号

二〇〇七年二月十九日発行

編集・発行者 企業OBペンクラブ「悠遊」刊行委員会

代表 西川 武彦

印刷所 株式会社 毎日新聞東京センター

東京都千代田区一ツ橋一〇一
TEL 〇三三二二二五一八〇

連絡先 企業OBペンクラブ事務局 平尾 富男

横浜市青葉区田奈町三三二一（千二二七〇〇六四）

Eメール: hira3321@04itscom.net

クラブURL: <http://www.obpen.com>

口座 三菱東京UFJ銀行海老名支店（409）

企業OBペンクラブ 会計担当 清水 勝
（普通 1086096）